

数理解析研究所 院試過去問解答 (基礎科目)

nabla *

目 次

はじめに	2
平成 25 年度 (2012 年 8 月実施)	3
平成 24 年度 (2011 年 8 月実施)	8
平成 23 年度 (2010 年 8 月実施)	14
平成 22 年度 (2009 年 8 月実施)	19
平成 21 年度 (2008 年 8 月実施)	25
平成 20 年度 (2007 年 8 月実施)	30
平成 19 年度 (2006 年 8 月実施)	35
平成 18 年度 (2005 年 8 月実施)	41
平成 17 年度 (2004 年 8 月実施)	47
平成 16 年度 (2003 年 8 月実施)	53
平成 15 年度 (2002 年 8 月実施)	60
平成 14 年度 (2001 年 8 月実施)	65
平成 13 年度 (2000 年 8 月実施)	70
平成 12 年度 (1999 年 8 月実施)	76
平成 11 年度 (1998 年 8 月実施)	81

*Twitter: @nabla_delta Github: <https://github.com/nabla-delta>

はじめに

数理研の院試問題の解答です。一部の問題には図がありましたが，入れるのがめんどくさいので省略してあります。解答が正しいという保証はありません。また，一部の解答は math.stackexchange.com で見つけたものを参考にしています。別解がある（かもしれない）場合でも解答は一つだけしか書いてありませんし，ここの解答より簡単な解答もあるかもしれません。この文書を使用して何らかの不利益が発生しても，私は責任を負いません。

平成 25 年度 (2012 年 8 月実施)

問 1

次の (i), (ii) に解答せよ.

(i) 次の 3 次正方行列 $A_i (i = 1, 2, 3)$ に対して, A_i^{2012} を求めよ.

$$A_1 = \begin{pmatrix} 0 & 1 & 1 \\ 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}, \quad A_2 = \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 \\ 0 & 1 & 1 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}, \quad A_3 = \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 \\ 1 & 1 & 1 \\ 1 & 1 & 1 \end{pmatrix}.$$

(ii) 行列式

$$\begin{vmatrix} & & b_1 \\ & E_n & \vdots \\ & & b_n \\ a_1 & \cdots & a_n & 0 \end{vmatrix}$$

を求めよ. ただし, n は正整数, E_n は n 次単位行列, $a_i, b_j (1 \leq i, j \leq n)$ は実数とする.

解答. (i) $A_1^2 = \begin{pmatrix} 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$, $A_1^3 = 0$ だから $A_1^{2012} = 0$. これより

$$\begin{aligned} A_2^{2012} &= (I + A_1)^{2012} = \sum_{k=0}^{2012} \binom{2012}{k} A_1^k \\ &= I + 2012A_1 + \binom{2012}{2} A_1^2 \\ &= \begin{pmatrix} 1 & 2012 & 2012 + \binom{2012}{2} \\ 0 & 1 & 2012 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}. \end{aligned}$$

また, $A_3^2 = 3A_3$ から $A_3^{2012} = A_3^2 \cdot A_3^{2010} = 3A_3 \cdot A_3^{2010} = 3A_3^{2011} = \cdots = 3^{2011}I$.

(ii) 第 k 行の $-b_k$ 倍を第 $(n+1)$ 行に足す操作を $1 \leq k \leq n$ に対して行うことで

$$\begin{vmatrix} & & b_1 \\ & E_n & \vdots \\ & & b_n \\ a_1 & \cdots & a_n & 0 \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} & & b_1 \\ & E_n & \vdots \\ & & b_n \\ 0 & \cdots & 0 & -\sum_{k=1}^n a_k b_k \end{vmatrix} = -\sum_{k=1}^n a_k b_k.$$

□

問 2

m と n は正整数で、 $m \leq n$ とする. A と $A_k (k = 1, 2, \dots)$ は m 行 n 列の実行列であって、 $k \rightarrow \infty$ のとき A_k の各成分が、対応する A の各成分に収束するものとする. さらに、 A の階数が m であると仮定する. このとき、十分大きな k について、 A_k の階数が m であることを証明せよ.

解答. A_k, A の第 i 列ベクトルをそれぞれ $a_i^{(k)}, a_i$ とする. 仮定から $1 \leq i_1 < \dots < i_m \leq n$ であって $d := \det(a_{i_1}, \dots, a_{i_m}) \neq 0$ となるものが存在する. $d_k = \det(a_{i_1}^{(k)}, \dots, a_{i_m}^{(k)})$ とおく. A_k は A に各成分で収束するから、 d_k は d に収束する. 行列式は成分についての多項式だから、任意の $\varepsilon > 0$ に対し N があって任意の $k \geq N$ に対し $|d - d_k| < \varepsilon$ となる. $d \neq 0$ だから、 ε を十分小さく取ることによって $d_k \neq 0 (k \geq N)$ と出来る. この時 $m = \text{rank}(a_{i_1}^{(k)}, \dots, a_{i_m}^{(k)}) \leq \text{rank } A_k \leq m$ だから $\text{rank } A_k = m$. \square

問 3

次の (i), (ii) に解答せよ.

(i) 実数 x に対して,

$$\lim_{\varepsilon \rightarrow 0} \left(\operatorname{Arctan} x + \operatorname{Arctan} \frac{x}{x^2 + \varepsilon^2} \right)$$

を求めよ. ただし, Arctan は \tan の逆関数で, $-\pi/2 < \operatorname{Arctan} x < \pi/2$ とする.

(ii) 定積分

$$\int_0^{2\pi} \frac{\sin nx}{\sin x} dx$$

を求めよ. ただし n は正整数とする.

解答. (i)

$$\tan \left(\arctan x + \arctan \frac{x}{x^2 + \varepsilon^2} \right) = \frac{x + \frac{x}{x^2 + \varepsilon^2}}{1 - x \frac{x}{x^2 + \varepsilon^2}} = x \left(1 + \frac{x^2 + 1}{\varepsilon^2} \right) \xrightarrow{\varepsilon \rightarrow 0} \begin{cases} \infty & x > 0 \\ 0 & x = 0 \\ -\infty & x < 0 \end{cases}$$

である. これと $-\pi < \arctan x + \arctan \frac{x}{x^2 + \varepsilon^2} < \pi$ であること, $\arctan x + \arctan \frac{x}{x^2 + \varepsilon^2}$ と x は同符号であることから, 答えは

$$\begin{cases} \pi/2 & x > 0 \\ 0 & x = 0 \\ -\pi/2 & x < 0 \end{cases}.$$

(ii) 求める積分を I_n とおくと

$$\begin{aligned} I_{n+2} - I_n &= \int_0^{2\pi} \frac{\sin(n+2)x - \sin nx}{\sin x} dx = \int_0^{2\pi} \frac{2 \cos(n+1)x \sin x}{\sin x} dx \\ &= \int_0^{2\pi} 2 \cos(n+1)x dx = 0. \end{aligned}$$

これと

$$I_1 = \int_0^{2\pi} dx = 2\pi, \quad I_2 = \int_0^{2\pi} \frac{2 \sin x \cos x}{\sin x} dx = \int_0^{2\pi} 2 \cos x dx = 0$$

より

$$I_n = \begin{cases} 2\pi & n : \text{奇数} \\ 0 & n : \text{偶数} \end{cases}$$

□

問 4

実数 $x > 0$ に対して,

$$f(x) = \int_0^1 \frac{\cos \pi y}{x+y} dy$$

とおく. このとき, 次の (i), (ii) に解答せよ.

(i) $g(x) = f(x) - \frac{2}{\pi^2 x(x+1)}$ とおくとき, すべての $x > 2$ に対して,

$$|g(x)| \leq \frac{C}{x^3}$$

となる定数 C が存在することを証明せよ.

(ii) 極限值

$$\lim_{x \rightarrow +\infty} x \sum_{k=1}^{\infty} f(x+k)$$

を求めよ.

解答. (i)

$$\begin{aligned} f(x) &= \frac{\sin \pi y}{\pi} \frac{1}{x+y} \Big|_0^1 - \int_0^1 \frac{\sin \pi x}{\pi} \frac{-1}{(x+y)^2} dy = \int_0^1 \frac{\sin \pi x}{\pi} \frac{1}{(x+y)^2} dy \\ &= \frac{-\cos \pi y}{\pi^2} \frac{1}{(x+y)^2} \Big|_0^1 - \int_0^1 \frac{-\cos \pi x}{\pi^2} \frac{-2}{(x+y)^3} dy \\ &= \frac{1}{\pi^2} \left(\frac{1}{(x+1)^2} + \frac{1}{x^2} \right) - \frac{2}{\pi^2} \int_0^1 \frac{\cos \pi x}{(x+y)^3} dy \end{aligned}$$

だから

$$\begin{aligned} |g(x)| &= \left| \frac{1}{\pi x^2(x+1)^2} - \frac{2}{\pi^2} \int_0^1 \frac{\cos \pi x}{(x+y)^3} dy \right| \\ &= \frac{1}{\pi x^2(x+1)^2} + \frac{2}{\pi^2} \int_0^1 \frac{1}{(x+y)^3} dy \\ &\leq \frac{1}{\pi x^2(x+1)^2} + \frac{2}{\pi^2} \frac{1}{x^3} \leq \frac{1}{\pi x^3} + \frac{2}{\pi^2} \frac{1}{x^3}. \end{aligned}$$

よって $C = \frac{1}{\pi} + \frac{2}{\pi^2}$ とすれば良い.

(ii) (i) より

$$\left| x \sum_{k=1}^{\infty} g(x+k) \right| \leq x \sum_{k=1}^{\infty} \frac{C}{(x+k)^3} \leq x \sum_{k=1}^{\infty} \frac{C}{(2\sqrt{xk})^3} = \frac{C}{8x^{1/2}} \sum_{k=1}^{\infty} \frac{1}{k^{3/2}} \rightarrow 0 \quad (x \rightarrow \infty).$$

よって

$$\begin{aligned} \lim_{x \rightarrow +\infty} x \sum_{k=1}^{\infty} f(x+k) &= \lim_{x \rightarrow +\infty} x \sum_{k=1}^{\infty} \frac{2}{\pi^2(x+k)(x+k+1)} \\ &= \lim_{x \rightarrow +\infty} \frac{2x}{\pi^2} \sum_{k=1}^{\infty} \left(\frac{1}{x+k} - \frac{1}{x+k+1} \right) \\ &= \lim_{x \rightarrow +\infty} \frac{2x}{\pi^2} \frac{1}{x+1} = \frac{2}{\pi^2}. \end{aligned}$$

□

問 5

実正方行列 A に対して、非負整数列 $R(A)$ を

$$R(A) = (\text{rank}(A), \text{rank}(A^2), \text{rank}(A^3), \dots)$$

で定める。ただし、 $\text{rank}(B)$ は行列 B の階数を表す。正整数 n に対して、

$$\mathbb{S}_n = \{R(A) \mid A \text{ は } n \text{ 次実正方行列}\}$$

とおくとき、次の (i), (ii) に解答せよ。

(i) \mathbb{S}_2 を決定せよ。

(ii) 任意の正整数 n に対して、 \mathbb{S}_n は有限集合であることを証明せよ。

解答. 正則行列 P, Q に対し $\text{rank}(PAQ) = \text{rank}(A)$ だから、

$$\mathbb{S}_n = \{R(A); A \text{ は Jordan 標準形}\}$$

である。また、 $\text{rank}(A)$ を $r(A)$ と略記する。

(i) $A = \begin{pmatrix} \lambda & \\ & \mu \end{pmatrix}$ ($\lambda, \mu \in \mathbb{C}, \lambda\mu \neq 0$) の時 $A^j = \begin{pmatrix} \lambda^j & \\ & \mu^j \end{pmatrix}$ だから $R(A) = (2, 2, 2, \dots)$ 。

$A = \begin{pmatrix} \lambda & \\ & 0 \end{pmatrix}$ ($\lambda \in \mathbb{C}, \lambda \neq 0$) の時 $A^j = \begin{pmatrix} \lambda^j & \\ & 0 \end{pmatrix}$ だから $R(A) = (1, 1, 1, \dots)$ 。

$A = \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}$ の時 $A^j = 0$ ($j \geq 2$) だから $R(A) = (1, 0, 0, \dots)$ 。

$A = 0$ の時 $R(A) = (0, 0, 0, \dots)$ 。

よって

$$\mathbb{S}_2 = \{(2, 2, 2, \dots), (1, 1, 1, \dots), (1, 0, 0, \dots), (0, 0, 0, \dots)\}.$$

(ii)

$$\mathbb{S}_n = \bigcup_{\substack{1 \leq k \leq n \\ n_1 + \dots + n_k = n}} \{R(A); A = \text{diag}(J(\lambda_1, n_1), \dots, J(\lambda_k, n_k)), \lambda_j \in \mathbb{C}\}$$

である。 $S(k; n_1, \dots, n_k) = \{R(A); A = \text{diag}(J(\lambda_1, n_1), \dots, J(\lambda_k, n_k)), \lambda_j \in \mathbb{C}\}$ とおく。 $1 \leq k \leq n, n_1 + \dots + n_k = n$ を満たす $(k; n_1, \dots, n_k)$ は有限個だから、 $S(k; n_1, \dots, n_k)$ が有限集合であることを示せば良い。

・ $\lambda_1 \cdots \lambda_k \neq 0$ の時: $r(J(\lambda_i, n_i)^j) = n_i$ だから

$$r(A^j) = r(\text{diag}(J(\lambda_1, n_1)^j, \dots, J(\lambda_k, n_k)^j)) = \sum_{i=1}^k r(J(\lambda_i, n_i)^j) = \sum_{i=1}^k n_i = n.$$

よって $R(A)$ は (n, n, n, \dots) の 1 種類のみ。

・ $\lambda_1 \cdots \lambda_k = 0$ の時: $\lambda_1 \cdots = \lambda_l = 0, \lambda_{l+1}, \dots, \lambda_k \neq 0$ として良い。 $A_1 = \text{diag}(J(0, n_1), \dots, J(0, n_l)), A_2 = \text{diag}(J(\lambda_{l+1}, n_{l+1}), \dots, J(\lambda_k, n_k))$ とおくと $r(A^j) = r(A_1^j) + r(A_2^j)$ だから $R(A) = R(A_1) + R(A_2)$ 。 $R(A_2)$ は λ_j によらない $\sum_{i=l+1}^k n_i$ が続く数列だから $\#S(k; n_1, \dots, n_k)$ に影響しない。よって $A = A_1$ の場合を示せば良い。改めて $A = \text{diag}(J(0, n_1), \dots, J(0, n_k))$ とおく。 $r(J(0, n_i)^j)$ は広義単調減少だから、 $r(A^j) = \sum_{i=1}^k r(J(0, n_i)^j)$ も広義単調減少。 $r(A) = n - k, r(A^n) = 0$ だから $R(A)$ の種類は $n - k \geq x_1 \geq \dots \geq x_n = 0$ を満たす $(x_1, \dots, x_n) \in \mathbb{N}^n$ の個数以下。これは有限だから $R(A)$ の種類も有限。

以上から $\#S(k; n_1, \dots, n_k) < \infty$ 。

□

平成 24 年度 (2011 年 8 月実施)

問 1

A, B を n 次実正方行列とする. このとき, 次の二条件 (a), (b) は同値であることを示せ.

(a) n 次実正方行列 Q が存在して,

$$A = QB.$$

(b) 任意の $v \in \mathbb{R}^n$ に対して,

$$Bv = 0 \implies Av = 0.$$

解答. (a) \implies (b): $v \in \mathbb{R}^n$ が $Bv = 0$ を満たすなら $Av = BQv = B0 = 0$.

(b) \implies (a): 仮定から $\text{Ker } B \subset \text{Ker } A$ だから, $v_i, \dots, v_i \in \mathbb{R}^n$ を $\text{Ker } B$ の基底とする時, $v_{i+1}, \dots, v_j \in \mathbb{R}^n$ をうまく選んで v_1, \dots, v_j が $\text{Ker } A$ の基底になるように出来る. さらに, v_{j+1}, \dots, v_n をうまく選んで v_1, \dots, v_n が \mathbb{R}^n の基底になるように出来る.

ここで Bv_{i+1}, \dots, Bv_n が \mathbb{R} 上一次独立であることを示す. $c_{i+1}Bv_{i+1} + \dots + c_nBv_n = 0$ ($c_{i+1}, \dots, c_n \in \mathbb{R}$) とすると, $B(c_{i+1}v_{i+1} + \dots + c_nv_n) = 0$ だから $c_{i+1}v_{i+1} + \dots + c_nv_n \in \text{Ker } B$. よって $c_1, \dots, c_i \in \mathbb{R}$ があつて $c_{i+1}v_{i+1} + \dots + c_nv_n = c_1v_1 + \dots + c_iv_i$. ここで v_1, \dots, v_n は \mathbb{R}^n の基底だったから $c_1 = \dots = c_n = 0$. これで示せた.

$\tilde{v}_{i+1} = Bv_{i+1}, \dots, \tilde{v}_n = Bv_n$ とおく. 上で示したことから, $\tilde{v}_1, \dots, \tilde{v}_i \in \mathbb{R}^n$ をうまく選んで $\tilde{v}_1, \dots, \tilde{v}_n$ が \mathbb{R}^n の基底になるように出来る. この時

$$Av_k = \sum_{l=1}^n \alpha_l^{(k)} \tilde{v}_l$$

となる $\alpha_l^{(k)} \in \mathbb{R}$ が存在する.

$$Q = (\tilde{v}_1, \dots, \tilde{v}_n) \left(0_{n \times j} \left| \begin{array}{ccc} \alpha_1^{(j+1)} & \dots & \alpha_1^{(n)} \\ \vdots & & \vdots \\ \alpha_n^{(j+1)} & \dots & \alpha_n^{(n)} \end{array} \right. \right) (\tilde{v}_1, \dots, \tilde{v}_n)^{-1}$$

とおけば

$$\begin{aligned} Q(\tilde{v}_1, \dots, \tilde{v}_n) &= (\tilde{v}_1, \dots, \tilde{v}_n) \left(0_{n \times j} \left| \begin{array}{ccc} \alpha_1^{(j+1)} & \dots & \alpha_1^{(n)} \\ \vdots & & \vdots \\ \alpha_n^{(j+1)} & \dots & \alpha_n^{(n)} \end{array} \right. \right) \\ &= \left(0, \dots, 0, \sum_{l=1}^n \alpha_l^{(j+1)} \tilde{v}_l, \dots, \sum_{l=1}^n \alpha_l^{(n)} \tilde{v}_l \right) \\ &= (0, \dots, 0, Av_{j+1}, \dots, Av_n). \end{aligned}$$

よって $Q\tilde{v}_{i+1} = \dots = Q\tilde{v}_j = 0, Q\tilde{v}_{j+1} = Av_{j+1}, \dots, Q\tilde{v}_n = Av_n$ なので

$$QB(v_1, \dots, v_n) = Q(0, \dots, 0, \tilde{v}_{i+1}, \dots, \tilde{v}_n) = (0, \dots, 0, Av_{j+1}, \dots, Av_n) = A(v_1, \dots, v_n).$$

v_1, \dots, v_n は \mathbb{R}^n の基底だから $\det(v_1, \dots, v_n) \neq 0$. よって $QB = A$. □

問 2

\mathbb{R} 上の関数

$$f(t) = \int_0^1 \frac{e^{-t^2(1+x^2)}}{1+x^2} dx + \left(\int_0^t e^{-x^2} dx \right)^2$$

の具体形を求めよ．積分を用いずにできるだけ簡単な形で表すこと．

解答．第 1 項の積分の被積分関数を $g(x, t)$ とおく． $g(x, t), \frac{\partial g}{\partial t} = -2te^{-t^2(1+x^2)}$ はともに $[0, 1] \times \mathbb{R}$ 上連続だから， x についての積分と t についての微分の順序が交換できて

$$\begin{aligned} f'(t) &= \int_0^1 -2te^{-t^2(1+x^2)} dx + 2 \int_0^t e^{-x^2} dx \cdot e^{-t^2} \\ &= -2e^{-t^2} \int_0^t e^{-s^2} ds + 2e^{-t^2} \int_0^t e^{-x^2} dx \quad (1 \text{ 項目で } s = tx \text{ と置換}) \\ &= 0. \end{aligned}$$

よって

$$f(t) = f(0) = \int_0^1 \frac{1}{1+x^2} dx = \arctan x|_0^1 = \frac{\pi}{4}.$$

□

問 3

A を n 次複素正方行列とする.

(i) n 次複素正則対称行列 S で,

$$Q(v, w) = {}^t v S w \quad (v, w \in \mathbb{C}^n)$$

とおいたときに,

$$Q(Av, w) = Q(v, Aw)$$

となるものがあることを示せ. ただし ${}^t v$ は v の転置を表す.

(ii) n 次複素正則行列 P を取り, PAP^{-1} が対称行列となるようにできることを示せ.

解答. (i) $Q(Av, w) = {}^t v {}^t A S w$, $Q(v, Aw) = {}^t v S A w$ だから, ${}^t A S = S A$ となる S が存在することを示せば良い. A の Jordan 標準形を $X^{-1} A X = J := \text{diag}(J(\lambda_1, n_1), \dots, J(\lambda_k, n_k))$ ($X \in GL_n(\mathbb{C})$) とすれば

$$\begin{aligned} {}^t A S = S A &\iff {}^t (X J X^{-1}) S = S X J X^{-1} \iff {}^t X^{-1} {}^t J {}^t X S = S X J X^{-1} \\ &\iff {}^t J {}^t X S X = {}^t X S X J \iff {}^t ({}^t X S X J) = {}^t X S X J \\ &\iff {}^t X S X J \text{ は対称} \quad \dots (*) \end{aligned}$$

である. $Y_n = \begin{pmatrix} & & 1 \\ & \ddots & \\ 1 & & \end{pmatrix} \in GL_n(\mathbb{C})$ とすると

$$Y_n J(0, n) = \begin{pmatrix} & & 0 \\ & \ddots & 1 \\ & \ddots & \\ 0 & 1 & \end{pmatrix}$$

は対称だから $Y = \text{diag}(Y_{n_1}, \dots, Y_{n_k})$ とおけば YJ も対称. 従って $S = {}^t X^{-1} Y X^{-1}$ とおけば $(*)$ が成立し, Y が対称だから S も対称.

(ii)

$$\begin{aligned} PAP^{-1} \text{ が対称} &\iff PAP^{-1} = {}^t (PAP^{-1}) \iff PAP^{-1} = {}^t P^{-1} {}^t A {}^t P \\ &\iff P X J X^{-1} P^{-1} = {}^t P^{-1} {}^t (X J X^{-1}) {}^t P \\ &\iff {}^t (P X) P X J = {}^t J {}^t (P X) P X \iff {}^t (P X) P X J = {}^t ({}^t (P X) P X J) \\ &\iff {}^t (P X) P X J \text{ は対称} \quad \dots (*)' \end{aligned}$$

である. Y は対称だから, 直交行列 Z があって ${}^t Z Y Z = D := \text{diag}(\mu_1, \dots, \mu_n)$ と書ける. $\tilde{D} = \text{diag}(\mu_1^{1/2}, \dots, \mu_n^{1/2})$, $P = Z \tilde{D} {}^t Z X^{-1}$ とおく ($\mu_j^{1/2}$ の取り方は 2 通りあるがどちらでも良い). $\det D = \det Y \neq 0$ より $\det \tilde{D} \neq 0$ なので $P \in GL_n(\mathbb{C})$. この時

$${}^t (P X) P X = {}^t (Z \tilde{D} {}^t Z) Z \tilde{D} {}^t Z = Z \tilde{D} {}^t Z Z \tilde{D} {}^t Z = Z D {}^t Z = Y.$$

(i) より YJ は対称だから $(*)'$ が成立することが従う. これで示された. \square

問 4

α を正の実数とするとき、次の等式を示せ.

$$\int_{-\infty}^{\infty} \frac{e^{i\alpha x} e^x}{(1+e^x)^2} dx = \frac{2\alpha\pi}{e^{\alpha\pi} - e^{-\alpha\pi}}.$$

解答. 左辺の積分を I , その被積分関数を $f(x)$ とおく. $f(x)$ の特異点は $1+e^x=0$ なる点だから $x=(2n+1)\pi i (n \in \mathbb{Z})$. これらは 2 位の極である. $R>0$ として, 4 点 P_1, \dots, P_4 をそれぞれ $R, R+2\pi i, -R+2\pi i, -R$ とする. 線分 $P_1P_2, P_2P_3, P_3P_4, P_4P_1$ を順に C_1, \dots, C_4 とし. $C_1+\dots+C_4$ 上で積分して

$$\int_{C_1+\dots+C_4} f(x)dx = 2\pi i \operatorname{Res}(f(x), x=\pi i).$$

$R \rightarrow \infty$ の時

$$\begin{aligned} \int_{C_1} f(x)dx &\rightarrow I, \\ \int_{C_3} f(x)dx &= \int_R^{-R} \frac{e^{i\alpha(t+2\pi i)} e^{t+2\pi i}}{(1+e^{t+2\pi i})^2} dt = -e^{-2\pi\alpha} \int_{-R}^R \frac{e^{i\alpha t} e^t}{(1+e^t)^2} dt \rightarrow -e^{-2\pi\alpha} I, \\ \left| \int_{C_2} f(x)dx \right| &= \left| \int_0^{2\pi} \frac{e^{i\alpha(R+it)} e^{R+it}}{(1+e^{R+it})^2} i dt \right| \leq \int_0^{2\pi} \frac{e^{-\alpha t} e^R}{(e^R-1)^2} dt = \frac{(1-e^{-2\pi\alpha})e^R}{\alpha(e^R-1)^2} \rightarrow 0, \\ \left| \int_{C_4} f(x)dx \right| &= \left| \int_{2\pi}^0 \frac{e^{i\alpha(-R+it)} e^{-R+it}}{(1+e^{-R+it})^2} i dt \right| \leq \int_0^{2\pi} \frac{e^{-\alpha t} e^{-R}}{(1-e^{-R})^2} dt = \frac{(1-e^{-2\pi\alpha})e^{-R}}{\alpha(1-e^{-R})^2} \rightarrow 0. \end{aligned}$$

$x=\pi i$ の近傍で

$$\begin{aligned} 1+e^x &= 1-e^{x-\pi i} = -(x-\pi i) - \frac{1}{2}(x-\pi i)^2 - \dots \\ \therefore \frac{1}{1+e^x} &= \frac{-1}{x-\pi i} \frac{1}{1+\frac{1}{2}(x-\pi i)+\dots} = \frac{-1}{x-\pi i} \sum_{n \geq 0} \left(-\frac{1}{2}(x-\pi i) + \dots \right)^n \\ &= \frac{-1}{x-\pi i} \left(1 - \frac{1}{2}(x-\pi i) + \dots \right) = \frac{-1}{x-\pi i} + \frac{1}{2} + \dots \\ \therefore \frac{1}{(1+e^x)^2} &= \frac{1}{(x-\pi i)^2} - \frac{1}{x-\pi i} + \dots \end{aligned}$$

これと

$$\begin{aligned} e^{i\alpha x} e^x &= e^{(1+i\alpha)(x-\pi i)} e^{(1+i\alpha)\pi i} = -e^{-\pi\alpha} e^{(1+i\alpha)(x-\pi i)} \\ &= -e^{-\pi\alpha} (1 + (1+i\alpha)(x-\pi i) + \dots) \end{aligned}$$

より

$$\begin{aligned} \frac{e^{i\alpha x} e^x}{(1+e^x)^2} &= -e^{-\pi\alpha} (1 + (1+i\alpha)(x-\pi i) + \dots) \left(\frac{1}{(x-\pi i)^2} - \frac{1}{x-\pi i} + \dots \right) \\ &= -e^{-\pi\alpha} \left(\frac{1}{(x-\pi i)^2} + \frac{i\alpha}{x-\pi i} + \dots \right) \end{aligned}$$

よって

$$\begin{aligned} I + 0 - e^{-2\pi\alpha} I + 0 &= 2\pi i (-i\alpha e^{-\pi\alpha}) = 2\pi\alpha e^{-\pi\alpha}. \\ \therefore I &= \frac{2\pi\alpha e^{-\pi\alpha}}{1-e^{-2\pi\alpha}} = \frac{2\pi\alpha}{e^{\pi\alpha} - e^{-\pi\alpha}} \end{aligned}$$

□

問 5A

閉区間 $[0, 1]$ 上の実数値関数 $f(x)$ が、すべての $x \in [0, 1]$ において

$$\overline{\lim}_{y \rightarrow x} \frac{f(y) - f(x)}{y - x} \leq 1$$

を満たすならば、 $f(1) - f(0) \leq 1$ であることを示せ。ただし、 $\overline{\lim}$ は上極限を表す。

解答. 任意に $\varepsilon > 0$ を取る. 仮定より, 任意の $x \in [0, 1]$ に対し $\delta(x) > 0$ があって $|y - x| < \delta(x)$ の時 $\frac{f(y) - f(x)}{y - x} \leq 1 + \varepsilon$ が成り立つ. よって

$$\begin{aligned} f(y) - f(x) &\leq (1 + \varepsilon)(y - x) \quad (y \in (x, x + \delta(x))) \\ f(y) - f(x) &\geq (1 + \varepsilon)(y - x) \quad (y \in (x - \delta(x), x)). \end{aligned}$$

これより $0 < y < \delta(0)$ において $f(y) - (1 + \varepsilon)y \leq f(0)$. よって $f(y) - (1 + \varepsilon)y \leq f(0)$ が成り立つような区間 $[0, L]$ が存在する. そのような最大の $L < 1$ が存在したとすると, $L < y < L + \delta(L)$ において $f(y) - (1 + \varepsilon)y \leq f(L) - (1 + \varepsilon)L \leq f(0)$. これは L の最大性に反する. よって任意の $y < 1$ に対し $f(y) - (1 + \varepsilon)y \leq f(0)$ だから, $y \nearrow 1$ として

$$\lim_{y \nearrow 1} f(y) - (1 + \varepsilon) \leq f(0).$$

一方 $1 - \delta(1) < y < 1$ において $f(y) - f(1) \geq (1 + \varepsilon)(y - 1)$ だから $y \nearrow 1$ として

$$\lim_{y \nearrow 1} f(y) - f(1) \geq 0.$$

よって $f(1) \leq \lim_{y \nearrow 1} f(y) \leq f(0) + 1 + \varepsilon$ を得る. $\varepsilon > 0$ は任意だから $f(1) - f(0) \leq 1$.

□

問 5B

実数 $r > 1$ に対して \mathbb{R} の部分集合 C を次のように定義する.

$$\begin{aligned} C_0 &= \{x \in \mathbb{R} \mid 0 < x < 1\}, \\ C_{n+1} &= \left\{ \frac{x}{r} \mid x \in C_n \right\} \cup \left\{ \frac{r-1+x}{r} \mid x \in C_n \right\} \quad (n = 0, 1, 2, \dots), \\ C &= \bigcap_{n=0}^{\infty} C_n. \end{aligned}$$

このとき, C は無限に多くの点を含むことを示せ.

解答. $1 < r < 2$ の時 $C_1 = (0, \frac{1}{r}) \cup (\frac{r-1}{r}, 1) = (0, 1)$ だから帰納的に $C_n = (0, 1)$. よって $C = (0, 1)$ だから $\#C = \infty$. 以下 $r \geq 2$ とする. まず

$$C_n = \bigcup_{\varepsilon_j^{(n)} \in \{0,1\}} \left((r-1) \sum_{j=1}^n \varepsilon_j^{(n)} r^{-j}, (r-1) \sum_{j=1}^n \varepsilon_j^{(n)} r^{-j} + r^{-n} \right)$$

となることを帰納法で示す. ただし $n=0$ の時の \sum は 0 とみなす. $n=0$ の時は自明. n で正しい時

$$\begin{aligned} C_{n+1} &= \bigcup_{\varepsilon_j^{(n)} \in \{0,1\}} \left\{ \left((r-1) \sum_{j=1}^n \varepsilon_j^{(n)} r^{-j-1}, (r-1) \sum_{j=1}^n \varepsilon_j^{(n)} r^{-j-1} + r^{-n-1} \right) \right. \\ &\quad \left. \cup \left((r-1)r^{-1} + (r-1) \sum_{j=1}^n \varepsilon_j^{(n)} r^{-j-1}, (r-1)r^{-1} + (r-1) \sum_{j=1}^n \varepsilon_j^{(n)} r^{-j-1} + r^{-n-1} \right) \right\} \\ &= \bigcup_{\varepsilon_j^{(n+1)} \in \{0,1\}} \left((r-1) \sum_{j=1}^{n+1} \varepsilon_j^{(n+1)} r^{-j}, (r-1) \sum_{j=1}^{n+1} \varepsilon_j^{(n+1)} r^{-j} + r^{-n-1} \right) \end{aligned}$$

だから $n+1$ でも正しい. これで示せた.

今 $P = \{A \subset \mathbb{N}; \#A = \#(\mathbb{N} \setminus A) = \infty\}$ とおき, $f: P \rightarrow \mathbb{R}$ を $f(A) = (r-1) \sum_{j \geq 1} \chi_A(j) r^{-j}$ で定める. ここで $\chi_A(j)$ は A の定義関数. $f(P) \subset C$ を示す. 任意に $A \in P, n \geq 0$ を取る. $n_1, n_2 > n$ なる $n_1 \in A, n_2 \in \mathbb{N} \setminus A$ が存在するから

$$(r-1) \sum_{j=1}^n \chi_A(j) r^{-j} < f(A) < (r-1) \sum_{j=1}^n \chi_A(j) r^{-j} + (r-1) \sum_{j>n} r^{-j} = (r-1) \sum_{j=1}^n \chi_A(j) r^{-j} + r^{-n}.$$

よって

$$f(A) \in \left((r-1) \sum_{j=1}^n \chi_A(j) r^{-j}, (r-1) \sum_{j=1}^n \chi_A(j) r^{-j} + r^{-n} \right) \subset C_n.$$

n は任意だから $f(A) \in C$. ゆえに $f(P) \subset C$. 次に f は単射であることを示す. 異なる $A, A' \in P$ に対し $k = \min\{j; \chi_A(j) \neq \chi_{A'}(j)\}$ とおく. $\chi_A(k) = 1, \chi_{A'}(k) = 0$ として良い. この時

$$\begin{aligned} f(A) - f(A') &= (r-1) \left(r^{-k} + \sum_{j>k} (\chi_A(j) - \chi_{A'}(j)) r^{-j} \right) \\ &> (r-1) \left(r^{-k} - \sum_{j>k} r^{-j} \right) = r^{-k}(r-2) \geq 0 \end{aligned}$$

だから f は単射. よって $\#C \geq \#P$ である. 任意の $k \geq 2$ に対し $\{n^k; n \in \mathbb{N}\} \in P$ だから $\#P = \infty$. 従って $\#C = \infty$. □

平成 23 年度 (2010 年 8 月実施)

問 1

次の (i), (ii) に解答せよ.

(i) n 次実正方行列 A が $A^2 + I = 0$ を満たすとする. (ただし, I は単位行列を表す.) このとき, n は偶数であることを示せ.

(ii) 正の整数 m に対して, 次の積分を求めよ.

$$\int_0^\infty \frac{dx}{1+x^{2m}}.$$

解答. (i) $0 \leq |A|^2 = |A^2| = |-I| = (-1)^n$ だから n は偶数.

(ii) 積分を I_m とおく. $R > 0$ を十分大として

$$C_1 = \{x; 0 \leq x \leq R\},$$

$$C_2 = \{x = Re^{i\theta}; 0 \leq \theta \leq \pi/m\},$$

$$C_3 = \{x = re^{\pi i/m}; 0 \leq r \leq R\}$$

として $C = C_1 + C_2 + C_3$ とおく. I_m の被積分関数は C 上正則で, 極のうち C が囲む領域にあるものは 1 位の極 $x = e^{\pi i/2m}$ のみ. よって

$$\int_C \frac{dx}{1+x^{2m}} = 2\pi i \operatorname{Res} \left(\frac{1}{1+x^{2m}}, x = e^{\pi i/2m} \right).$$

ここで $R \rightarrow \infty$ の時

$$\begin{aligned} \int_{C_1} \frac{dx}{1+x^{2m}} &\rightarrow I_m, \\ \left| \int_{C_2} \frac{dx}{1+x^{2m}} \right| &= \left| \int_0^{\pi/m} \frac{iRe^{i\theta} d\theta}{1+(Re^{i\theta})^{2m}} \right| \leq \int_0^{\pi/m} \frac{Rd\theta}{R^{2m}-1} = \frac{\pi}{m} \frac{R}{R^{2m}-1} \rightarrow 0, \\ \int_{C_3} \frac{dx}{1+x^{2m}} &= \int_R^0 \frac{e^{\pi i/m} dr}{1+(re^{\pi i/m})^{2m}} = -e^{\pi i/m} \int_0^R \frac{dr}{1+r^{2m}} \rightarrow -e^{\pi i/m} I_m \end{aligned}$$

であり,

$$\operatorname{Res} \left(\frac{1}{1+x^{2m}}, x = e^{\pi i/2m} \right) = \lim_{x \rightarrow e^{\pi i/2m}} \frac{x - e^{\pi i/2m}}{1+x^{2m}} = \lim_{x \rightarrow e^{\pi i/2m}} \frac{1}{2mx^{2m-1}} = -\frac{1}{2m} e^{\pi i/2m}$$

なので

$$I_m + 0 - e^{\pi i/m} I_m = 2\pi i \cdot \frac{-1}{2m} e^{\pi i/2m} = \frac{-\pi i}{m} e^{\pi i/2m}.$$

よって

$$\begin{aligned} I_m &= \frac{1}{1 - e^{\pi i/m}} \frac{-\pi i}{m} e^{\pi i/2m} = \frac{1}{e^{\pi i/2m} - e^{-\pi i/2m}} \frac{\pi i}{m} \\ &= \frac{1}{2i \sin \frac{\pi}{2m}} \frac{\pi i}{m} = \frac{\frac{\pi}{2m}}{\sin \frac{\pi}{2m}}. \end{aligned}$$

□

問 2

整数 $n \geq 2$ に対して、実 $(2n-1)$ 次元線形空間 V およびその 2 次元線形部分空間の列 W_1, \dots, W_n を考える。このとき、次の条件 (*) を満たす V の $(n-1)$ 次元線形部分空間 U が存在することを示せ。

(*) すべての $i = 1, \dots, n$ に対して $W_i \cap U \neq \{0\}$ 。

解答. 任意の i, j に対し $W_i \cap W_j \neq \{0\}$ とすると

$$2n-1 = \dim V \geq \dim(W_1 + \dots + W_n) = \dim W_1 + \dots + \dim W_n = 2n$$

で矛盾。よって $W_i \cap W_j \neq \{0\}$ となる i, j が存在する。そのような i, j を一組固定する。 $v \in W_i \cap W_j$ なる $v \neq 0$ を取り、 U を v で生成される V の部分空間とする。また、 $k \neq i, j$ に対し $v_k \in W_k$ なる $v_k \neq 0$ を取り U の生成元に追加する。この操作で U の生成元として追加された V の元は $n-1$ 個だから $\dim U \leq n-1$ である。もし $\dim U < n-1$ なら V の元をうまく選んで U の生成元に追加すれば $\dim U = n-1$ と出来る。よって $\dim U = n-1$ 。この時 $v \in (W_i \cap W_j) \cap U = (W_i \cap U) \cap (W_j \cap U)$ と $v \neq 0$ より $W_i \cap U \neq \{0\}, W_j \cap U \neq \{0\}$ 。 $k \neq i, j$ なら $v_k \in W_k \cap U$ だから $v \neq 0$ より $W_k \cap U \neq \{0\}$ 。よってこの U は (*) を満たす。 \square

問 3

実数 $\rho_1, \rho_2, \dots, \rho_n$ に対して, (i, j) 成分が

$$a_{ij} = \begin{cases} \rho_i & (i > j \text{ のとき}) \\ \rho_j & (i \leq j \text{ のとき}) \end{cases}$$

で与えられる n 次対称行列 $A = (a_{ij})$ を考える. 条件 $\rho_1 > \rho_2 > \dots > \rho_n > 0$ が成り立つとき, A は正定値であることを示せ.

解答. A の左上の $k \times k$ 行列を A_k とおく ($1 \leq k \leq n$). A が正定値であることと, 任意の $1 \leq k \leq n$ に対し $\det A_k > 0$ であることは同値であるから, $\det A_k > 0$ を帰納法で示せば良い. $k = 1$ の時は $\det A_1 = \rho_1 > 0$ だから良い. $k - 1$ で正しい時,

$$\begin{aligned} \det A_k &= \begin{vmatrix} \rho_1 & \rho_2 & \cdots & \rho_{k-1} & \rho_k \\ \rho_2 & \rho_2 & & \vdots & \vdots \\ \vdots & & & \vdots & \vdots \\ \rho_{k-1} & \cdots & \cdots & \rho_{k-1} & \rho_k \\ \rho_k & \cdots & \cdots & \cdots & \rho_k \end{vmatrix} \\ &= \begin{vmatrix} \rho_1 - \rho_k & \rho_2 - \rho_k & \cdots & \rho_{k-1} - \rho_k & 0 \\ \rho_2 - \rho_k & \rho_2 - \rho_k & & \vdots & \vdots \\ \vdots & & & \vdots & \vdots \\ \rho_{k-1} - \rho_k & \cdots & \cdots & \rho_{k-1} - \rho_k & 0 \\ \rho_k & \cdots & \cdots & \cdots & \rho_k \end{vmatrix} \\ &\quad (\text{第 } k \text{ 行の } (-1) \text{ 倍を第 } j \text{ 行に足す } (1 \leq j \leq k-1)) \\ &= (-1)^{k+k} \rho_k \begin{vmatrix} \rho_1 - \rho_k & \rho_2 - \rho_k & \cdots & \rho_{k-1} - \rho_k \\ \rho_2 - \rho_k & \rho_2 - \rho_k & & \vdots \\ \vdots & & & \vdots \\ \rho_{k-1} - \rho_k & \cdots & \cdots & \rho_{k-1} - \rho_k \end{vmatrix}. \end{aligned}$$

右辺の $(k-1) \times (k-1)$ 行列を A'_{k-1} とおくと, A'_{k-1} の (i, j) 成分は

$$\begin{cases} \rho_i - \rho_k & (i > j) \\ \rho_j - \rho_k & (i \leq j). \end{cases}$$

仮定より $\rho_1 - \rho_k > \rho_2 - \rho_k > \dots > \rho_{k-1} - \rho_k > 0$ だから, 帰納法の仮定より $\det A'_{k-1} > 0$. よって $\det A_k = \rho_k \det A'_{k-1} > 0$ で k の時も正しい. これで示された. \square

問 4

次の条件 (a), (b) を満たす \mathbb{R} 上の実数値 C^∞ 級関数 $f(x)$ を考える.

- (a) $f(0) = \frac{df}{dx}(0) = 0, \quad \frac{d^2f}{dx^2}(0) \neq 0.$
 (b) $x \neq 0$ に対しては $f(x) > 0.$

このとき, 次の積分 (i), (ii) それぞれについて収束するか発散するかを判定し, その理由を述べよ.

(i)

$$\iint_{|x_1|^2 + |x_2|^2 \leq 1} \frac{dx_1 dx_2}{f(x_1) + f(x_2)}.$$

(ii)

$$\iiint_{|x_1|^2 + |x_2|^2 + |x_3|^2 \leq 1} \frac{dx_1 dx_2 dx_3}{f(x_1) + f(x_2) + f(x_3)}.$$

解答. (a) より $f(x) = x^2 g(x)$ ($g(x) \in C^\infty(\mathbb{R}), g(0) \neq 0$) とおける. $x \neq 0$ の時 (b) より $g(x) = \frac{f(x)}{x^2} > 0$ だから, $g \in C^\infty$ より $g(0) > 0$. よって任意の $x \in \mathbb{R}$ に対し $g(x) > 0$. 従って $g(x)$ の $[-1, 1]$ における最大値, 最小値をそれぞれ M, m とおくと $M, m > 0$ である.

(i) 問題の積分を I_2 とおき, I_2 の積分領域を $R^{-2} \leq |x_1|^2 + |x_2|^2 \leq 1$ ($R \geq 1$) とした積分を $I_2(R)$ とおく. $x_1 = r \cos \theta, x_2 = r \sin \theta$ とおくと

$$\begin{aligned} I_2(R) &= \iint_{R^{-2} \leq |x_1|^2 + |x_2|^2 \leq 1} \frac{dx_1 dx_2}{x_1^2 g(x_1) + x_2^2 g(x_2)} \\ &= \int_0^{2\pi} \int_{R^{-1}}^1 \frac{r dr d\theta}{r^2 \cos^2 \theta g(r \cos \theta) + r^2 \sin^2 \theta g(r \sin \theta)} \\ &\geq \int_0^{2\pi} \int_{R^{-1}}^1 \frac{dr d\theta}{r M (\cos^2 \theta + \sin^2 \theta)} = \frac{1}{M} \int_0^{2\pi} \int_{R^{-1}}^1 \frac{dr d\theta}{r} \\ &= \frac{2\pi}{M} \log R \rightarrow \infty \quad (R \rightarrow \infty) \end{aligned}$$

だから $I_2 = \lim_{R \rightarrow \infty} I_2(R)$ は存在しない.

(ii) 問題の積分を I_3 とおき, I_3 の積分領域を $R^{-2} \leq |x_1|^2 + |x_2|^2 + |x_3|^2 \leq 1$ ($R \geq 1$) とした積分を $I_3(R)$ とおく. $x_1 = r \cos \theta \sin \varphi, x_2 = r \sin \theta \sin \varphi, x_3 = r \cos \varphi$ とおくと

$$\begin{aligned} I_3(R) &= \iiint_{R^{-2} \leq |x_1|^2 + |x_2|^2 + |x_3|^2 \leq 1} \frac{dx_1 dx_2 dx_3}{x_1^2 g(x_1) + x_2^2 g(x_2) + x_3^2 g(x_3)} \\ &\leq \int_0^\pi \int_0^{2\pi} \int_{R^{-1}}^1 \frac{r^2 \sin \varphi dr d\theta d\varphi}{m (r^2 \cos^2 \theta \sin^2 \varphi + r^2 \sin^2 \theta \sin^2 \varphi + r^2 \cos^2 \varphi)} \\ &= \frac{1}{m} \int_0^\pi \int_0^{2\pi} \int_{R^{-1}}^1 \sin \varphi dr d\theta d\varphi = \frac{4\pi(1 - R^{-1})}{m} \leq \frac{4\pi}{m}. \end{aligned}$$

よって $I_3(R)$ は上に有界. また, (b) より $I_3(R)$ は単調増加. 従って $\lim_{R \rightarrow \infty} I_3(R)$ は有限値に収束するので I_3 は存在する. □

問 5

次の条件 (*) を満たす連続写像 $\varphi: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}$ は存在しないことを示せ.

(*) すべての $x \in \mathbb{R}$ に対して $\varphi(\varphi(x)) = -x$.

解答. 条件を満たす φ が存在したとする. $\varphi(x) = \varphi(y)$ とすると $-x = \varphi(\varphi(x)) = \varphi(\varphi(y)) = -y$ より φ は単射. この時 φ は単調増加であるか, 単調減少である. 実際, そうでないとすると $x < z < y$ であって $\varphi(x), \varphi(y) < \varphi(z)$ または $\varphi(x), \varphi(y) > \varphi(z)$ となるものが存在する. 前者の場合, 中間値の定理より, 十分小さい $\varepsilon > 0$ に対し $\varphi(x_0) = \varphi(z) - \varepsilon$ となる $x_0 \in (x, z)$ と, $\varphi(y_0) = \varphi(z) - \varepsilon$ となる $y_0 \in (z, y)$ が存在する. これは単射であることに矛盾. 後者の場合も同様に矛盾. よって φ は単調. ここで $\varphi(\varphi(0)) = 0$ より $\varphi(0) = \varphi(\varphi(\varphi(0))) = -\varphi(0)$ だから $\varphi(0) = 0$. もし φ が単調増加なら, $x > 0$ の時 $\varphi(x) > \varphi(0) = 0$ より $-x = \varphi(\varphi(x)) > \varphi(0) = 0$ で矛盾. もし φ が単調減少なら, $x > 0$ の時 $\varphi(x) < \varphi(0) = 0$ より $-x = \varphi(\varphi(x)) > \varphi(0) = 0$ で矛盾. いずれにしても矛盾する. \square

平成 22 年度 (2009 年 8 月実施)

問 1

関数 $f: \mathbb{Z} \rightarrow \mathbb{C}$ に対して $\delta f: \mathbb{Z} \rightarrow \mathbb{C}$ を

$$\delta f(x) = f(x+1) - f(x)$$

と定義する. ある整数 $n \geq 1$ に対して

$$\delta^n f = \underbrace{\delta \circ \cdots \circ \delta}_{n \text{ 個}} f = 0$$

が成り立つとき, 極限

$$\lim_{x \rightarrow \pm\infty} \frac{f(x)}{x^{n-1}}$$

が存在することを示せ.

解答. まず $n \in \mathbb{N}$ に対し $\sum_{j=0}^x j^n$ は x についての $(n+1)$ 次多項式であることを n についての帰納

法で示す. $n=0$ の時は明らか. $n-1$ 以下で正しいとする. $(j+1)^{n+1} - j^{n+1} = \sum_{k=0}^n \binom{n+1}{k} j^k$ を $j=0, 1, \dots, x$ について足して

$$\begin{aligned} (x+1)^{n+1} &= \sum_{j=0}^x \sum_{k=0}^n \binom{n+1}{k} j^k = \sum_{k=0}^n \binom{n+1}{k} \sum_{j=0}^x j^k \\ &= (n+1) \sum_{j=0}^x j^n + \sum_{k=0}^{n-1} \binom{n+1}{k} \sum_{j=0}^x j^k \\ \therefore (n+1) \sum_{j=0}^x j^n &= (x+1)^{n+1} - \sum_{k=0}^{n-1} \binom{n+1}{k} \sum_{j=0}^x j^k \end{aligned}$$

右辺の第 1 項は x についての $(n+1)$ 次多項式, 第 2 項は帰納法の仮定より x についての高々 n 次多項式の和だから, 左辺は x についての $(n+1)$ 次多項式. よって n でも正しい. これで示せた.

問題に戻る. $1 \leq k \leq n$ に対し, $\delta^{n-k} f$ は x についての $(k-1)$ 次式であることを帰納法で示す. $k=1$ の時は $\delta^{n-1} f(x+1) - \delta^{n-1} f(x) = \delta^n f(x) = 0$ だから $\delta^{n-1} f$ は定数関数となり良い. k で正しい時, $\delta^{n-k} f(x) = c_0 + c_1 x + \cdots + c_{k-1} x^{k-1}$ とおけるから

$$\begin{aligned} \delta^{n-k-1} f(x) &= \delta^{n-k-1} f(0) + \sum_{j=0}^{x-1} (\delta^{n-k-1} f(j+1) - \delta^{n-k-1} f(j)) \\ &= \delta^{n-k-1} f(0) + \sum_{j=0}^{x-1} \delta^{n-k} f(j) \\ &= \delta^{n-k-1} f(0) + \sum_{l=0}^{k-1} c_l \sum_{j=0}^{x-1} j^l. \end{aligned}$$

最初に示したことから, 右辺は x についての k 次多項式だから, $k+1$ でも正しい. これで示せた. 特に $k=n$ として f は $(n-1)$ 次多項式だから, $\lim_{x \rightarrow \pm\infty} \frac{f(x)}{x^{n-1}}$ は存在する. \square

問 2

3次元ユークリッド空間 \mathbb{R}^3 内に、原点を端点とする 5 本の半直線が与えられているとする。このうちの 2 本を選び、それらが原点において成す角が高々 90° になるようにできることを示せ。

解答. 半直線と S^2 の交点を $P_i(x_i, y_i, z_i)$ ($1 \leq i \leq 5$) とする. 適当に回転させて $P_1(-1, 0, 0)$ として良い. P_i が $x \leq 0$ にあれば $\cos \angle P_1OP_i = -x_i \geq 0$ だから半直線 OP_1 と OP_i が条件を満たす. よって P_2, \dots, P_5 は $x > 0$ にあるとして良い. 適当に回転させて $P_2(\cos \theta, \sin \theta, 0)$ ($0 \leq \theta < \pi/2$) として良い. $\theta = 0$ なら $\cos \angle P_2OP_i = x_i > 0$ ($i = 3, 4, 5$) だから OP_2 と OP_i が条件を満たす. 以下 $0 < \theta < \pi/2$ とする. もし $x_i \cos \theta + y_i \sin \theta \geq 0$ なら $\cos \angle P_2OP_i \geq 0$ だから OP_2 と OP_i が条件を満たす. よって P_3, P_4, P_5 が $\{x > 0\} \cap \{x \cos \theta + y \sin \theta < 0\} = \{x > 0\} \cap \{y < -x \cot \theta\}$ にある時を考えれば良い.

$$T_{\pm} = \{(x, y, z) \in S^2; x > 0, y < -x \cot \theta, \pm z \geq 0\}$$

とおく. T_{\pm} のうちどちらかは P_3, P_4, P_5 のうち 2 点を含む. $P_i, P_j \in T_+$ の時は

$$\cos \angle P_iOP_j = x_i x_j + y_i y_j + z_i z_j > x_i x_j + x_i x_j \cot^2 \theta = x_i x_j (1 + \cot^2 \theta) > 0$$

だから OP_i と OP_j が条件を満たす. $P_i, P_j \in T_-$ の時も同様. これで示された. □

問 3

$\mathbb{R} \setminus \{0\}$ で定義された関数

$$\frac{\sin x}{x}$$

について次の問に答えよ.

(i) 次の関係を満たす関数 $f(x)$ を求めよ.

$$\frac{\sin x}{x} = \int_0^1 f(sx) ds$$

(ii) x_0 を 0 でない実数とし, $\frac{\sin x}{x}$ の $x = x_0$ における Taylor 展開を

$$\frac{\sin x}{x} = a_0 + a_1(x - x_0) + a_2(x - x_0)^2 + \cdots$$

とするとき

$$|a_n| \leq \frac{1}{(n+1)!} \quad (n = 0, 1, 2, \dots)$$

を示せ.

解答. (i) $sx = t$ と置換すれば

$$\frac{\sin x}{x} = \int_0^1 f(sx) ds = \int_0^x f(t) \frac{dt}{x}. \quad \therefore \int_0^x f(t) dt = \sin x$$

これを微分して $f(x) = \cos x$.

(ii)

$$\begin{aligned} a_n &= \frac{1}{n!} \left(\frac{d}{dx} \right)^n \frac{\sin x}{x} \Big|_{x=x_0} = \frac{1}{n!} \left(\frac{d}{dx} \right)^n \int_0^1 \cos(sx) ds \Big|_{x=x_0} \\ &= \frac{1}{n!} \int_0^1 \left(\frac{\partial}{\partial x} \right)^n \cos(sx) ds \Big|_{x=x_0} \end{aligned}$$

である. ここで

$$\left(\frac{\partial}{\partial x} \right)^n \cos(sx) = s^n \times (\pm \sin(sx) \text{ or } \pm \cos(sx))$$

だから

$$|a_n| \leq \frac{1}{n!} \int_0^1 s^n ds = \frac{1}{(n+1)!}.$$

□

問 4

次の積分を求めよ.

$$\int_0^{\infty} \frac{\cos x}{\cosh(\pi x)} e^{-x^2} dx$$

解答. 積分を I とおく.

$$I = \frac{1}{2} \int_{-\infty}^{\infty} \frac{\cos x}{\cosh(\pi x)} e^{-x^2} dx = \frac{1}{2} \operatorname{Re} \int_{-\infty}^{\infty} \frac{e^{-x^2+ix}}{\cosh(\pi x)} dx$$

である.

$$f(x) = \frac{e^{-x^2+ix}}{\cosh(\pi x)}, \quad J = \int_{-\infty}^{\infty} f(x) dx$$

とおく. $\cosh(\pi x) = 0$ となるのは $e^{2\pi x} = -1$, すなわち $x = (k + 1/2)i$ ($k \in \mathbb{Z}$). よって $f(x)$ の特異点はこれらのみで, 全て 1 位の極.

$R > 0$ を十分大きく取り, 4 点 P_1, \dots, P_4 をそれぞれ $R, R+i, -R+i, -R$ とする. 線分 C_1, \dots, C_4 を順に線分 $P_4P_1, P_1P_2, P_2P_3, P_3P_4$ で定めると

$$\int_{C_1+\dots+C_4} f(x) dx = 2\pi i \operatorname{Res} \left(f(x), x = \frac{i}{2} \right).$$

ここで

$$f(x+i) = \frac{e^{-(x+i)^2+i(x+i)}}{\cosh(\pi(x+i))} = \frac{e^{-x^2-ix}}{-\cosh(\pi x)} = -f(-x)$$

だから $R \rightarrow \infty$ の時

$$\int_{C_3} f(x) dx = \int_R^{-R} f(t+i) dt = \int_R^{-R} -f(-t) dt = \int_{-R}^R f(t) dt \rightarrow J.$$

また,

$$\begin{aligned} \left| \int_{C_2} f(x) dx \right| &= \left| \int_0^1 f(R+it) dt \right| = \left| \int_0^1 \frac{e^{-(R+it)^2+i(R+it)}}{\cosh(\pi(R+it))} dt \right| \\ &\leq \int_0^1 \frac{2 \exp(-R^2+t^2-t)}{e^{\pi R} - e^{-\pi R}} dt \leq \int_0^1 \frac{2 \exp(-R^2)}{e^{\pi R} - e^{-\pi R}} dt = \frac{2 \exp(-R^2)}{e^{\pi R} - e^{-\pi R}} \rightarrow 0, \\ \left| \int_{C_4} f(x) dx \right| &= \left| \int_1^0 f(-R+it) dt \right| = \left| \int_1^0 \frac{e^{-(-R+it)^2+i(-R+it)}}{\cosh(\pi(-R+it))} dt \right| \\ &\leq \int_0^1 \frac{2 \exp(-R^2+t^2-t)}{e^{\pi R} - e^{-\pi R}} dt \rightarrow 0, \\ \operatorname{Res} \left(f(x), x = \frac{i}{2} \right) &= \lim_{x \rightarrow i/2} \frac{x-i/2}{\cosh(\pi x)} e^{-x^2+ix} = \lim_{x \rightarrow i/2} \frac{1}{\pi \sinh(\pi x)} \exp(-(i/2)^2 + i(i/2)) \\ &= \frac{e^{-1/4}}{\pi \sinh \frac{\pi i}{2}} = \frac{e^{-1/4}}{\pi i} \end{aligned}$$

だから

$$J + 0 + J + 0 = 2\pi i \frac{e^{-1/4}}{\pi i} \quad \therefore J = e^{-1/4}$$

よって

$$I = \frac{1}{2} \operatorname{Re} J = \frac{1}{2} e^{-1/4}.$$

□

問 5A

$\theta \in \mathbb{R}$ を定数として,

$$A_1 = \begin{pmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix}$$

とおき, 帰納的に

$$A_{n+1} = \begin{pmatrix} A_n \cos \theta & -A_n \sin \theta \\ A_n \sin \theta & A_n \cos \theta \end{pmatrix}$$

により 2^n 次正方行列 A_n を定める. このとき A_n の固有値を重複度も込めて求めよ. ただし, $\frac{\theta}{2\pi} \notin \mathbb{Q}$ と仮定する.

解答. A_n の固有値は $e^{i(n-2k)\theta}$ ($k = 0, 1, \dots, n$) で重複度は $\binom{n}{k}$ であることを帰納法で示す. $n = 1$ の時 A_1 の固有多項式は $\lambda^2 - 2\lambda \cos \theta + 1 = 0$ だから $\lambda = e^{\pm i\theta}$. よって $n = 1$ の時は正しい. n で正しいとする.

$$\begin{aligned} |A_{n+1} - \lambda I| &= \begin{vmatrix} A_n \cos \theta - \lambda I & -A_n \sin \theta \\ A_n \sin \theta & A_n \cos \theta - \lambda I \end{vmatrix} \\ &= |A_n \cos \theta - \lambda I + iA_n \sin \theta| |A_n \cos \theta - \lambda I - iA_n \sin \theta| \\ &= |e^{i\theta} A_n - \lambda I| |e^{-i\theta} A_n - \lambda I| \\ &= |A_n - \lambda e^{i\theta} I| |A_n - \lambda e^{-i\theta} I| \end{aligned}$$

であるから, A_{n+1} の固有値は A_n の固有値の $e^{\pm i\theta}$ 倍である. ここで異なる $k, k' \in \mathbb{Z}$ に対し $e^{ik\theta} \neq e^{ik'\theta}$ である. 実際, $e^{ik\theta} = e^{ik'\theta}$ とすると, $(k-k')\theta \in 2\pi\mathbb{Z}$ だから $\frac{\theta}{\pi} \in \frac{2}{k-k'}\mathbb{Z} \subset \mathbb{Q}$ となって仮定に反する. よって $e^{i\theta}$ 倍する方からは, 相異なる $(n+1)$ 種類の固有値 $e^{i(n-2k+1)\theta}$ ($k = 0, 1, \dots, n$) が重複度 $\binom{n}{k}$ で得られる. $e^{-i\theta}$ 倍する方からは, 相異なる $(n+1)$ 種類の固有値 $e^{i(n-2k-1)\theta} = e^{i(n+1-2(k+1))\theta}$ ($k = 0, 1, \dots, n$) が重複度 $\binom{n}{k}$ で, すなわち $e^{i(n+1-2k)\theta}$ ($k = 1, 2, \dots, n+1$) が重複度 $\binom{n}{k-1}$ で得られる. 以上から固有値は $e^{i(n+1-2k)\theta}$ ($k = 0, 1, \dots, n+1$) で, 重複度は $k = 0, n+1$ の時 1. $k = 1, \dots, n$ の時 $\binom{n}{k} + \binom{n}{k-1} = \binom{n+1}{k}$. よって $n+1$ でも正しい. これで示された. \square

問 5B

集合 X, Y と二つの単射 $f : X \rightarrow Y, g : Y \rightarrow X$ が与えられたとき、次の条件を満たす全単射 $h : X \rightarrow Y$ が存在することを証明せよ。

$h(x) = y$ ならば、 $f(x) = y$ または $g(y) = x$ となる。

解答. $f(X) = Y$ なら f は全単射だから $h = f$ とすればよい. 以下 $Y \setminus f(X) \neq \emptyset$ とする. $Y_0 = Y \setminus f(X)$ とし、 $X_n, Y_n (n \geq 1)$ を

$$X_n = g(Y_{n-1}), \quad Y_n = f(X_n)$$

で定める. さらに

$$X_+ = \bigcup_{n \geq 1} X_n, \quad Y_+ = \bigcup_{n \geq 0} Y_n, \quad X_- = X \setminus X_+, \quad Y_- = Y \setminus Y_+$$

とおく. この時

$$\begin{aligned} g(Y_+) &= g\left(\bigcup_{n \geq 0} Y_n\right) = \bigcup_{n \geq 0} g(Y_n) = \bigcup_{n \geq 0} X_{n+1} = X_+, \\ f(X_+) &= f\left(\bigcup_{n \geq 1} X_n\right) = \bigcup_{n \geq 1} f(X_n) = \bigcup_{n \geq 1} Y_n. \end{aligned}$$

また、 f の単射性より

$$f(X) = f((X \setminus X_+) \cup X_+) = f(X \setminus X_+) \cup f(X_+) = f(X \setminus X_+) \sqcup f(X_+)$$

であるから、 $f(X \setminus X_+) = f(X) \setminus f(X_+)$. よって

$$\begin{aligned} f(X_-) &= f(X \setminus X_+) = f(X) \setminus f(X_+) \\ &= (Y \setminus Y_0) \setminus \bigcup_{n \geq 1} Y_n = Y \setminus \bigcup_{n \geq 0} Y_n \\ &= Y_-. \end{aligned}$$

以上から $g|_{Y_+} : Y_+ \rightarrow X_+, f|_{X_-} : X_- \rightarrow Y_-$ はともに全単射. そこで $h : X \rightarrow Y$ を

$$h(x) = \begin{cases} f|_{X_-}(x) & x \in X_- \\ (g|_{Y_+})^{-1}(x) & x \in X_+ \end{cases}$$

と定めれば、 $h(x) = y$ は $x \in X_-$ の時 $f(x) = y, x \in X_+$ の時 $g(y) = x$ となるから示された. □

平成 21 年度 (2008 年 8 月実施)

問 1

次の (i), (ii), (iii) の間に答えよ.

(i) 実関数 $f(x) = e^x \sin x$ の n 階導関数を求めよ. ただし, n は正の整数とする.

(ii) 正の実数 a_1, a_2, \dots, a_n に対し, 次の極限値を求めよ.

$$\lim_{x \rightarrow 0} \left(\frac{a_1^x + a_2^x + \dots + a_n^x}{n} \right)^{1/x}.$$

(iii) γ_i ($i = 1, 2, \dots, N$) を相異なる実数とする. 実数 a_i ($i = 1, 2, \dots, N$) で, 任意の実数 x に対し

$$\sum_{i=1}^N a_i e^{\gamma_i x} = 0$$

となるものは, $a_1 = a_2 = \dots = a_N = 0$ に限ることを示せ.

解答. (i)

$$f(x) = e^x \frac{e^{ix} - e^{-ix}}{2i} = \frac{e^{(1+i)x} - e^{(1-i)x}}{2i}$$

だから

$$\begin{aligned} f^{(n)}(x) &= \frac{1}{2i} ((1+i)^n e^{(1+i)x} - (1-i)^n e^{(1-i)x}) \\ &= \frac{1}{2i} ((\sqrt{2}e^{\pi i/4})^n e^{(1+i)x} - (\sqrt{2}e^{-\pi i/4})^n e^{(1-i)x}) \\ &= \frac{2^{n/2}}{2i} e^x \left(e^{i(\frac{n\pi}{4} + x)} - e^{-i(\frac{n\pi}{4} + x)} \right) \\ &= 2^{n/2} e^x \sin \left(\frac{n\pi}{4} + x \right). \end{aligned}$$

(ii) $f(x) = \log(a_1^x + \dots + a_n^x)$ とおくと, $f(0) = \log n$ だから

$$\begin{aligned} \log \left(\frac{a_1^x + a_2^x + \dots + a_n^x}{n} \right)^{1/x} &= \frac{f(x) - f(0)}{x} \\ \xrightarrow{x \rightarrow 0} f'(0) &= \frac{a_1^x \log a_1 + \dots + a_n^x \log a_n}{a_1^x + \dots + a_n^x} \Big|_{x=0} \\ &= \frac{1}{n} \sum_{k=1}^n \log a_k = \log \left(\prod_{k=1}^n a_k \right)^{1/n}. \end{aligned}$$

よって答えは $\left(\prod_{k=1}^n a_k \right)^{1/n}$.

(iii) $f(x) = \sum_{i=1}^N a_i e^{\gamma_i x}$ とおく. $f(x) \equiv 0$ だから, $f^{(k)}(x) = \sum_{i=1}^N a_i \gamma_i^k e^{\gamma_i x} \equiv 0$ である. 特に $f(0) = f'(0) = \dots = f^{(N-1)}(0) = 0$ だから,

$$\begin{pmatrix} 1 & \dots & 1 \\ \gamma_1 & \dots & \gamma_N \\ \vdots & & \vdots \\ \gamma_1^{N-1} & \dots & \gamma_N^{N-1} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} a_1 \\ \vdots \\ a_N \end{pmatrix} = 0.$$

左辺の $N \times N$ 行列の行列式は $\prod_{1 \leq i < j \leq N} (\gamma_j - \gamma_i) \neq 0$ だから $a_1 = \dots = a_N = 0$. □

問 2

複素 n 次正方行列 A, B に対し

$$\det \begin{pmatrix} A & B \\ -B & A \end{pmatrix} = \det(A^2 + B^2 + \sqrt{-1}(AB - BA))$$

が成り立つことを示せ.

解答.

$$\begin{aligned} \begin{vmatrix} A & B \\ -B & A \end{vmatrix} &= \begin{vmatrix} A - iB & iA + B \\ -B & A \end{vmatrix} && (\text{第 } (k+n) \text{ 行の } i \text{ 倍を第 } k \text{ 行に足す } (1 \leq k \leq n)) \\ &= \begin{vmatrix} A - iB & 0 \\ -B & A + iB \end{vmatrix} && (\text{第 } k \text{ 列の } (-i) \text{ 倍を第 } (k+n) \text{ 列に足す } (1 \leq k \leq n)) \\ &= |A - iB| |A + iB| \\ &= |(A - iB)(A + iB)| \\ &= |A^2 + B^2 + i(AB - BA)|. \end{aligned}$$

□

問 3

正の整数 m に対し

$$I_m = \int_{-\infty}^{\infty} \frac{dx}{1+x^2+x^4+\cdots+x^{2m}}$$

とおく.

(i) 積分 I_m の値を求めよ.

(ii) 極限值 $\lim_{m \rightarrow \infty} I_m$ を求めよ.

解答. (i)

$$I_m = \int_{-\infty}^{\infty} \frac{x^2-1}{x^{2(m+1)}-1} dx$$

である. この被積分関数の特異点は $x^{2(m+1)}-1=0$ かつ $x^2-1 \neq 0$ を満たす点であるから, $x = \zeta^k$ ($k=1, \dots, m, m+2, \dots, 2m+1$) である. ただし $\zeta = \exp\left(\frac{\pi i}{m+1}\right)$. これらは全て 1 位の極である. $R > 0$ を十分大きく取り, C_1 を線分 $[-R, R]$, C_2 を上半平面にある $(R, 0)$ から $(-R, 0)$ への円弧とする. $C_1 + C_2$ 上で積分して

$$\int_{C_1+C_2} \frac{x^2-1}{x^{2(m+1)}-1} dx = 2\pi i \sum_{k=1}^m \text{Res} \left(\frac{x^2-1}{x^{2(m+1)}-1}, x = \zeta^k \right).$$

$R \rightarrow \infty$ の時

$$\begin{aligned} \int_{C_1} \frac{x^2-1}{x^{2(m+1)}-1} dx &\rightarrow I_m, \\ \left| \int_{C_2} \frac{x^2-1}{x^{2(m+1)}-1} dx \right| &= \left| \int_0^\pi \frac{R^2 e^{2i\theta} - 1}{R^{2(m+1)} e^{2(m+1)i\theta} - 1} i R e^{i\theta} d\theta \right| \leq \int_0^\pi \frac{R^2 + 1}{R^{2(m+1)} - 1} R d\theta \\ &= \frac{\pi R(R^2 + 1)}{R^{2(m+1)} - 1} \rightarrow 0. \end{aligned}$$

また,

$$\begin{aligned} \text{Res} \left(\frac{x^2-1}{x^{2(m+1)}-1}, x = \zeta^k \right) &= \lim_{x \rightarrow \zeta^k} \frac{x^2-1}{x^{2(m+1)}-1} (x - \zeta^k) = \lim_{x \rightarrow \zeta^k} \frac{x - \zeta^k}{x^{2(m+1)}-1} (x^2 - 1) \\ &= \lim_{x \rightarrow \zeta^k} \frac{1}{2(m+1)x^{2(m+1)-1}} (\zeta^{2k} - 1) = \frac{\zeta^k}{2(m+1)} (\zeta^{2k} - 1), \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \sum_{k=1}^m (\zeta^{3k} - \zeta^k) &= \frac{\zeta^3 - \zeta^{3(m+1)}}{1 - \zeta^3} - \frac{\zeta - \zeta^{m+1}}{1 - \zeta} = \frac{\zeta^3 + 1}{1 - \zeta^3} - \frac{\zeta + 1}{1 - \zeta} \\ &= \frac{2\zeta(\zeta^2 - 1)}{(\zeta^3 - 1)(\zeta - 1)} = \frac{2\zeta(\zeta + 1)}{\zeta^3 - 1} = \frac{2(\zeta^{1/2} + \zeta^{-1/2})}{\zeta^{3/2} - \zeta^{-3/2}} = \frac{2 \cos \frac{\pi}{2(m+1)}}{i \sin \frac{3\pi}{2(m+1)}} \end{aligned}$$

だから

$$I_m = 2\pi i \frac{1}{2(m+1)} \frac{2 \cos \frac{\pi}{2(m+1)}}{i \sin \frac{3\pi}{2(m+1)}} = \frac{2\pi}{m+1} \frac{\cos \frac{\pi}{2(m+1)}}{\sin \frac{3\pi}{2(m+1)}}.$$

(ii)

$$\lim_{m \rightarrow \infty} I_m = \lim_{m \rightarrow \infty} \frac{4}{3} \frac{\frac{3\pi}{2(m+1)}}{\sin \frac{3\pi}{2(m+1)}} \cos \frac{\pi}{2(m+1)} = \frac{4}{3}$$

□

問 4

複素 n 次正方行列 A に対し, 複素 n 次正方行列 X で A と可換 ($AX = XA$) なものの全体のなす複素ベクトル空間を V とする. このとき, V の次元は n 以上であることを証明せよ.

解答. $P \in M_n(\mathbb{C})$ に対し $Z(P) = \{X \in M_n(\mathbb{C}); PX = XP\}$ とおく. A の Jordan 標準形を $Q^{-1}AQ = D := \text{diag}(J(\lambda_1, n_1), \dots, J(\lambda_k, n_k))$ とする. $X_j \in Z(J(\lambda_j, n_j))$ を取り $X = Q \text{diag}(X_1, \dots, X_k)Q^{-1}$ とすると

$$\begin{aligned} AX &= QDQ^{-1}Q \text{diag}(X_1, \dots, X_k)Q^{-1} \\ &= Q \text{diag}(J(\lambda_1, n_1)X_1, \dots, J(\lambda_k, n_k)X_k)Q^{-1} \\ &= Q \text{diag}(X_1J(\lambda_1, n_1), \dots, X_kJ(\lambda_k, n_k))Q^{-1} \\ &= Q \text{diag}(X_1, \dots, X_k)Q^{-1}QDQ^{-1} \\ &= XA \end{aligned}$$

だから

$$\{Q \text{diag}(X_1, \dots, X_k)Q^{-1}; X_j \in Z(J(\lambda_j, n_j))\} \subset Z(A).$$

よって

$$\begin{aligned} \dim Z(A) &\geq \dim\{Q \text{diag}(X_1, \dots, X_k)Q^{-1}; X_j \in Z(J(\lambda_j, n_j))\} \\ &= \dim\{\text{diag}(X_1, \dots, X_k); X_j \in Z(J(\lambda_j, n_j))\} \\ &= \sum_{j=1}^k \dim Z(J(\lambda_j, n_j)) \end{aligned}$$

だから, 任意の $\lambda \in \mathbb{C}, n \in \mathbb{N}$ に対し $\dim Z(J(\lambda, n)) \geq n$ を示せば十分である. $J(\lambda, n) = \lambda I + J(0, n)$ だから $J(\lambda, n)$ は $J(0, n)^j$ ($j \in \mathbb{N}$) と可換. $I, J(0, n), \dots, J(0, n)^{n-1}$ はいずれも零行列でなく, \mathbb{C} 上一次独立であるから

$$\dim Z(J(\lambda, n)) \geq \dim \left\{ \sum_{j=0}^{n-1} c_j J(0, n)^j; c_j \in \mathbb{C} \right\} = n.$$

これで示された. □

問 5

n を正の整数とし, 0 でない複素数 α に対して α の n 乗根を β_1, \dots, β_n とする. このとき, 複素変数 z に関する次の恒等式を示せ.

$$\frac{1}{1 - \alpha z^n} = \frac{1}{n} \sum_{j=1}^n \frac{1}{1 - \beta_j z}.$$

解答. $f(z) = \frac{1}{n} \sum_{j=1}^n \frac{1 - \alpha z^n}{1 - \beta_j z}$ とおく. $f(z) \equiv 1$ を示せば良い. $1 - \alpha(\beta_j^{-1})^n = 1 - \alpha \cdot \alpha^{-1} = 0$ だから, $1 - \alpha z^n$ は $z = \beta_j^{-1}$ を根に持つ. よって $\frac{1 - \alpha z^n}{1 - \beta_j z}$ は $(n-1)$ 次多項式. ゆえに $f(z)$ もそう. 従って異なる n 個の点 $z = \beta_k^{-1}$ において $f(z) = 1$ となることを示せばよい.

$$\lim_{z \rightarrow \beta_k^{-1}} \frac{1 - \alpha z^n}{1 - \beta_k z} = \lim_{z \rightarrow \beta_k^{-1}} \frac{-n\alpha z^{n-1}}{-\beta_k} = n\alpha\beta_k^{-n} = n,$$

$j \neq k$ の時

$$\lim_{z \rightarrow \beta_k^{-1}} \frac{1 - \alpha z^n}{1 - \beta_j z} = \frac{1 - \alpha\beta_k^{-n}}{1 - \beta_j\beta_k^{-1}} = \frac{1 - \alpha \cdot \alpha^{-1}}{1 - \beta_j\beta_k^{-1}} = 0$$

だから

$$f(\beta_k^{-1}) = \lim_{z \rightarrow \beta_k^{-1}} \frac{1}{n} \left(\frac{1 - \alpha z^n}{1 - \beta_k z} + \sum_{j \neq k} \frac{1 - \alpha z^n}{1 - \beta_j z} \right) = \frac{1}{n}(n + 0) = 1.$$

これで示された. □

平成 20 年度 (2007 年 8 月実施)

問 1

次の (i), (ii) の間に答えよ.

(i) 次の実関数の $x = 0$ におけるテイラー展開を x^3 の項まで計算せよ. (たとえば $\exp(x)$ ならば $1 + x + \frac{1}{2}x^2 + \frac{1}{6}x^3$.)

$$(A) \sqrt{1+2x+3x^2} \quad (B) (1+x)^{\frac{1}{x}} \text{ (ただし } x=0 \text{ での値は } \lim_{x \downarrow 0} (1+x)^{\frac{1}{x}} \text{ で定義する.)}$$

(ii) 次の積分の値を求めよ.

$$\iiint_D \frac{dx dy dz}{\sqrt{1-x^2-y^2-z^2}}$$

ここで, $D = \{(x, y, z) \in \mathbb{R}^3 \mid x^2 + y^2 + z^2 < 1\}$.

解答. (i)(A) $\sqrt{1+2x+3x^2} = 1 + a_1x + a_2x^2 + a_3x^3 + \dots$ とすると

$$\begin{aligned} 1 + 2x + 3x^2 &= (1 + a_1x + a_2x^2 + a_3x^3 + \dots)^2 \\ &= 1 + 2a_1x + (2a_2 + a_1^2)x^2 + 2(a_3 + a_1a_2)x^3 + \dots \end{aligned}$$

係数比較して $a_1 = 1, a_2 = 1, a_3 = -1$. よって $\sqrt{1+2x+3x^2} = 1 + x + x^2 - x^3 + \dots$.

(B) $f(x) = (1+x)^{1/x}$ とおく.

$$\begin{aligned} \log f(x) &= \frac{1}{x} \log(1+x) = \frac{1}{x} \left(x - \frac{1}{2}x^2 + \frac{1}{3}x^3 - \frac{1}{4}x^4 + \dots \right) \\ &= 1 - \frac{1}{2}x + \frac{1}{3}x^2 - \frac{1}{4}x^3 + \dots \end{aligned}$$

だから

$$\begin{aligned} f(x) &= \exp \left(1 - \frac{1}{2}x + \frac{1}{3}x^2 - \frac{1}{4}x^3 + \dots \right) \\ &= e \sum_{n \geq 0} \frac{1}{n!} \left(-\frac{1}{2}x + \frac{1}{3}x^2 - \frac{1}{4}x^3 + \dots \right)^n \\ &= e \left[1 + \left(-\frac{1}{2}x + \frac{1}{3}x^2 - \frac{1}{4}x^3 + \dots \right) + \frac{1}{2} \left(\frac{1}{4}x^2 - \frac{1}{3}x^3 + \dots \right) + \frac{1}{6} \left(-\frac{1}{8}x^3 + \dots \right) + \dots \right] \\ &= e - \frac{e}{2}x + \frac{11e}{24}x^2 - \frac{7e}{16}x^3 + \dots \end{aligned}$$

(ii) 積分を I とおく. $x = r \cos \theta \sin \varphi, y = r \sin \theta \sin \varphi, z = r \cos \varphi$ と置換すると

$$\begin{aligned} I &= \int_0^\pi \int_0^{2\pi} \int_0^1 \frac{1}{\sqrt{1-r^2}} r^2 \sin \varphi dr d\theta d\varphi \\ &= 4\pi \int_0^1 \frac{r^2 dr}{\sqrt{1-r^2}} = 4\pi \int_0^{\pi/2} \frac{\sin^2 t}{\cos t} \cos t dt \quad (r = \sin t \text{ と置換}) \\ &= 4\pi \int_0^{\pi/2} \sin^2 t dt = 2\pi \int_0^{\pi/2} (1 - \cos 2t) dt \\ &= \pi^2. \end{aligned}$$

□

問 2

$n \geq 2$ を自然数, x を実数とする. n 次正方行列 $A = (x^{ij} - 1)_{1 \leq i, j \leq n}$ の行列式 $\det A$ について

$$\det A = (x-1)(x^2-1)\cdots(x^n-1) \prod_{1 \leq i < j \leq n} (x^j - x^i)$$

を示せ.

解答.

$$|A| = \prod_{i=1}^n (x^i - 1) \begin{vmatrix} 1 & x+1 & x^2+x+1 & \cdots & x^{n-1}+\cdots+x+1 \\ 1 & x^2+1 & x^4+x^2+1 & \cdots & x^{2(n-1)}+\cdots+x^2+1 \\ \vdots & \vdots & \vdots & & \vdots \\ 1 & x^n+1 & x^{2n}+x^n+1 & \cdots & x^{n(n-1)}+\cdots+x^n+1 \end{vmatrix}$$

(第 i 行から $x^i - 1$ をくくりだす ($1 \leq i \leq n$))

$$= \prod_{i=1}^n (x^i - 1) \begin{vmatrix} 1 & x & x^2+x & \cdots & x^{n-1}+\cdots+x \\ 1 & x^2 & x^4+x^2 & \cdots & x^{2(n-1)}+\cdots+x^2 \\ \vdots & \vdots & \vdots & & \vdots \\ 1 & x^n & x^{2n}+x^n & \cdots & x^{n(n-1)}+\cdots+x^n \end{vmatrix}$$

(第 1 列の (-1) 倍を第 $2, \dots, n$ 列に足す)

$$= \prod_{i=1}^n (x^i - 1) \begin{vmatrix} 1 & x & x^2 & \cdots & x^{n-1}+\cdots+x^2 \\ 1 & x^2 & x^4 & \cdots & x^{2(n-1)}+\cdots+x^4 \\ \vdots & \vdots & \vdots & & \vdots \\ 1 & x^n & x^{2n} & \cdots & x^{n(n-1)}+\cdots+x^{2n} \end{vmatrix}$$

(第 2 列の (-1) 倍を第 $3, \dots, n$ 列に足す)

$$= \cdots = \prod_{i=1}^n (x^i - 1) \begin{vmatrix} 1 & x & x^2 & \cdots & x^{n-1} \\ 1 & x^2 & x^4 & \cdots & x^{2(n-1)} \\ \vdots & \vdots & \vdots & & \vdots \\ 1 & x^n & x^{2n} & \cdots & x^{n(n-1)} \end{vmatrix}$$

$$= \prod_{i=1}^n (x^i - 1) \cdot \prod_{1 \leq i < j \leq n} (x^j - x^i)$$

□

問 3

正の実数列 $\lambda_n (n = 1, 2, \dots)$ に対して, 2つの級数

$$f(x) = \sum_{n=1}^{\infty} \exp(\lambda_n x), \quad g(x) = \sum_{n=1}^{\infty} \lambda_n \exp(\lambda_n x)$$

を考える. 今, $a \in \mathbb{R}$ とし, $f(a) < \infty$ であると仮定する.

(i) $x < a$ のとき, $f(x), g(x)$ とともに収束することを示せ.

(ii) $x < a$ となる全ての x において $f(x)$ は微分可能であって, $f'(x) = g(x)$ となることを示せ.

解答. (i) $x < a$ を任意に固定する. $\lambda_n > 0$ より

$$|f(x)| = \sum_{n=1}^{\infty} \exp(\lambda_n x) < \sum_{n=1}^{\infty} \exp(\lambda_n a) = f(a) < \infty$$

だから $f(x)$ は収束する. $f(a) < \infty$ から $\lim_{n \rightarrow \infty} \exp(\lambda_n a) = 0$ であるが, もし $a \geq 0$ なら $\lambda_n > 0$ より $\exp(\lambda_n a) \geq 1$ となり不適なので $a < 0$. 再び $\lim_{n \rightarrow \infty} \exp(\lambda_n a) = 0$ より $\lim_{n \rightarrow \infty} \lambda_n = \infty$. これと $\lim_{t \rightarrow \infty} \frac{\log t}{t} = 0$ より, N があって任意の $n > N$ に対し $\frac{\log \lambda_n}{\lambda_n} < a - x$, すなわち $\lambda_n \exp(\lambda_n x) < \exp(\lambda_n a)$ だから

$$\begin{aligned} |g(x)| &= \sum_{n \leq N} \lambda_n \exp(\lambda_n x) + \sum_{n > N} \lambda_n \exp(\lambda_n x) < \sum_{n \leq N} \lambda_n \exp(\lambda_n x) + \sum_{n > N} \exp(\lambda_n a) \\ &< \sum_{n \leq N} \lambda_n \exp(\lambda_n x) + f(a) < \infty. \end{aligned}$$

よって $g(x)$ も収束する.

(ii) $h(x) = \sum_{n=1}^{\infty} \lambda_n^2 \exp(\lambda_n x)$ とおく. 任意に $x < a$ を固定すると (i) と同様, 十分大きな任意の n に対し $\frac{\log \lambda_n}{\lambda_n} < \frac{a-x}{2}$, すなわち $\lambda_n^2 \exp(\lambda_n x) < \exp(\lambda_n a)$. よって $g(x)$ と同様に $h(x)$ は $x < a$ において収束する. また, 任意の $t \in \mathbb{R}$ に対し

$$|e^t - 1 - t| = \left| \sum_{n \geq 2} \frac{t^n}{n!} \right| \leq \sum_{n \geq 2} \frac{|t|^n}{n!} = \sum_{n \geq 0} \frac{|t|^{n+2}}{(n+2)!} \leq \sum_{n \geq 0} \frac{|t|^{n+2}}{n!} = |t|^2 e^{|t|}$$

である. よって $x < a$ を任意に固定し, $|\varepsilon| < a - x$ なる ε を任意に取れば

$$\begin{aligned} \left| \frac{f(x + \varepsilon) - f(x)}{\varepsilon} - g(x) \right| &\leq \sum_{n \geq 1} \left| \frac{\exp(\lambda_n \varepsilon) - 1}{\varepsilon} - \lambda_n \right| \exp(\lambda_n x) \\ &\leq \sum_{n \geq 1} \frac{1}{|\varepsilon|} (\lambda_n |\varepsilon|)^2 \exp(\lambda_n |\varepsilon|) \exp(\lambda_n x) \\ &= |\varepsilon| h(|\varepsilon| + x) \rightarrow 0 \cdot h(x) = 0 \quad (\varepsilon \rightarrow 0) \end{aligned}$$

であるから示された. □

問 4

V を n 次元実ベクトル空間とする ($n > 0$). $f: V \rightarrow V$ は V 上の線形変換で, V の任意の $(n-1)$ 次元部分ベクトル空間 W に対し $f(W) \subseteq W$ をみたしているものとする.

(i) $n = 2$ のとき, f は恒等変換のスカラー倍であることを示せ.

(ii) n が一般のときも, f は恒等変換のスカラー倍であることを示せ.

解答. V の基底を e_1, \dots, e_n とし, これについての f の表現行列を $A = (a_{ij})$ とする.

(i) W を e_1 で張られる部分空間とすれば $f(e_1) = a_{11}e_1 + a_{21}e_2 \in W$ より $a_{21} = 0$. 同様に e_2 で張られる部分空間を考えて $a_{12} = 0$. W を $e_1 + e_2$ で張られる部分空間とすれば, $f(e_1 + e_2) = a_{11}e_1 + a_{22}e_2 \in W$ より $a_{11}e_1 + a_{22}e_2 = c(e_1 + e_2)$ となる $c \in \mathbb{R}$ が存在する. e_1, e_2 は一次独立だから $a_{11} = a_{22} = c$. よって A は単位行列のスカラー倍, つまり f は恒等変換のスカラー倍であることが必要だが, 逆にこの時条件を満たすことは明らか.

(ii) W を e_j ($j \neq i$) で張られる部分空間とすれば, $j \neq i$ の時 $f(e_j) = a_{1j}e_1 + \dots + a_{nj}e_n \in W$ より $a_{ij} = 0$. よって A は対角行列である. 以下 $a_i = a_{ii}$ とおく. $e_1 + e_2, e_2 + e_3, \dots, e_{n-1} + e_n$ で張られる部分空間を W とする. $f(e_1 + e_2) = a_1e_1 + a_2e_2 \in W$ なので, $c_k \in \mathbb{R}$ が存在して

$$\begin{aligned} a_1e_1 + a_2e_2 &= \sum_{k=1}^{n-1} c_k(e_k + e_{k+1}) \\ &= c_1e_1 + (c_1 + c_2)e_2 + \dots + (c_{n-2} + c_{n-1})e_{n-1} + c_{n-1}e_n \end{aligned}$$

と書ける. これより $a_1 = c_1, a_2 = c_1 + c_2, c_2 + c_3 = \dots = c_{n-2} + c_{n-1} = c_{n-1} = 0$ だから $c_2 = \dots = c_{n-1} = 0, a_1 = a_2 = c_1$. 同様に $f(e_2 + e_3), \dots, f(e_{n-1} + e_n)$ を考えて $a_2 = \dots = a_n$. よって A は単位行列のスカラー倍, つまり f は恒等変換のスカラー倍であることが必要だが, 逆にこの時条件を満たすことは明らか. \square

問 5

空でない集合 X について、次の性質をみたす写像 $h: X \times X \rightarrow X$ を考える：

任意の写像 $f: X \rightarrow X$ と任意の $x, y \in X$ に対して

$$f(h(x, y)) = h(f(x), f(y))$$

が成り立つ。

以下の問に答えよ。

- (i) 任意の $x \in X$ に対して $h(x, x) = x$ を示せ。
- (ii) 任意の $x, y \in X$ に対して $h(x, y) \in \{x, y\}$ を示せ。
- (iii) 「任意の $x, y \in X$ に対して $h(x, y) = x$ 」かまたは「任意の $x, y \in X$ に対して $h(x, y) = y$ 」のいずれかが成り立つことを示せ。

解答. (i) $x_0 \in X$ を任意に取り $f: X \rightarrow X$ を $f(x) = x_0$ で定めると、

$$h(x_0, x_0) = h(f(x_0), f(x_0)) = f(h(x_0, x_0)) = x_0.$$

x_0 は任意だから $h(x, x) = x$.

(ii) $\#X = 1$ または $x = y$ のときは (i) から成り立つ。以下 $\#X \geq 2$ とし、異なる $x, y \in X$ に対し $h(x, y) \in \{x, y\}$ となることを示す。異なる $x_0, y_0 \in X$ を任意に取り、 $f: X \rightarrow X$ を

$$f(x) = \begin{cases} x_0 & (x = x_0) \\ y_0 & (x \neq x_0) \end{cases}$$

で定めると

$$h(x_0, y_0) = h(f(x_0), f(y_0)) = f(h(x_0, y_0)) \in \{x_0, y_0\}.$$

x_0, y_0 は任意だから $h(x, y) \in \{x, y\}$.

(iii) $\#X = 1$ の時は (i) より成り立つ。以下 $\#X \geq 2$ とする。

$$X_1 = \{(x, y) \in X \times X; x \neq y, h(x, y) = x\},$$

$$X_2 = \{(x, y) \in X \times X; x \neq y, h(x, y) = y\}$$

とおく。 $X_1 = \emptyset$ または $X_2 = \emptyset$ となることを示せばよい。 $X_1 \neq \emptyset$ かつ $X_2 \neq \emptyset$ とすると、 $(x_1, y_1) \in X_1, (x_2, y_2) \in X_2$ が取れる。 $f: X \rightarrow X$ を

$$f(x) = \begin{cases} x_2 & (x = x_1) \\ y_2 & (x = y_1) \\ x & (\text{それ以外}) \end{cases}$$

で定めると、 $x_1 \neq y_1$ より f は well-defined である。この時

$$y_2 = h(x_2, y_2) = h(f(x_1), f(y_1)) = f(h(x_1, y_1)) = f(x_1) = x_2$$

となるが、これは $(x_2, y_2) \in X_2$ に矛盾。

□

平成 19 年度 (2006 年 8 月実施)

問 1

次の (i), (ii) の間に答えよ.

(i) α, β は正の実数とする. 無限級数

$$\sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{n^{\alpha}}, \quad \sum_{n=2}^{\infty} \frac{1}{n(\log n)^{\beta}}$$

の各々に対して, それが収束する α, β の範囲を求め, その理由を述べよ.

(ii) 定積分

$$\int_0^{2\pi} e^{\cos \theta} \cos(\sin \theta) d\theta$$

を計算せよ.

解答. (i) $\frac{1}{x^{\alpha}}$ は $x > 0$ において単調減少だから

$$\int_n^{n+1} \frac{dx}{x^{\alpha}} < \frac{1}{n^{\alpha}} < \int_{n-1}^n \frac{dx}{x^{\alpha}}. \quad \therefore \int_1^{\infty} \frac{dx}{x^{\alpha}} < \sum_{n \geq 1} \frac{1}{n^{\alpha}} < 1 + \int_1^{\infty} \frac{dx}{x^{\alpha}}$$

よって問題の無限級数が収束することと $\int_1^{\infty} \frac{dx}{x^{\alpha}}$ が収束することは同値.

$$\int_1^{\infty} \frac{dx}{x^{\alpha}} = \left. \frac{x^{1-\alpha}}{1-\alpha} \right|_1^{\infty} = \begin{cases} \infty & (\alpha \leq 1) \\ \frac{1}{\alpha-1} & (\alpha > 1) \end{cases}$$

だから, 収束するのは $\alpha > 1$ のときに限る. 同様に $\frac{1}{x(\log x)^{\beta}}$ は $x > 0$ において単調減少だから

$$\int_n^{n+1} \frac{dx}{x(\log x)^{\beta}} < \frac{1}{n(\log n)^{\beta}} < \int_{n-1}^n \frac{dx}{x(\log x)^{\beta}}. \\ \therefore \int_2^{\infty} \frac{dx}{x(\log x)^{\beta}} < \sum_{n \geq 2} \frac{1}{n(\log n)^{\beta}} < \frac{1}{2(\log 2)^{\beta}} + \int_2^{\infty} \frac{dx}{x(\log x)^{\beta}}$$

よって問題の無限級数が収束することと $\int_2^{\infty} \frac{dx}{x(\log x)^{\beta}}$ が収束することは同値.

$$\int_2^{\infty} \frac{dx}{x(\log x)^{\beta}} = \begin{cases} \log \log x \Big|_2^{\infty} = \infty & (\beta = 1) \\ \frac{(\log x)^{1-\beta}}{1-\beta} \Big|_2^{\infty} = \begin{cases} \infty & (\beta < 1) \\ \frac{1}{(\beta-1)(\log 2)^{\beta-1}} & (\beta > 1) \end{cases} \end{cases}$$

だから, 収束するのは $\beta > 1$ のときに限る.

(ii)

$$\begin{aligned} \int_0^{2\pi} e^{\cos \theta} \cos(\sin \theta) d\theta &= \operatorname{Re} \int_0^{2\pi} e^{\cos \theta + i \sin \theta} d\theta = \operatorname{Re} \int_0^{2\pi} \exp(e^{i\theta}) d\theta \\ &= \operatorname{Re} \oint_{|z|=1} e^z \frac{dz}{iz} \quad (z = e^{i\theta} \text{ と置換}) \\ &= \operatorname{Re}(2\pi e^z \Big|_{z=0}) = 2\pi \end{aligned}$$

□

問 2

次の (i), (ii) の間に答えよ.

- (i) 実 2 次正方行列 A, B が $AB = -BA$ をみたしているとする. このとき, 実数 r が存在して, $(AB)^2 = rI$ が成り立つことを示せ. ただし, I は 2 次単位行列を表す.
- (ii) n 次以下の 1 変数実係数多項式 $f(x)$ 全体のなす実線形空間を V_n とする. このとき, $f(x)$ に対して $f(x) + f'(x)$ を対応させる V_n の線形変換は可逆であることを示せ. ただし, $f'(x)$ は $f(x)$ の導関数を表す.

解答. (i) $\operatorname{tr}(AB) = \operatorname{tr}(-BA) = \operatorname{tr}(-AB) = -\operatorname{tr}(AB)$ だから $\operatorname{tr}(AB) = 0$. よって Cayley-Hamilton の定理より $(AB)^2 = -\det(AB)I$. $A, B \in M_2(\mathbb{R})$ だから $\det(AB) \in \mathbb{R}$. よって $r = -\det(AB)$ とすればよい.

(ii) 対応 $f(x) \rightarrow f(x) + f'(x)$ を $Tf(x)$ とする. $T : V_n \rightarrow V_n$ は線型写像で, V_n は有限次元ベクトル空間だから $\dim \operatorname{Im} T + \dim \operatorname{Ker} T = \dim V_n$. よって $\dim \operatorname{Ker} T = 0$ を示せば T は単射, しかも $\dim \operatorname{Im} T = \dim V_n$ となり $\operatorname{Im} T = V_n$, つまり T は全射となって T は可逆となる. $f \in \operatorname{Ker} T$ とすれば, $(e^x f)' = e^x(f + f') = 0$ だから $e^x f = c$ (c : 定数). よって $f = ce^{-x}$ となるが, f は多項式だから $c = 0$. よって $\operatorname{Ker} T = \{0\}$. □

問 3

$f(x)$ は区間 $[0, \infty)$ 上の実数値連続関数とする. 有限な極限 $\lim_{x \rightarrow \infty} f(x)$ が存在するとき,

$$\lim_{x \rightarrow \infty} \int_0^x e^{y-x} f(y) dy = \lim_{x \rightarrow \infty} f(x)$$

であることを示せ.

解答. $L = \lim_{x \rightarrow \infty} f(x)$ とおく. 任意に $\varepsilon > 0$ を取ると, $R > 0$ が存在して $x > R$ の時 $|f(x) - L| < \varepsilon$ となる. $x \rightarrow \infty$ の極限を考えるので $x > R$ として良い.

$$\begin{aligned} \left| \int_0^x e^{y-x} f(y) dy - \int_R^x e^{y-x} L dy \right| &= \left| \int_0^R e^{y-x} f(y) dy + \int_R^x e^{y-x} f(y) dy - \int_R^x e^{y-x} L dy \right| \\ &\leq \int_0^R e^{y-x} |f(y)| dy + \int_R^x e^{y-x} |f(y) - L| dy \\ &\leq e^{-x} \int_0^R e^y |f(y)| dy + \int_R^x e^{y-x} \varepsilon dy \\ &\leq e^{-x} \int_0^R e^y |f(y)| dy + \varepsilon (1 - e^{R-x}) \end{aligned}$$

f は連続なので右辺第 1 項の積分は有限値. よって $x \rightarrow \infty$ とすると (右辺) $\rightarrow \varepsilon$. 左辺の第 2 項は

$$\int_R^x e^{y-x} L dy = L(1 - e^{R-x}) \rightarrow L.$$

$\varepsilon > 0$ は任意だから

$$\lim_{x \rightarrow \infty} \int_0^x e^{y-x} f(y) dy = L.$$

□

問 4

V は実 $2n$ 次元線形空間, W_1, W_2, W_3 は V の実 n 次元線形部分空間とし,

$$W_1 \cap W_2 = W_1 \cap W_3 = W_2 \cap W_3 = \{0\}$$

と仮定する. このとき, 次の条件ア), イ), ウ) をみたす V の基底 $e_1, \dots, e_n, f_1, \dots, f_n$ が存在することを示せ.

ア) e_1, \dots, e_n は W_1 の基底.

イ) f_1, \dots, f_n は W_2 の基底.

ウ) $e_1 + f_1, \dots, e_n + f_n$ は W_3 の基底.

解答. $\dim(W_1 + W_2) = \dim W_1 + \dim W_2 - \dim(W_1 \cap W_2) = 2n = \dim V$ と $W_1 + W_2 \subset V$ より $W_1 + W_2 = V$. これと $W_1 \cap W_2 = \{0\}$ より $W_1 \oplus W_2 = V$. よって v_1, \dots, v_n を W_1 の基底, v_{n+1}, \dots, v_{2n} を W_2 の基底とすると v_1, \dots, v_{2n} は V の基底となるから, W_3 の基底は $\sum_{j=1}^{2n} a_j^{(i)} v_j$ ($1 \leq i \leq n$) と書ける.

$$A_1 = \begin{pmatrix} a_1^{(1)} & \cdots & a_1^{(n)} \\ \vdots & & \vdots \\ a_n^{(1)} & \cdots & a_n^{(n)} \end{pmatrix}, \quad A_2 = \begin{pmatrix} a_{n+1}^{(1)} & \cdots & a_{n+1}^{(n)} \\ \vdots & & \vdots \\ a_{2n}^{(1)} & \cdots & a_{2n}^{(n)} \end{pmatrix} \in M_n(\mathbb{R})$$

とおく. $W_1 \cap W_3 = \{0\}$ から $W_1 \oplus W_3 = V$ なので

$$2n = \text{rank} \begin{pmatrix} I_n & A_1 \\ & A_2 \end{pmatrix} = \text{rank} \begin{pmatrix} I_n & \\ & A_2 \end{pmatrix} = n + \text{rank } A_2.$$

よって $\text{rank } A_2 = n$ なので $A_2 \in GL_n$. 同様に $A_1 \in GL_n$. 従って

$$(v_1, \dots, v_n)A_1 = \left(\sum_{j=1}^n a_j^{(1)} v_j, \dots, \sum_{j=1}^n a_j^{(n)} v_j \right),$$

$$(v_{n+1}, \dots, v_{2n})A_2 = \left(\sum_{j=n+1}^{2n} a_j^{(1)} v_j, \dots, \sum_{j=n+1}^{2n} a_j^{(n)} v_j \right)$$

はそれぞれ W_1, W_2 の基底となる. よって

$$e_i = \sum_{j=1}^n a_j^{(i)} v_j, \quad f_i = \sum_{j=n+1}^{2n} a_j^{(i)} v_j$$

とすれば条件を満たす. □

問 5A

$f(x, y) = (x + y)^2 + x$ として、以下の間に答えよ.

(i) f は $\mathbb{Z}_{\geq 0} \times \mathbb{Z}_{\geq 0}$ から $\mathbb{Z}_{\geq 0}$ への単射を与えることを示せ.

(ii) f は $\mathbb{Q}_{\geq 0} \times \mathbb{Q}_{\geq 0}$ から $\mathbb{Q}_{\geq 0}$ への写像として単射でないことを示せ.

ただし、 $\mathbb{Z}_{\geq 0}$ は非負整数の集合を、また $\mathbb{Q}_{\geq 0}$ は非負有理数の集合を表す.

解答. (i)

$$\begin{aligned} S_k &= \{f(x, y); x + y = k, (x, y) \in \mathbb{Z}_{\geq 0} \times \mathbb{Z}_{\geq 0}\} \\ &= \{k^2 + x; 0 \leq x \leq k\} \end{aligned}$$

とおく. $(S_k \text{ の最大元}) = k^2 + k < k^2 + 2k + 1 = (k + 1)^2 = (S_{k+1} \text{ の最小元})$ だから、 $k \neq k'$ なら $S_k \cap S_{k'} = \emptyset$. 従って $f(x, y) = f(x', y') \in \bigcup_{k \in \mathbb{Z}_{\geq 0}} S_k$ とすると $x + y = x' + y'$ となるから、 $(x + y)^2 + x = (x' + y')^2 + x'$ より $x = x'$. 従って $y = y'$ なので $f: \mathbb{Z}_{\geq 0} \times \mathbb{Z}_{\geq 0} \rightarrow \mathbb{Z}_{\geq 0}$ は単射.

(ii) $f(0, 1) = f(\frac{5}{9}, \frac{1}{9}) = 1$ だから $f: \mathbb{Q}_{\geq 0} \times \mathbb{Q}_{\geq 0} \rightarrow \mathbb{Q}_{\geq 0}$ は単射でない. □

問 5B

a_1, \dots, a_n は正の実数とする. このとき, \mathbb{R}^n 内の単位球面 $x_1^2 + \dots + x_n^2 = 1$ における, 関数 $a_1x_1^6 + \dots + a_nx_n^6$ の最大値と最小値を求めよ.

解答. $f(x_1, \dots, x_n) = a_1x_1^6 + \dots + a_nx_n^6$ とおく. $0 \leq x_i^2 \leq x_1^2 + \dots + x_n^2 = 1$ より $x_i^6 \leq x_i^2$. よって

$$f \leq a_1x_1^2 + \dots + a_nx_n^2 \leq \max_{1 \leq i \leq n} a_i \cdot (x_1^2 + \dots + x_n^2) = \max_{1 \leq i \leq n} a_i.$$

$\max_{1 \leq i \leq n} a_i$ (のうちの一つ) を a_j とすると $x_j = 1, x_i = 0 (i \neq j)$ の時等号が成立するから, f の最大値は $\max_{1 \leq i \leq n} a_i$.

最小値を求める. $\lambda \in \mathbb{R}$ として $F(x_1, \dots, x_n) = f(x_1, \dots, x_n) - \lambda(x_1^2 + \dots + x_n^2 - 1)$ とおく. 単位球面は有界閉だから, 連続関数 f は最小値を持つ. 特にこの最小値は極値でもある. Lagrange の未定乗数法により, 極値を取る点となりうる (x_1, \dots, x_n) は

$$\frac{\partial F}{\partial x_i} = 6a_ix_i^5 - 2\lambda x_i = 0, \quad \frac{\partial F}{\partial \lambda} = x_1^2 + \dots + x_n^2 - 1 = 0$$

の解. 各 i について $x_i = 0$ か $3a_ix_i^4 = \lambda$ であるが, 第 2 式から, 全ての i に対し $x_i = 0$ となることはない. よって $1 \leq n_1 < \dots < n_k \leq n$ があって $i \in \{n_1, \dots, n_k\}$ の時 $3a_ix_i^4 = \lambda$, そうでない時 $x_i = 0$ となる. この時

$$1 = \sum_{i=1}^n x_i^2 = \sum_{i=1}^k x_{n_i}^2 = \sum_{i=1}^k \frac{\sqrt{\lambda}}{\sqrt{3a_{n_i}}} \quad \therefore \sqrt{\lambda} = \left(\sum_{i=1}^k \frac{1}{\sqrt{3a_{n_i}}} \right)^{-1}$$

よって

$$x_{n_i}^2 = \frac{\sqrt{\lambda}}{\sqrt{3a_{n_i}}} = \frac{1}{\sqrt{a_{n_i}}} \left(\sum_{j=1}^k \frac{1}{\sqrt{a_{n_j}}} \right)^{-1}$$

なので

$$\begin{aligned} f(x_1, \dots, x_n) &= \sum_{i=1}^n a_ix_i^6 = \sum_{i=1}^k a_{n_i}x_{n_i}^6 = \sum_{i=1}^k a_{n_i} \left(\frac{1}{\sqrt{a_{n_i}}} \right)^3 \left(\sum_{j=1}^k \frac{1}{\sqrt{a_{n_j}}} \right)^{-3} \\ &= \sum_{i=1}^k \frac{1}{\sqrt{a_{n_i}}} \left(\sum_{j=1}^k \frac{1}{\sqrt{a_{n_j}}} \right)^{-3} = \left(\sum_{i=1}^k \frac{1}{\sqrt{a_{n_i}}} \right)^{-2}. \end{aligned}$$

k と n_i を動かした時, この最小値は

$$\left(\sum_{i=1}^n \frac{1}{\sqrt{a_i}} \right)^{-2}$$

である. よってこれが f の最小値としてありうるが, 実際 $x_i = \left(\frac{1}{\sqrt{a_i}} \right)^{1/2} \left(\sum_{j=1}^n \frac{1}{\sqrt{a_j}} \right)^{-1/2} (1 \leq i \leq n)$

の時 f はこの値を取り, この点は単位球面上にあるから, f の最小値は

$$\left(\sum_{i=1}^n \frac{1}{\sqrt{a_i}} \right)^{-2}.$$

□

平成 18 年度 (2005 年 8 月実施)

問 1

次の定積分 (1), (2), (3) を求めよ, ただし $a \in \mathbb{C}$, $n \in \mathbb{N}$ とする. なお $\int_{-\infty}^{\infty} e^{-x^2} dx = \sqrt{\pi}$ を用いてもよい.

$$(1) \int_{-\infty}^{\infty} e^{-x^2} e^{ax} dx$$

$$(2) \int_{-\infty}^{\infty} e^{-x^2} x^{2n} dx$$

$$(3) \int_{-\infty}^{\infty} e^{-x^2} \cos x dx$$

解答. 問題の積分を順に $I_1(a)$, $I_2(n)$, I_3 とする.

(1)

$$I_1(a) = e^{a^2/4} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-(x-a/2)^2} dx$$

である. $a/2 = \alpha + i\beta$ ($\alpha, \beta \in \mathbb{R}$) とする. $R > 0$ を取り, 4 点 P_1, P_2, P_3, P_4 を順に $R, R+i\beta, -R+i\beta, -R$ とする. $e^{-(x-a/2)^2}$ を長方形 $P_1P_2P_3P_4$ 上で積分すると 0. 一方 $R \rightarrow \infty$ の時

$$\begin{aligned} \int_{P_4P_1} e^{-(x-a/2)^2} dx &\rightarrow \int_{-\infty}^{\infty} e^{-(x-a/2)^2} dx, \\ \int_{P_2P_3} e^{-(x-a/2)^2} dx &= - \int_{-R}^R e^{-(t-\alpha)^2} dt \rightarrow - \int_{-\infty}^{\infty} e^{-t^2} dt = -\sqrt{\pi}, \\ \left| \int_{P_1P_2} e^{-(x-a/2)^2} dx \right| &= \left| \int_0^\beta e^{-(R+it-\alpha-i\beta)^2} i dt \right| \leq \int_0^\beta e^{-(R-\alpha)^2 + (t-\beta)^2} dt \rightarrow 0, \\ \left| \int_{P_3P_4} e^{-(x-a/2)^2} dx \right| &= \left| \int_\beta^0 e^{-(-R+it-\alpha-i\beta)^2} i dt \right| \leq \int_0^\beta e^{-(R+\alpha)^2 + (t-\beta)^2} dt \rightarrow 0 \end{aligned}$$

だから $\int_{-\infty}^{\infty} e^{-(x-a/2)^2} dx = \sqrt{\pi}$. よって $I_1(a) = \sqrt{\pi} e^{a^2/4}$.

(2) $e^{ax} = \sum_{n \geq 0} \frac{(ax)^n}{n!}$ は x の関数として \mathbb{R} 上広義一様絶対収束するから

$$I_1(a) = \int_{-\infty}^{\infty} e^{-x^2} \sum_{n \geq 0} \frac{(ax)^n}{n!} dx = \sum_{n \geq 0} \frac{a^n}{n!} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-x^2} x^n dx = \sum_{n \geq 0} \frac{a^{2n}}{(2n)!} I_2(n).$$

一方 (1) より

$$I_1(a) = \sqrt{\pi} \sum_{n \geq 0} \frac{1}{n!} \left(\frac{a^2}{4} \right)^n$$

だから a^{2n} の係数を比べて

$$I_2(n) = \frac{(2n)!}{n!4^n} \sqrt{\pi} = \frac{(2n)!}{2^{2n}n!} \sqrt{\pi}.$$

(3)

$$I_3 = \int_{-\infty}^{\infty} e^{-x^2} \frac{e^{ix} + e^{-ix}}{2} dx = \frac{1}{2} (I_1(i) + I_1(-i)) = \sqrt{\pi} e^{-1/4}$$

□

問 2

次の (i), (ii) の間に答えよ.

- (i) V, W を有限次元実線形空間, v, w をそれぞれ V, W の元とし, $v \neq 0$ と仮定する. このとき, 線形写像 $f: V \rightarrow W$ で $f(v) = w$ となるものが存在することを示せ.
- (ii) 2 行 2 列複素行列 A で, $A = B^2$ となる 2 行 2 列複素行列 B が存在しない例を 1 つあげよ. その例についてこのような B が存在しないことを証明せよ.

解答. (i) $\dim V = n$ とする. $v \neq 0$ だから, $v_1 = v, v_2, \dots, v_n \in V$ が V の基底になるように取れる. $f: V \rightarrow W$ を

$$f(v_i) = \begin{cases} w & (i = 1) \\ 0 & (i > 1) \end{cases}$$

から定まる線形写像とすれば, これが条件を満たす.

(ii) $A = \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}$.

$A = B^2$ となる $B \in M_2(\mathbb{C})$ が存在したとする. $B = \begin{pmatrix} x & y \\ z & w \end{pmatrix}$ とおくと,

$$\begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 0 & 0 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x & y \\ z & w \end{pmatrix}^2 = \begin{pmatrix} x^2 + yz & y(x+w) \\ z(x+w) & w^2 + yz \end{pmatrix}.$$

(1, 2) 成分から $x + w \neq 0$ だから, (2, 1) 成分より $z = 0$. よって (1, 1), (2, 2) 成分より $x = w = 0$. この時 (2, 2) 成分が 0 となって矛盾. \square

問 3

t を正の実数, a_0, a_1, a_2, a_3 を実数とすると,

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{a_0 + a_1 t^n + a_2 \left(\frac{t^2}{2!}\right)^n + a_3 \left(\frac{t^3}{3!}\right)^n}{1 + t^n + \left(\frac{t^2}{2!}\right)^n + \left(\frac{t^3}{3!}\right)^n}$$

を求めよ.

解答. $f_j(t) = \frac{t^j}{j!}$ とおく.

$$\begin{aligned} f_0 - f_1 &= 1 - t, & f_0 - f_2 &= \frac{2 - t^2}{2}, & f_0 - f_3 &= \frac{6 - t^3}{6}, \\ f_1 - f_2 &= \frac{t(2 - t)}{2}, & f_1 - f_3 &= \frac{t(6 - t^2)}{6}, & f_2 - f_3 &= \frac{t^2(3 - t)}{6} \end{aligned}$$

であるから, 各 t に対し $f_j - f_k$ の符号と $M := \max_j f_j$ は以下ようになる.

t	$f_0 - f_1$	$f_0 - f_2$	$f_0 - f_3$	$f_1 - f_2$	$f_1 - f_3$	$f_2 - f_3$	M
$0 < t < 1$	+	+	+	+	+	+	f_0
$t = 1$	0	+	+	+	+	+	$f_0 = f_1$
$1 < t < 2$	−	(*)	(*)	+	+	+	f_1
$t = 2$	−	−	−	0	+	+	$f_1 = f_2$
$2 < t < 3$	−	−	−	−	(*)	+	f_2
$t = 3$	−	−	−	−	−	0	$f_2 = f_3$
$3 < t$	−	−	−	−	−	−	f_3

ただし (*) は t により $+, -, 0$ のいずれかになることを表す. 問題の極限を L とおく. 唯一の j で $M = f_j$ となる時は $L = a_j$, 異なる j, k で $M = f_j = f_k$ となる時は $L = \frac{a_j + a_k}{2}$ だから

$$L = \begin{cases} a_0 & (0 < t < 1) \\ \frac{a_0 + a_1}{2} & (t = 1) \\ a_1 & (1 < t < 2) \\ \frac{a_1 + a_2}{2} & (t = 2) \\ a_2 & (2 < t < 3) \\ \frac{a_2 + a_3}{2} & (t = 3) \\ a_3 & (3 < t) \end{cases}.$$

□

問 4

$a_n (n = 1, 2, \dots)$ を複素数とし、等式

$$z = \sum_{n=1}^{\infty} a_n z^n (1-z)^{2n}$$

が $z=0$ の複素近傍で成り立つとする.

- (i) $f(z) = z(1-z)^2$ として, a_n が $\frac{zf'(z)}{f(z)^{n+1}}$ の $z=0$ における留数と等しいことを証明せよ.
(ii) $a_n (n = 1, 2, \dots)$ を求めよ.

解答. (i) $z=0$ は $f(z)$ の 1 位の零点だから $f'(0) \neq 0$. よって $z=0$ の近傍で $f(z)$ の逆関数 $z = g(w)$ が存在する. 与式で $z = g(w)$ として

$$g(w) = \sum_{n \geq 1} a_n f(g(w))^n = \sum_{n \geq 1} a_n w^n.$$

$f(0) = 0$ だから, これは $w=0$ の近傍で成立する. ここで 0 の近傍で

$$g(w) = \frac{1}{2\pi i} \oint \frac{zf'(z)}{f(z) - w} dz$$

となることを示す. ただし積分は $r > 0$ を十分小さく取り $|z| = r$ 上を正の向きに行う. 被積分関数の特異点は $f(z) = w$ となる点だから $z = g(f(z)) = g(w)$. $g(0) = 0$ だから, w が 0 の近傍にある時, $g(w)$ は 0 の近傍にある. よって $z = g(w)$ は積分路が囲む領域内にあるとして良い. 一方 $f(g(w)) = w$ を微分して $f'(g(w))g'(w) = 1$ だから $(f(z) - w)'|_{z=g(w)} = f'(g(w)) \neq 0$. よって $z = g(w)$ は 1 位の極だから

$$\begin{aligned} \frac{1}{2\pi i} \oint \frac{zf'(z)}{f(z) - w} dz &= \text{Res} \left(\frac{zf'(z)}{f(z) - w}, z = g(w) \right) = \lim_{z \rightarrow g(w)} \frac{z - g(w)}{f(z) - w} zf'(z) \\ &= \frac{1}{f'(g(w))} g(w) f'(g(w)) = g(w). \end{aligned}$$

これで示せた. この式を n 回微分して

$$g^{(n)}(w) = \frac{n!}{2\pi i} \oint \frac{zf'(z)}{(f(z) - w)^{n+1}} dz.$$

よって

$$a_n = \frac{g^{(n)}(0)}{n!} = \frac{1}{2\pi i} \oint \frac{zf'(z)}{f(z)^{n+1}} dz = \text{Res} \left(\frac{zf'(z)}{f(z)^{n+1}}, z = 0 \right).$$

- (ii) $z=0$ の近傍で $\frac{1}{1-z} = \sum_{k \geq 0} z^k$ で, これは絶対一様収束するから $2n$ 回微分して

$$\frac{(2n)!}{(1-z)^{2n+1}} = \sum_{k \geq 2n} k(k-1) \cdots (k-(2n-1)) z^{k-2n} = \sum_{k \geq 2n} \frac{k!}{(k-2n)!} z^{k-2n}.$$

よって

$$\begin{aligned} \frac{zf'(z)}{f(z)^{n+1}} &= \frac{z(1-z)(1-3z)}{z^{n+1}(1-z)^{2(n+1)}} = \frac{1-3z}{z^n} \frac{1}{(1-z)^{2n+1}} \\ &= \frac{1-3z}{(2n)!} \sum_{k \geq 2n} \frac{k!}{(k-2n)!} z^{k-3n} \end{aligned}$$

であるから,

$$\begin{aligned} a_n &= \frac{1}{(2n)!} \left(\frac{(3n-1)!}{((3n-1)-2n)!} - 3 \frac{(3n-2)!}{((3n-2)-2n)!} \right) \\ &= \frac{2(3n-2)!}{(2n)!(n-1)!}. \end{aligned}$$

□

問 5A

n を自然数, k を正の奇数とし, A を n 次実対称行列とする. n 次実正方行列 X に対して同値関係

$$XA = AX \iff XA^k = A^kX$$

が成り立つことを証明せよ.

解答. \implies : k についての帰納法で示す. $k = 1$ の時自明. k 以下で成り立つ時,

$$XA^{k+2} = XA^kA^2 = A^kXA^2 = A^kAXA = A^{k+1}AX = A^{k+2}X$$

だから $k+2$ でも成り立つ. これで示された.

\impliedby : A は実対称だから, 直交行列 P があって ${}^tPAP = D := \text{diag}(\lambda_1, \dots, \lambda_n)$ ($\lambda \in \mathbb{R}$) とできる. この時 $A^k = PD^{kt}P$ だから

$$\begin{aligned} XA^k = A^kX &\iff XPD^{kt}P = PD^{kt}PX \\ &\iff {}^tPXP D^k = D^{kt}PXP. \end{aligned}$$

${}^tPXP = (x_{ij})$ とする. $D^k = \text{diag}(\lambda_1^k, \dots, \lambda_n^k)$ だから, ${}^tPXP D^k$ の (i, j) 成分は $x_{ij}\lambda_j^k$, $D^{kt}PXP$ の (i, j) 成分は $x_{ij}\lambda_i^k$. よって $x_{ij}\lambda_j^k = x_{ij}\lambda_i^k$ だから $x_{ij} = 0$ または $\lambda_j^k = \lambda_i^k$. k は奇数だから $x_{ij} = 0$ または $\lambda_j = \lambda_i$. これは $k = 1$ の場合の成立を意味するから $XA = AX$. \square

問 5B

\mathbb{R}^4 における 4 点 $P_i (i = 1, 2, 3, 4)$ と 2 点 $Q_j (j = 1, 2)$ が次のように与えられているとする.

$$P_1 = \begin{bmatrix} 2 \\ 0 \\ -2 \\ 2 \end{bmatrix}, \quad P_2 = \begin{bmatrix} -2 \\ 2 \\ 2 \\ -1 \end{bmatrix}, \quad P_3 = \begin{bmatrix} 1 \\ -1 \\ 2 \\ 0 \end{bmatrix}, \quad P_4 = \begin{bmatrix} -1 \\ 1 \\ -2 \\ 3 \end{bmatrix},$$

$$Q_1 = \begin{bmatrix} -2 \\ 4 \\ 2 \\ -3 \end{bmatrix}, \quad Q_2 = \begin{bmatrix} 2 \\ -3 \\ -2 \\ 5 \end{bmatrix}$$

このとき領域

$$D = \left\{ \sum_{i=1}^4 \alpha_i P_i \mid \alpha_i \geq 0 (i = 1, 2, 3, 4) \right\}$$

と線分 $\overline{Q_1 Q_2}$ は点を共有するか? 点を共有するとすれば, D と $\overline{Q_1 Q_2}$ の交わりの端点を求めよ.

解答.

$$\overline{Q_1 Q_2}: \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \\ w \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -2 \\ 4 \\ 2 \\ -3 \end{pmatrix} + \lambda \begin{pmatrix} 4 \\ -7 \\ -4 \\ 8 \end{pmatrix} \quad (0 \leq \lambda \leq 1)$$

であるから, もし $D \cap \overline{Q_1 Q_2} \neq \emptyset$ なら, その共有点の座標は

$$\alpha_1 \begin{pmatrix} 2 \\ 0 \\ -2 \\ 2 \end{pmatrix} + \alpha_2 \begin{pmatrix} -2 \\ 2 \\ 2 \\ -1 \end{pmatrix} + \alpha_3 \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \\ 2 \\ 0 \end{pmatrix} + \alpha_4 \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \\ -2 \\ 3 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -2 \\ 4 \\ 2 \\ -3 \end{pmatrix} + \lambda \begin{pmatrix} 4 \\ -7 \\ -4 \\ 8 \end{pmatrix}$$

である. これを $Ax = b, x = {}^t(\alpha_1, \alpha_2, \alpha_3, \alpha_4, \lambda)$ の形で書いたときの $(A|b)$ に行基本変形を施すと

$$\begin{pmatrix} 2 & -2 & 1 & -1 & -4 & -2 \\ 0 & 2 & -1 & 1 & 7 & 4 \\ -2 & 2 & 2 & -2 & 4 & 2 \\ 2 & -1 & 0 & 3 & -8 & -3 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 0 & 0 & 3 & -3 & 0 & 0 \\ 0 & 2 & -1 & 1 & 7 & 4 \\ -1 & 1 & 1 & -1 & 2 & 1 \\ 0 & 1 & 2 & 1 & -4 & -1 \end{pmatrix}$$

$$\rightarrow \begin{pmatrix} 0 & 0 & 1 & -1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & -5 & -1 & 15 & 6 \\ -1 & 0 & -1 & -2 & 6 & 2 \\ 0 & 1 & 2 & 1 & -4 & -1 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 0 & 0 & 1 & -1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & -6 & 0 & 15 & 6 \\ -1 & 0 & -3 & 0 & 6 & 2 \\ 0 & 1 & 3 & 0 & -4 & -1 \end{pmatrix}.$$

$$\therefore (\alpha_1, \alpha_2, \alpha_3, \alpha_4) = \left(-\frac{3}{2}\lambda + 1, -\frac{7}{2}\lambda + 2, \frac{5}{2}\lambda - 1, \frac{5}{2}\lambda - 1 \right)$$

$\alpha_j \geq 0, 0 \leq \lambda \leq 1$ を満たす λ は $\frac{2}{5} \leq \lambda \leq \frac{4}{7}$. よって条件を満たす λ, α_i が存在するので, $\overline{Q_1 Q_2}$ と D は点を共有する. その交わりの端点は $\lambda = \frac{2}{5}, \frac{4}{7}$ の時の点だから

$$\begin{pmatrix} -2 \\ 4 \\ 2 \\ -3 \end{pmatrix} + \frac{2}{5} \begin{pmatrix} 4 \\ -7 \\ -4 \\ 8 \end{pmatrix} = \frac{1}{5} \begin{pmatrix} -2 \\ 6 \\ 2 \\ 1 \end{pmatrix}, \quad \begin{pmatrix} -2 \\ 4 \\ 2 \\ -3 \end{pmatrix} + \frac{4}{7} \begin{pmatrix} 4 \\ -7 \\ -4 \\ 8 \end{pmatrix} = \frac{1}{7} \begin{pmatrix} 2 \\ 0 \\ -2 \\ 11 \end{pmatrix}.$$

□

平成 17 年度 (2004 年 8 月実施)

問 1

次の (i), (ii), (iii) のすべてに解答せよ.

(i) n が十分大きい正整数であるとして

$$100^n, \quad n^{100}, \quad n^n, \quad (2n)!, \quad n!$$

を大きい順に並べ, その理由を簡単に述べよ.

(ii) 次の積分 I の値を求めよ.

$$I = \int_{-\infty}^{+\infty} e^{-x^2} dx.$$

(iii) n を正整数, C を円 $\{z \in \mathbb{C}; |z| = 1\}$ を反時計回りに一周する経路とすると, 次の積分 I_n の値を求めよ.

$$I_n = \int_C \left(z + \frac{1}{z}\right)^n \frac{dz}{z}.$$

解答. (i)

$$(2n)! > n^n > n! > 100^n > n^{100}$$

である. 実際, n が十分大きい時,

$$\sum_{k=1}^{2n} \log k - n \log n > \sum_{k=1}^n \log(n+k) - n \log n = \sum_{k=1}^n \log \left(1 + \frac{k}{n}\right) > 0$$

より $(2n)! > n^n$.

$$n^n = \prod_{k=1}^n n > \prod_{k=1}^n k = n!$$

$$\sum_{k=1}^n \log k - n \log 100 > \sum_{k=100}^n \log k - n \log 100 = \sum_{k=100}^n \log \frac{k}{100} - 99 \log 100 > 0$$

より $n! > 100^n$. また, $f(x) = \frac{\log x}{x}$ ($x > e$) とおけば $f'(x) = \frac{1 - \log x}{x^2} < 0$ だから $f(n) < f(100)$. つまり $100^n > n^{100}$.

(ii)

$$I^2 = \int_{-\infty}^{\infty} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-x^2-y^2} dx dy = \int_0^{2\pi} \int_0^{\infty} e^{-r^2} r dr d\theta = \int_0^{2\pi} \left. \frac{-1}{2} e^{-r^2} \right|_0^{\infty} d\theta = \int_0^{2\pi} \frac{1}{2} d\theta = \pi$$

であり, 被積分関数は正だから $I = \sqrt{\pi}$.

(iii)

$$I_n = \int_C \sum_{k=0}^n \binom{n}{k} z^k (z^{-1})^{n-k} \frac{dz}{z} = \sum_{k=0}^n \binom{n}{k} \int_C z^{2k-n-1} dz$$

だから, n が偶数の時 z^{-1} の項だけが残り $I_n = 2\pi i \binom{n}{n/2}$. n が奇数の時 z^{-1} の項はないから $I_n = 0$. \square

問 2

次の (i) と (ii) に解答せよ.

(i) α を実定数とする. 実 3 変数 (x, y, z) の関数

$$f(x, y, z) = (\alpha + 1)x^2 + (\alpha + 1)y^2 + \alpha z^2 + 2xy + 2\alpha xz + 4yz$$

が任意の $(x, y, z) (\neq (0, 0, 0))$ に対して常に正の値を取るための, α に関する必要十分条件を求めよ.

(ii) $n \times n$ 行列 A の各列の成分は 1 が高々一個, -1 が高々一個でその他は 0 であるとする. このような行列 A の行列式の取り得る値を求めよ.

解答. (i)

$$A = \begin{pmatrix} \alpha + 1 & 1 & \alpha \\ 1 & \alpha + 1 & 2 \\ \alpha & 2 & \alpha \end{pmatrix}, \quad v = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix}$$

とおけば $f(x, y, z) = {}^t v A v$ だから, 任意の $v \in \mathbb{R}^3 \setminus \{0\}$ に対し $f(v) > 0$ となることは, 3 つの小行列式

$$\alpha + 1, \quad \begin{vmatrix} \alpha + 1 & 1 \\ 1 & \alpha + 1 \end{vmatrix} = \alpha(\alpha + 2), \quad \begin{vmatrix} \alpha + 1 & 1 & \alpha \\ 1 & \alpha + 1 & 2 \\ \alpha & 2 & \alpha \end{vmatrix} = \alpha^2 - 4$$

が全て正であることと同値だから, $\alpha > 2$.

(ii) 条件を満たす $n \times n$ 行列の行列式の取り得る値の集合を D_n とおく. A の 1 列目が 0 のみからなる時は $|A| = 0$. 1 列目に ± 1 のどちらかのみがある時, $a_{i1} = \pm 1$ とし, A から i 行目と 1 列目を除いた $(n-1)$ 次行列を A' とすれば, A' も条件を満たすから $|A| = \pm(-1)^{i-1}|A'| \in \{\pm d; d \in D_{n-1}\}$. 1 列目に ± 1 どちらもある時, $a_{i1} = 1, a_{i'1} = -1$ とする. i 行を i' 行に足しても $|A|$ は変わらない. この時 i' 行目の成分が $(i', 1)$ 成分を除いて変わらなければ, A' も条件を満たすから $|A| = (-1)^{i-1}|A'| \in \{\pm d; d \in D_{n-1}\}$. (i', j) 成分が変わるとすると $a_{ij} \neq 0$. $a_{ij} = 1$ なら $a_{i'j} = -1, 0$. 前者なら A の 1 列と j 列が等しくなり $|A| = 0$. 後者なら基本変形後の i 行と 1 列を除いた $(n-1)$ 次行列を A' とすれば A' も条件を満たすから $|A| = (-1)^{i-1}|A'| \in \{\pm d; d \in D_{n-1}\}$. $a_{ij} = -1$ の時も同様. 以上から

$$D_n \subset \{0\} \cup \{\pm d; d \in D_{n-1}\}.$$

ここで $D_1 = \{0, \pm 1\}$ は明らかだから $D_n \subset \{0, \pm 1\}$. $A = (\varepsilon I_{n-1})$ ($\varepsilon = 0, \pm 1$) は条件を満たし $|A| = \varepsilon$ だから逆の包含も成り立つ. よって $D_n = \{0, \pm 1\}$. \square

問 3

正定数 a に対し数列 x_n ($n = 0, 1, 2, \dots$) を

$$x_0 = 0, \quad x_{n+1} = a + 2x_n^2 \quad (n \geq 0)$$

により定める. $n \rightarrow \infty$ のとき x_n が有限値に収束するための, a に関する必要十分条件を求めよ.

解答. $\cdot a > 1/8$ の時

$$x_{n+1} - x_n = (a + 2x_n^2) - x_n = 2 \left(x_n - \frac{1}{4} \right)^2 + a - \frac{1}{8} > 0$$

だから x_n は単調増加. もし x_n が上に有界なら有限値に収束するが, $L = \lim_{n \rightarrow \infty} x_n \in \mathbb{R}$ とおくと, $L = a + 2L^2$ より $L = \frac{1 \pm \sqrt{1-8a}}{4} \notin \mathbb{R}$ となって矛盾. よって x_n は上に有界でないので, 有限値に収束しない.

$\cdot a \leq 1/8$ の時, まず $x_n < x_{n+1} < L := \frac{1 - \sqrt{1-8a}}{4}$ となることを帰納法で示す. $n = 0$ の時は

$$\begin{aligned} x_1 - x_0 &= a > 0, \\ L - x_1 &= (a + 2L^2) - a = 2L^2 > 0 \end{aligned}$$

だからよい. n で正しい時, $x < L$ なら $x < a + 2x^2$ となることから,

$$\begin{aligned} x_{n+2} - x_{n+1} &= (a + 2x_{n+1}^2) - x_{n+1} > 0, \\ L - x_{n+2} &= (a + 2L^2) - (a + 2x_{n+1}^2) = 2(L + x_{n+1})(L - x_{n+1}) > 0 \end{aligned}$$

だから $n + 1$ でも正しい. これで示された. よって x_n は上に有界な単調増加列だから, 有限値に収束する.

以上から必要十分条件は $a \leq 1/8$.

□

問 4

$f(x) = \sum_{n=1}^{\infty} \frac{x^n}{n^2}$ ($0 \leq x \leq 1$) として関数 f を定義する. このとき,

$$(\log x)(\log(1-x)) + f(x) + f(1-x)$$

が $0 < x < 1$ で定数となり, その定数は $\sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{n^2}$ で与えられることを示せ.

解答. $F(x) = (\log x)(\log(1-x)) + f(x) + f(1-x)$ とおく. $0 \leq x \leq 1$ 上

$$\sum_{n \geq 1} \left| \frac{x^n}{n^2} \right| \leq \sum_{n \geq 1} \frac{1}{n^2} < \infty$$

だから Weierstrass の優級数定理より $f(x)$ は $0 \leq x \leq 1$ 上一様収束. よって $0 < x < 1$ において

$$f'(x) = \sum_{n \geq 1} \frac{x^{n-1}}{n} = \frac{1}{x} \sum_{n \geq 1} \frac{x^n}{n} = -\frac{\log(1-x)}{x}.$$

これより

$$\begin{aligned} F'(x) &= \frac{\log(1-x)}{x} - \frac{\log x}{1-x} + f'(x) - f'(1-x) \\ &= \frac{\log(1-x)}{x} - \frac{\log x}{1-x} - \frac{\log(1-x)}{x} + \frac{\log x}{1-x} = 0 \end{aligned}$$

だから $F(x)$ は $0 < x < 1$ 上定数.

再び f の一様収束性から

$$\lim_{x \searrow 0} f(x) = 0, \quad \lim_{x \searrow 0} f(1-x) = \sum_{n \geq 1} \frac{1}{n^2}.$$

また,

$$\begin{aligned} \lim_{x \searrow 0} (\log x)(\log(1-x)) &= \lim_{x \searrow 0} (x \log x) \frac{\log(1-x)}{x} = \lim_{x \searrow 0} x \log x \cdot \lim_{x \searrow 0} \frac{\log(1-x)}{x} \\ &= \lim_{x \searrow 0} \frac{\log x}{1/x} \cdot (\log(1-x))'|_{x=0} = \lim_{x \searrow 0} \frac{1/x}{-1/x^2} \cdot \frac{-1}{1-x} \Big|_{x=0} \\ &= 0 \cdot (-1) = 0 \end{aligned}$$

だから,

$$F(x) = \lim_{x \searrow 0} F(x) = 0 + 0 + \sum_{n \geq 1} \frac{1}{n^2} = \sum_{n \geq 1} \frac{1}{n^2}.$$

□

問 5A

E を実 p 次元線形空間, F を実 q 次元線形空間とし, $\text{Hom}(E, F)$ で E から F への実線形写像全体のなす線形空間を表すものとする. E の元 e を固定して写像 $\varphi: \text{Hom}(E, F) \rightarrow F$ を

$$\varphi(f) = f(e) \quad (f \in \text{Hom}(E, F))$$

で定めるとき, φ は実線形写像であることを示し, さらにその階数を求めよ.

解答. 任意の $\lambda, \mu \in \mathbb{R}, f, g \in \text{Hom}(E, F)$ に対し

$$\varphi(\lambda f + \mu g) = (\lambda f + \mu g)(e) = \lambda f(e) + \mu g(e) = \lambda \varphi(f) + \mu \varphi(g)$$

だから φ は実線形写像.

x_1, \dots, x_p を E の基底, y_1, \dots, y_q を F の基底とする. $f_{ij} \in \text{Hom}(E, F)$ を

$$f_{ij}(x_k) = \begin{cases} y_j & (k = i) \\ 0 & (k \neq i) \end{cases}$$

から定まるものとする. f_{ij} たちは $\text{Hom}(E, F)$ の基底であることを示す. $\sum_{i=1}^p \sum_{j=1}^q \gamma_{ij} f_{ij} = 0$ ($\gamma_{ij} \in \mathbb{R}$) とすると, 任意の $1 \leq k \leq p$ に対し

$$0 = \sum_{i=1}^p \sum_{j=1}^q \gamma_{ij} f_{ij}(x_k) = \sum_{j=1}^q \gamma_{kj} y_j.$$

y_1, \dots, y_q は一次独立だから $\gamma_{k1} = \dots = \gamma_{kq} = 0$. k は任意だから $\gamma_{ij} = 0$. よって f_{ij} は一次独立. 任意に $f \in \text{Hom}(E, F)$ を取ると $f(x_i) = \sum_{j=1}^q \beta_{ij} y_j$ と書けるので

$$f \left(\sum_{i=1}^p \alpha_i x_i \right) = \sum_{i=1}^p \sum_{j=1}^q \alpha_i \beta_{ij} y_j = \sum_{i=1}^p \sum_{j=1}^q \beta_{ij} f_{ij} \left(\sum_{k=1}^p \alpha_k x_k \right).$$

よって f は f_{ij} の一次結合で書ける. 以上から f_{ij} は $\text{Hom}(E, F)$ の基底である.
これより

$$\begin{aligned} \text{rank } \varphi &= \dim \text{Hom}(E, F) - \dim \text{Ker } \varphi \\ &= pq - \dim \text{Ker } \varphi. \end{aligned}$$

$e = 0$ の時は任意の $f \in \text{Hom}(E, F)$ に対し $f(e) = 0$ だから $\dim \text{Ker } \varphi = pq$. $e \neq 0$ とする. E の基底を取り直して $x_1 = e$ として良い. $f = \sum_{i=1}^p \sum_{j=1}^q \gamma_{ij} f_{ij} \in \text{Ker } \varphi$ は

$$0 = \varphi(f) = f(x_1) = \sum_{i=1}^p \sum_{j=1}^q \gamma_{ij} f_{ij}(x_1) = \sum_{j=1}^q \gamma_{1j} y_j$$

を満たす. y_1, \dots, y_q は一次独立だから $\gamma_{11} = \dots = \gamma_{1q} = 0$. よって $\dim \text{Ker } \varphi = pq - q$.
以上から

$$\text{rank } \varphi = \begin{cases} 0 & (e = 0) \\ q & (e \neq 0). \end{cases}$$

□

問 5B

2 つのパラメータ α, β を含む次のような $(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5)$ に関する連立一次方程式 (E) を考える.

$$(E) \quad \begin{pmatrix} 3 & -1 & 0 & 2 & 1 \\ -6 & 1-\alpha & -2 & -7-\alpha & 5 \\ -3 & 0 & -2 & -5 & 6 \\ 3 & 2+\alpha & 4 & 5+\alpha+\beta & -9 \\ 6 & 0 & 2 & 4 & -1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \\ x_5 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 3 \\ -5-\alpha-3\beta \\ -2 \\ 2+2\alpha+2\beta \\ 6 \end{pmatrix}$$

このとき次の (i), (ii) に答えよ.

(i) 解が存在するための (α, β) に関する必要十分条件を求めよ.

(ii) 解が一意的に存在するための (α, β) に関する必要十分条件を求めよ.

解答. (i) (E) を $Ax = b$ と書き, A に列基本変形, $(A|b)$ に行基本変形を施すと

$$\begin{aligned} & \begin{pmatrix} 3 & -1 & 0 & 2 & 1 & 3 \\ -6 & 1-\alpha & -2 & -7-\alpha & 5 & -5-\alpha-3\beta \\ -3 & 0 & -2 & -5 & 6 & -2 \\ 3 & 2+\alpha & 4 & 5+\alpha+\beta & -9 & 2+2\alpha+2\beta \\ 6 & 0 & 2 & 4 & -1 & 6 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 3 & 0 & 1 & -1 & 2 & 3 \\ -6 & -2 & 5 & 1-\alpha & -7-\alpha & -5-\alpha-3\beta \\ -3 & -2 & 6 & 0 & -5 & -2 \\ 3 & 4 & -9 & 2+\alpha & 5+\alpha+\beta & 2+2\alpha+2\beta \\ 6 & 2 & -1 & 0 & 4 & 6 \end{pmatrix} \\ & \rightarrow \begin{pmatrix} 3 & 0 & 1 & -1 & 2 & 3 \\ -3 & -2 & 6 & 0 & -5 & -2 \\ 6 & 2 & -1 & 0 & 4 & 6 \\ -6 & -2 & 5 & 1-\alpha & -7-\alpha & -5-\alpha-3\beta \\ 3 & 4 & -9 & 2+\alpha & 5+\alpha+\beta & 2+2\alpha+2\beta \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 3 & 0 & 1 & -1 & 2 & 3 \\ 0 & -2 & 7 & -1 & -3 & 1 \\ 0 & 2 & -3 & 2 & 0 & 0 \\ 0 & -2 & 7 & -1-\alpha & -3-\alpha & 1-\alpha-3\beta \\ 0 & 4 & -10 & 3+\alpha & 3+\alpha+\beta & -1+2\alpha+2\beta \end{pmatrix} \\ & \rightarrow \begin{pmatrix} 3 & 0 & 1 & -1 & 2 & 3 \\ 0 & -2 & 7 & -1 & -3 & 1 \\ 0 & 0 & 4 & 1 & -3 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & -\alpha & -\alpha & -\alpha-3\beta \\ 0 & 0 & 4 & 1+\alpha & -3+\alpha+\beta & 1+2\alpha+2\beta \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 3 & 0 & 1 & -1 & 2 & 3 \\ 0 & -2 & 7 & -1 & -3 & 1 \\ 0 & 0 & 4 & 1 & -3 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & \alpha & \alpha & \alpha+3\beta \\ 0 & 0 & 0 & \alpha & \alpha+\beta & 2\alpha+2\beta \end{pmatrix} \\ & \rightarrow \begin{pmatrix} 3 & 0 & 1 & -1 & 2 & 3 \\ 0 & -2 & 7 & -1 & -3 & 1 \\ 0 & 0 & 4 & 1 & -3 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & \alpha & \alpha & \alpha+3\beta \\ 0 & 0 & 0 & 0 & \beta & \alpha-\beta \end{pmatrix} \end{aligned}$$

だから, この左側の 5×5 行列を A' , 第 6 列を b' とすれば, (E) が解を持つことは $\text{rank}(A') = \text{rank}(A'|b')$ と同値.

$$\text{rank}(A') = \begin{cases} 3 & (\alpha = \beta = 0) \\ 4 & (\alpha, \beta \text{ のうち一方のみが } 0) \\ 5 & (\alpha\beta \neq 0) \end{cases}, \quad \text{rank}(A'|b') = \begin{cases} 3 & (\alpha = \beta = 0) \\ 5 & (\text{それ以外}) \end{cases}$$

だから, 解を持つ必要十分条件は $\alpha = \beta = 0$ または $\alpha\beta \neq 0$.

(ii) 解が一意的であることは, $\text{rank}(A') = \text{rank}(A'|b')$ かつ A' が full-rank と同値だから, $\alpha\beta \neq 0$ が必要十分. \square

平成 16 年度 (2003 年 8 月実施)

問 1

$m \times n$ 実行列 A の最初の n' 列 ($n' \leq n$) よりなる $m \times n'$ 行列を B とする. また, A, B の最初の m' 行 ($m' \leq m$) よりなる $m' \times n$ 行列, $m' \times n'$ 行列をそれぞれ A', B' とする. これらの行列に対して

$$r(A) - r(A') \geq r(B) - r(B')$$

が成り立つことを証明せよ. ただし, $r(X)$ は行列 X の階数とする.

解答. $A = \begin{pmatrix} X & Y \\ Z & W \end{pmatrix}$ と書く. ただし $X \in M(m', n', \mathbb{R}), Y \in M(m', n - n', \mathbb{R}), Z \in M(m - m', n', \mathbb{R}), W \in M(m - m', n - n', \mathbb{R})$. この時 $B = \begin{pmatrix} X \\ Z \end{pmatrix}, A' = \begin{pmatrix} X & Y \end{pmatrix}, B' = X$ であるから

$$\begin{aligned} r(A) + r(B') &= r \begin{pmatrix} X & Y & \\ Z & W & \\ & & X \end{pmatrix} = r \begin{pmatrix} X & Y & \\ Z & W & \\ X & Y & X \end{pmatrix} = r \begin{pmatrix} X & Y & \\ Z & W & \\ & Y & X \end{pmatrix} \\ &= r \begin{pmatrix} X & & Y \\ Z & & W \\ & X & Y \end{pmatrix} = r \begin{pmatrix} B & * \\ & A' \end{pmatrix} \geq r(B) + r(A'). \end{aligned}$$

□

問 2

2 次実正方行列 $A = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$ が $a + d \geq 2$ をみたしているとする. ある整数 $k \geq 1$ に対して $A^k = I$ が成り立つとき, $A = I$ であることを証明せよ. ただし, I は 2 次単位行列を表す.

解答. A の固有値を λ , 対応する固有ベクトルを v とすると, $\lambda^k v = A^k v = v$ より $\lambda^k = 1$. よって A の固有値は $\exp\left(\frac{2\pi im}{k}\right), \exp\left(\frac{2\pi in}{k}\right)$ ($0 \leq m, n < k$) とおける. 従って

$$2 \leq a + d = \operatorname{tr} A = \exp\left(\frac{2\pi im}{k}\right) + \exp\left(\frac{2\pi in}{k}\right).$$

実部と虚部を見て

$$\cos \frac{2\pi m}{k} + \cos \frac{2\pi n}{k} \geq 2, \quad \sin \frac{2\pi m}{k} + \sin \frac{2\pi n}{k} = 0.$$

(第 1 式の左辺) $\leq 1 + 1 = 2$ であるから, 等号が成立し $m = n = 0$. この時第 2 式も成立する. よって A の固有値は 1 のみだから, Jordan 標準形は I または $\begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$. 後者とする, $P \in GL_2(\mathbb{C})$ があって $P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$ となるが,

$$I = P^{-1}A^kP = (P^{-1}AP)^k = \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}^k = \begin{pmatrix} 1 & k \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$$

となって $k \geq 1$ に反する. よって A の Jordan 標準形は I となるが, これは $A = I$ を意味する. \square

問 3

n 次実正方行列の全体 $M_n(\mathbb{R})$ を n^2 次元ユークリッド空間 \mathbb{R}^{n^2} と同一視する. 正則行列全体のなす開集合 $U \subset M_n(\mathbb{R})$ からそれ自身への写像 $\varphi: U \rightarrow U$ と $A \in U$ に対して

$$\delta_{\varphi, A} = \lim_{r \rightarrow 0} \frac{\varphi(B_r(A)) \text{ の体積}}{B_r(A) \text{ の体積}}$$

とおく. ただし, $B_r(A)$ は $A = (a_{ij})$ を中心とする半径 r の球

$$\left\{ (x_{ij}) \in M_n(\mathbb{R}) \left| \sum_{1 \leq i, j \leq n} |x_{ij} - a_{ij}|^2 < r^2 \right. \right\}$$

である. 次の 2 つの場合に $\delta_{\varphi, A}$ を求めよ.

- (i) $\varphi(X) = BX$. ただし, B は n 次実正則行列.
- (ii) $\varphi(X) = X^{-1}$.

解答. $X = (x_{ij}), Y = (y_{ij}) \in M_n(\mathbb{R})$ に対し $d(X, Y) = (\sum_{i,j} |x_{ij} - y_{ij}|^2)^{1/2}$, 立体 S の体積を $V(S)$ とおく. また, $dX = dx_{11} \cdots dx_{1n} \cdots dx_{n1} \cdots dx_{nn}$ などと略記する.

(i) $\varphi(B_r(A)) = \{Y = BX; d(X, A) < r\} = \{Y; d(B^{-1}Y, A) < r\}$ である. $Y = BX$ を x_{kl} で微分して

$$\frac{\partial Y}{\partial x_{kl}} = B \frac{\partial X}{\partial x_{kl}} = BE_{kl}.$$

ただし E_{ij} は行列単位. 両辺の (i, j) 成分を比べて

$$\frac{\partial y_{ij}}{\partial x_{kl}} = \begin{cases} b_{ik} & (j = l) \\ 0 & (j \neq l) \end{cases}.$$

よって写像 $Y = \varphi(X)$ の Jacobian は

$$\begin{aligned} \frac{\partial(y_{11}, \dots, y_{1n}, y_{21}, \dots, y_{2n}, \dots, y_{n1}, \dots, y_{nn})}{\partial(x_{11}, \dots, x_{1n}, x_{21}, \dots, x_{2n}, \dots, x_{n1}, \dots, x_{nn})} &= \begin{vmatrix} b_{11}I_n & \cdots & b_{1n}I_n \\ \vdots & & \vdots \\ b_{n1}I_n & \cdots & b_{nn}I_n \end{vmatrix} \\ &= (-1)^K \begin{vmatrix} b_{11} \cdots b_{1n} & & & & \\ & b_{11} \cdots b_{1n} & & & \\ & & \cdots & & \\ & & & b_{11} \cdots b_{1n} & \\ \vdots & & & \vdots & \\ b_{n1} \cdots b_{nn} & & & & \\ & & b_{n1} \cdots b_{nn} & & \\ & & & \cdots & \\ & & & & b_{n1} \cdots b_{nn} \end{vmatrix} = (-1)^{2K} \begin{vmatrix} B & & \\ & \ddots & \\ & & B \end{vmatrix} = (\det B)^n. \end{aligned}$$

ただし K は列基本変形をした回数.¹これより

$$V(\varphi(B_r(A))) = \int_{d(B^{-1}Y, A) < r} dY = \int_{d(X, A) < r} |\det B|^n dX = |\det B|^n V(B_r(A)).$$

よって $\delta_{\varphi, A} = |\det B|^n$.

(ii) $\varphi(B_r(A)) = \{Y = X^{-1}; d(X, A) < r\} = \{Y; d(Y^{-1}, A) < r\}$ である. $YX = I$ を x_{kl} で微分して

$$\frac{\partial Y}{\partial x_{kl}} X + Y E_{kl} = 0 \quad \therefore \frac{\partial Y}{\partial x_{kl}} = -Y E_{kl} X^{-1} = -Y E_{kl} Y = (-y_{ik} y_{lj})_{ij}$$

¹行列の Kronecker 積を知っていれば, これは $\det(B \otimes I) = (\det B)^n (\det I)^n = (\det B)^n$ とすぐわかる.

両辺の (i, j) 成分を比べて $\frac{\partial y_{ij}}{\partial x_{kl}} = -y_{ik}y_{lj}$. よって写像 $Y = \varphi(X)$ の Jacobian は

$$\begin{vmatrix} -y_{11} {}^t Y & \cdots & -y_{1n} {}^t Y \\ \vdots & & \vdots \\ -y_{n1} {}^t Y & \cdots & -y_{nn} {}^t Y \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} -y_{11} I_n & \cdots & -y_{1n} I_n \\ \vdots & & \vdots \\ -y_{n1} I_n & \cdots & -y_{nn} I_n \end{vmatrix} \begin{vmatrix} {}^t Y & & \\ & \ddots & \\ & & {}^t Y \end{vmatrix} \\ = |-Y|^n \cdot |{}^t Y|^n = (-1)^n |Y|^{2n} = (-1)^n |X|^{-2n}.$$

A は正則で $r \rightarrow 0$ の時を考えるから, $d(X, A) < r$ を満たす X は正則であるとして良い. 任意の $\varepsilon > 0$ に対し $\delta' > 0$ があって $d(X, A) < \delta'$ の時 $||\det X|^{-2n} - |\det A|^{-2n}| < \varepsilon$ となる. $r < \delta'$ として良い. この時

$$\begin{aligned} V(\varphi(B_r(A))) &= \int_{d(Y^{-1}, A) < r} dY = \int_{d(X, A) < r} |\det X|^{-2n} dX \\ &= \int_{d(X, A) < r} (|\det X|^{-2n} - |\det A|^{-2n}) dX + |\det A|^{-2n} V(B_r(A)) \end{aligned}$$

だから

$$\begin{aligned} \left| \frac{V(\varphi(B_r(A)))}{V(B_r(A))} - |\det A|^{-2n} \right| &= \left| \frac{1}{V(B_r(A))} \int_{d(X, A) < r} (|\det X|^{-2n} - |\det A|^{-2n}) dX \right| \\ &\leq \frac{1}{V(B_r(A))} \int_{d(X, A) < r} ||\det X|^{-2n} - |\det A|^{-2n}| dX \\ &< \frac{1}{V(B_r(A))} \int_{d(X, A) < r} \varepsilon dX = \varepsilon. \end{aligned}$$

$r \rightarrow 0$ として $|\delta_{\varphi, A} - |\det A|^{-2n}| < \varepsilon$. $\varepsilon > 0$ は任意だから $\delta_{\varphi, A} = |\det A|^{-2n}$. □

問 4

λ は非負実数とし, $\{a_{ij}\}_{1 \leq j \leq i < \infty}$ は以下の条件 (A), (B) をみたす正の実数の 2 重数列とする.

$$(A) \lim_{i \rightarrow \infty} \max_{1 \leq j \leq i} a_{ij} = 0,$$

$$(B) \lim_{i \rightarrow \infty} \sum_{j=1}^i a_{ij} = \lambda.$$

このとき, 次の (i), (ii) に答えよ.

$$(i) \overline{\lim}_{i \rightarrow \infty} \prod_{j=1}^i (1 + a_{ij}) \leq e^\lambda \text{ を証明せよ. ただし, } \overline{\lim} \text{ は上極限を表す.}$$

$$(ii) \lim_{i \rightarrow \infty} \prod_{j=1}^i (1 + a_{ij}) \text{ が存在することを示し, その値を求めよ.}$$

解答. (i) $x \geq 0$ において $1 + x \leq e^x$ だから

$$\prod_{j=1}^i (1 + a_{ij}) \leq \prod_{j=1}^i e^{a_{ij}} = \exp \left(\sum_{j=1}^i a_{ij} \right) \rightarrow e^\lambda \quad (i \rightarrow \infty).$$

よって $\overline{\lim}_{i \rightarrow \infty} \prod_{j=1}^i (1 + a_{ij}) \leq e^\lambda$.

(ii) $i \rightarrow \infty$ の時を考えるから, (A) より $\max_{1 \leq j \leq i} a_{ij} < 1/2$ として良い. ここで $0 < x < 1/2$ に対し

$$|\log(1+x) - x| = \left| -\sum_{n \geq 2} \frac{(-x)^n}{n} \right| < \frac{1}{2} \sum_{n \geq 2} x^n < \frac{1}{2} \sum_{n \geq 2} \left(\frac{1}{2}\right)^{n-2} x^2 = x^2$$

であるから,

$$\begin{aligned} \left| \sum_{j=1}^i (\log(1 + a_{ij}) - a_{ij}) \right| &\leq \sum_{j=1}^i |\log(1 + a_{ij}) - a_{ij}| < \sum_{j=1}^i a_{ij}^2 \\ &\leq \max_{1 \leq j \leq i} a_{ij} \cdot \sum_{j=1}^i a_{ij} \rightarrow 0 \cdot \lambda = 0 \quad (i \rightarrow \infty). \end{aligned}$$

よって

$$\lim_{i \rightarrow \infty} \prod_{j=1}^i (1 + a_{ij}) = \lim_{i \rightarrow \infty} \exp \left(\sum_{j=1}^i \log(1 + a_{ij}) \right) = \lim_{i \rightarrow \infty} \exp \left(\sum_{j=1}^i a_{ij} \right) = e^\lambda.$$

□

問 5A

集合 X からそれ自身への単射 $f: X \rightarrow X$ について考える. f を m 回くり返す合成 $\underbrace{f \circ \cdots \circ f}_m$ を f^m で表す. X の有限部分集合 Y で

$$X = \bigcup_{m=1}^{\infty} \{x \in X \mid f^m(x) \in Y\}$$

をみたすものがあるとする. このとき, 次を証明せよ.

(i) 任意の $x \in X$ に対して

$$T_x = \{f^m(x) \mid m = 1, 2, \dots\} \subset X$$

は有限集合である.

(ii) X は有限集合である.

解答. (i) $x \in X$ を任意に取る. 仮定から任意の $k \geq 1$ に対し $m_k \geq 1$ があって $f^{m_k}(f^k(x)) \in Y$ となる. m_k はこのようなもののうち最小のものとしておく. $n_k (k \geq 1)$ を $n_1 = 1, n_{k+1} = m_{n_k} + n_k$ で定める. $m_{n_k} \geq 1$ より n_k は単調増加である. この時 $k \geq 1$ に対し $j + m_j (n_k \leq j < n_{k+1})$ は一定であることを示す. $n_k + m_{n_k} < j + m_j$ となる $n_k \leq j < n_{k+1}$ があれば $m_j > n_k + m_{n_k} - j > n_k + m_{n_k} - n_{k+1} = 0$ と $f^{n_k+m_{n_k}-j}(f^j(x)) = f^{n_k+m_{n_k}}(x) \in Y$ より m_j の最小性に反する. $n_k + m_{n_k} > j + m_j$ となる $n_k \leq j < n_{k+1}$ があれば $m_{n_k} > (j - n_k) + m_j > 0$ と $f^{j-n_k+m_j}(f^{n_k}(x)) = f^{j+m_j}(x) \in Y$ より m_{n_k} の最小性に反する. これで示された. よって

$$\{f^{m_k}(f^k(x)); k \geq 1\} = \{f^{m_k+k}(x); k \geq 1\} = \{f^{m_{n_k}+n_k}(x); k \geq 1\} = \{f^{n_{k+1}}(x); k \geq 1\}$$

は Y の部分集合. $\#Y < \infty$ より $f^{n_i}(x) = f^{n_j}(x)$ となる $2 \leq i < j$ が存在する. f は単射だから $f^{n_i-1}(x) = f^{n_j-1}(x), \dots, f(x) = f^{n_j-n_i+1}(x)$. よって $\{f^m(x)\}_m$ は周期 $n_j - n_i (> 0)$. 従って $\#T_x$ は高々 $n_j - n_i$ で有限.

(ii) $y \in Y$ に対し $X_y = \{x \in X; \exists m \geq 1, f^m(x) = y\}$ とおくと

$$X = \bigcup_{m \geq 1} \bigcup_{y \in Y} \{x \in X; f^m(x) = y\} = \bigcup_{y \in Y} \{x \in X; \exists m \geq 1, f^m(x) = y\} = \bigcup_{y \in Y} X_y.$$

$\#Y < \infty$ だから $\#X_y < \infty$ を示せば良い. 任意に $y \in Y$ を取る. (i) の議論より $M \geq 1$ があって $f^M(y) = y$ だから $y \in X_y$. また, X_y の定義から, 任意の $x \in X_y$ に対し $m(x) \geq 1$ があって $f^{m(x)}(x) = y$ となる. $m(x)$ はそのようなもののうち最小のものとしておく. $m(x) = m(x')$ とすると $f^{m(x)}(x) = y = f^{m(x')}(x') = f^{m(x)}(x')$ と f の単射性より $x = x'$. よって $m(x)$ は相異なる. 今 $m(x) > m(y)$ となる $x \in X_y$ が存在したとすると, $f^{m(x)}(x) = y = f^{m(y)}(y)$ と f の単射性より $f^{m(x)-m(y)}(x) = y$. これは $m(x)$ の最小性に矛盾. よって任意の $x \in X_y$ に対し $m(x) \leq m(y)$ だから, $m(x)$ が相異なることと合わせて $\#X_y \leq m(y) < \infty$. これで示された. \square

問 5B

実数 a に対して

$$f(a) = \int_{\Gamma} e^{2az-z^2} \frac{dz}{z}$$

とおく. ただし, ε を正の実数として, Γ は下図に示すように複素平面内において実軸上を $-\infty$ から $-\varepsilon$ に進み, 次に円周 $|z| = \varepsilon$ 上を時計回りに ε に進み, その後実軸上を $+\infty$ まで進む積分路とする. このとき, $f(a)$ は a によらない適当な定数 c_1, c_2 を用いて

$$f(a) = c_1 \int_0^a e^{t^2} dt + c_2$$

と表されることを示せ. また, 定数 c_1, c_2 を求めよ. なお, 計算に際し

$$\int_{-\infty}^{+\infty} e^{-t^2} dt = \sqrt{\pi}$$

は既知としてよい.

解答. Γ のうち, $-\infty$ から $-\varepsilon$ までの部分を C_1 , 円周上の $-\varepsilon$ から ε までの部分を C_2 , ε から ∞ までの部分を C_3 とする. $R > 0$ を任意に取り, $|a| < R$ とする.

$$\left| \frac{\partial}{\partial z} \frac{e^{2az-z^2}}{z} \right| = |2e^{2az-z^2}| = 2e^{2a \operatorname{Re} z - \operatorname{Re}(z^2)} \leq \begin{cases} 2e^{2R|z|-z^2} & \text{on } C_1 \\ 2e^{2R\varepsilon+\varepsilon^2} & \text{on } C_2 \\ 2e^{2Rz-z^2} & \text{on } C_3 \end{cases}$$

であり, 右辺の関数は Γ 上可積分なので

$$f'(a) = \int_{\Gamma} \frac{\partial}{\partial a} e^{2az-z^2} \frac{dz}{z} = \int_{\Gamma} 2e^{2az-z^2} dz.$$

$R > 0$ は任意だったからこれは任意の $a \in \mathbb{R}$ で成立. 右辺の被積分関数は \mathbb{C} 上正則だから

$$f'(a) = \int_{-\infty}^{\infty} 2e^{2az-z^2} dz = 2e^{a^2} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-(z-a)^2} dz = 2e^{a^2} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-z^2} dz = 2\sqrt{\pi}e^{a^2}.$$

また, $-C_2$ は円周 $|z| = \varepsilon$ 上を時計回りに ε から $-\varepsilon$ まで進む路であるから

$$\begin{aligned} f(-a) &= \int_{\Gamma} e^{-2az-z^2} \frac{dz}{z} = \int_{-\Gamma} e^{2az-z^2} \frac{dz}{z} = \int_{\infty}^{\varepsilon} + \int_{-C_2} + \int_{-\varepsilon}^{-\infty} \\ &= - \left(\int_{-\infty}^{-\varepsilon} + \int_{C_2} + \int_{\varepsilon}^{\infty} \right) + \int_{C_2} + \int_{-C_2} \\ &= -f(a) - \oint_{|z|=\varepsilon} e^{-2az-z^2} \frac{dz}{z} = -f(a) - 2\pi i \cdot e^{-2az-z^2} \Big|_{z=0} \\ &= -f(a) - 2\pi i. \end{aligned}$$

特に $f(0) = -\pi i$ であるから

$$f(a) = 2\sqrt{\pi} \int_0^a e^{t^2} dt - \pi i.$$

□

平成 15 年度 (2002 年 8 月実施)

問 1

有限次元実線形空間 X, Y に対し, X から Y への線形写像全体を $\text{Hom}(X, Y)$ と記す. $\text{Hom}(X, Y)$ を, 写像の和とスカラー倍により線形空間とみなす. このとき, X の部分線形空間 V と Y の部分線形空間 W に対し,

$$\{f \in \text{Hom}(X, Y) \mid f(V) \subset W\}$$

の次元を, X, Y, V, W の次元を用いて表わせ.

解答. $\dim X = N, \dim Y = M, \dim V = n, \dim W = m$ とする. x_1, \dots, x_n を V の基底, y_1, \dots, y_m を W の基底とし, これらを拡張して x_1, \dots, x_N を X の基底, y_1, \dots, y_M を Y の基底となるようにする. $f_{ij} \in \text{Hom}(X, Y)$ ($1 \leq i \leq N, 1 \leq j \leq M$) を

$$f_{ij}(x_k) = \begin{cases} y_j & (k = i) \\ 0 & (k \neq i) \end{cases}$$

から定まるものとする. f_{ij} たちが $\text{Hom}(X, Y)$ の基底になることを示す. $\sum_{i=1}^N \sum_{j=1}^M \gamma_{ij} f_{ij} = 0$ ($\gamma_{ij} \in \mathbb{R}$) とすると, $1 \leq k \leq N$ に対し

$$0 = \sum_{i=1}^N \sum_{j=1}^M \gamma_{ij} f_{ij}(x_k) = \sum_{j=1}^M \gamma_{kj} y_j.$$

y_1, \dots, y_M は Y の基底だから $\gamma_{k1} = \dots = \gamma_{kM} = 0$. k は任意だから $\gamma_{ij} = 0$. よって f_{ij} は一次独立. 任意に $f \in \text{Hom}(X, Y)$ を取り $f(x_i) = \sum_{j=1}^M \beta_{ij} y_j$ とする. この時

$$f\left(\sum_{i=1}^N \alpha_i x_i\right) = \sum_{i=1}^N \sum_{j=1}^M \alpha_i \beta_{ij} y_j = \sum_{i=1}^N \sum_{j=1}^M \beta_{ij} f_{ij}\left(\sum_{k=1}^N \alpha_k x_k\right)$$

だから f は f_{ij} の一次結合で書ける. 以上から f_{ij} は $\text{Hom}(X, Y)$ の基底である.

$f \in \text{Hom}(X, Y)$ が $f(V) \subset W$ を満たすことは, 任意の $1 \leq k \leq n$ に対し $f(x_k) \in W$ となることと同値. $f = \sum_{i=1}^N \sum_{j=1}^M \gamma_{ij} f_{ij}$ とすると

$$f(x_k) = \sum_{i=1}^N \sum_{j=1}^M \gamma_{ij} f_{ij}(x_k) = \sum_{j=1}^M \gamma_{kj} y_j$$

だから, これが $f(V) \subset W$ を満たすことと $\gamma_{k, m+1} = \dots = \gamma_{kM} = 0$ ($1 \leq k \leq n$) は同値. よって $\{f \in \text{Hom}(X, Y) \mid f(V) \subset W\}$ の次元は $NM - (M - m)n$. \square

問 2

$A(x)$ は x の実係数多項式を要素とする n 次正方行列で,

$$A(0) = I_n \quad (\text{単位行列}),$$

$$A(x+y) = A(x)A(y) \quad (x, y \in \mathbb{R})$$

を満たすとする. このような $A(x)$ をすべて求めよ.

解答. $A(x)$ は多項式成分だから微分可能.

$$A'(x) = \lim_{\varepsilon \rightarrow 0} \frac{A(x+\varepsilon) - A(x)}{\varepsilon} = \lim_{\varepsilon \rightarrow 0} \frac{A(x)A(\varepsilon) - A(x)}{\varepsilon} = \lim_{\varepsilon \rightarrow 0} A(x) \frac{A(\varepsilon) - A(0)}{\varepsilon} = A(x)A'(0)$$

だから

$$\frac{d}{dx} \left(A(x)e^{-A'(0)x} \right) = (A'(x) - A(x)A'(0))e^{-A'(0)x} = 0.$$

よって x によらない行列 C が存在して $A(x) = Ce^{A'(0)x}$ と書けるが, $A(0) = I$ から $C = I$. 従って $A(x) = e^{A'(0)x}$. ここで

$$A(x) = \sum_{n \geq 0} \frac{x^n}{n!} (A'(0))^n$$

は多項式成分だから, $N \geq 0$ があって $n \geq N$ なる任意の n について $(A'(0))^n = 0$, すなわち $A'(0)$ はベキ零であることが必要. 逆に $A'(0)$ がベキ零なら $e^{A'(0)x}$ は条件を全て満たす. よって

$$A(x) = e^{Px} \quad (P \in M_n(\mathbb{R}) \text{ はベキ零行列}).$$

□

問 3

M を 3 次実正則行列とする. M^n ($n \in \mathbb{Z}$) の各成分が有界ならば, $M\vec{x} = \vec{x}$ または $M\vec{x} = -\vec{x}$ を満たす $\vec{0}$ でないベクトル $\vec{x} \in \mathbb{R}^3$ が存在することを示せ.

解答. M の固有値を λ , 対応する固有ベクトルを $v = {}^t(v_1, v_2, v_3)$ とする. v_1, v_2, v_3 のうち少なくとも 1 つは 0 でないから, それを v_i とする. M は正則だから $\lambda \neq 0$. また, $M^n v = \lambda^n v$ ($n \in \mathbb{Z}_{\geq 0}$) の左辺は仮定から有界だから, 第 i 成分から $\lambda^n v_i$ は $n \in \mathbb{Z}_{\geq 0}$ で有界. よって $0 < |\lambda| \leq 1$. 一方 $Mv = \lambda v$ から $M^{-1}v = \lambda^{-1}v$ なので, M^{-1} は固有値 λ^{-1} を持つ. $M^{-n}v = \lambda^{-n}v$ ($n \in \mathbb{Z}_{\geq 0}$) なので先程と同様にして $|\lambda^{-1}| \leq 1$. 以上から M の任意の固有値は絶対値が 1 である. 今 $M \in GL_3(\mathbb{R})$ だから, M の固有多項式は実数係数 3 次多項式. よって実数の固有値を少なくとも 1 つ持つ. この固有値は ± 1 のどちらかなので, これに対応する固有ベクトルが条件を満たす. \square

問 4

$S = (s_{jk})_{1 \leq j, k \leq n}$ を正定値 n 次実対称行列とし,

$$Q(p_1, \dots, p_n) = (p_1, \dots, p_n) S \begin{pmatrix} p_1 \\ \vdots \\ p_n \end{pmatrix} = \sum_{1 \leq j, k \leq n} s_{jk} p_j p_k$$

とおくとき, 級数

$$\sum_{(p_1, \dots, p_n) \in \mathbb{Z}^n \setminus \{(0, \dots, 0)\}} \frac{1}{Q(p_1, \dots, p_n)^\lambda}$$

が収束するような実数 λ の範囲を求めよ.

解答. S は正定値な実対称行列だから, 直交行列 T があって ${}^tTST = \text{diag}(\lambda_1, \dots, \lambda_n)$ と書ける. ただし $0 < \lambda_1 \leq \lambda_2 \leq \dots \leq \lambda_n$. $p = {}^t(p_1, \dots, p_n)$, ${}^tTp = {}^t(q_1, \dots, q_n)$ とおくと

$$Q(p) = {}^t p T \text{diag}(\lambda_1, \dots, \lambda_n) {}^t T p = \sum_{i=1}^n \lambda_i q_i^2 \leq \lambda_n \sum_{i=1}^n q_i^2 = \lambda_n \|{}^t T p\|^2 = \lambda_n \|p\|^2.$$

同様に $Q(p) \geq \lambda_1 \|p\|^2$ だから, 問題の級数の収束は $\sum_{p \in \mathbb{Z}^n \setminus \{0\}} \frac{1}{\|p\|^{2\lambda}}$ の収束と同値. その部分和を

$$S_m = \sum_{\substack{p \in \mathbb{Z}^n \setminus \{0\} \\ \max_{1 \leq i \leq n} |p_i| \leq m}} \frac{1}{\|p\|^{2\lambda}} = \sum_{k=1}^m \sum_{\substack{p \in \mathbb{Z}^n \setminus \{0\} \\ \max_{1 \leq i \leq n} |p_i| = k}} \frac{1}{\|p\|^{2\lambda}}$$

とし, $A_k = \#\{p \in \mathbb{Z}^n \setminus \{0\}; \max_{1 \leq i \leq n} |p_i| = k\}$ とおく. $\max_{1 \leq i \leq n} |p_i| = k$ の時 $k^2 \leq \|p\|^2 \leq nk^2$ だから, S_m の収束は $\sum_{k=1}^m \frac{A_k}{k^{2\lambda}}$ の収束と同値. ここで

$$\begin{aligned} A_k &= \#\left\{p \in \mathbb{Z}^n \setminus \{0\}; \max_{1 \leq i \leq n} |p_i| \leq k\right\} - \#\left\{p \in \mathbb{Z}^n \setminus \{0\}; \max_{1 \leq i \leq n} |p_i| \leq k-1\right\} \\ &= ((2k+1)^n - 1) - ((2k-1)^n - 1) = \sum_{j=0}^n \binom{n}{j} (1 - (-1)^{n-j}) (2k)^j \end{aligned}$$

は k についての非負係数 $(n-1)$ 次多項式だから, $A_k = \sum_{j=0}^{n-1} a_j k^j$ ($a_j \geq 0$) とおける. この時

$$a_{n-1} \sum_{k=1}^m \frac{1}{k^{2\lambda-n+1}} \leq \sum_{k=1}^m \frac{A_k}{k^{2\lambda}} \leq \sum_{j=0}^{n-1} a_j \sum_{k=1}^m \frac{1}{k^{2\lambda-j}}$$

である. $\lambda \leq n/2$ の時左辺は発散し, $\lambda > n/2$ の時右辺の各項は $2\lambda - j > n - j \geq 1$ より収束するので右辺も収束する. よって答えは $\lambda > n/2$. \square

問 5

複素平面 \mathbb{C} 上の 4 点 $1, i, -1, -i$ にそれぞれ 1 匹ずつ蟻がおり、各々を A, B, C, D と名づける. 今、時刻 $t = 0$ から、4 匹の蟻が動き始め、蟻 A は常に蟻 B に向かって、蟻 B は蟻 C に、蟻 C は蟻 D に、蟻 D は蟻 A に向かって歩くものとする. (下図参照. この図の意味についての質問は受け付けない. 各自推測せよ.) さらに 4 匹の蟻の歩く速さは同一の定数 c であるものとする. このとき次の (i)(ii) に答えよ.

(i) 蟻 A の動く曲線を求めよ.

(ii) 4 匹の蟻が衝突する時刻を求めよ.

ただし、蟻の大きさは無視せよ.

解答. (i) 時刻 t での蟻 A の位置を $x(t)$ とすると、蟻 B, C, D の位置はそれぞれ $ix(t), -x(t), -ix(t)$ となる. $\overrightarrow{AB} = (i-1)x(t)$ だから、蟻 A の速さについての条件から

$$x'(t) = c \frac{\overrightarrow{AB}}{|\overrightarrow{AB}|} = c \frac{(i-1)x(t)}{\sqrt{2}|x(t)|}.$$

$x(t) = r(t)e^{i\theta(t)}$ と極座標表示すると、 $r(0) = 1, \theta(0) = 0$. 代入して

$$r'e^{i\theta} + ir\theta'e^{i\theta} = \frac{c}{\sqrt{2}}(i-1)e^{i\theta} \quad \therefore r' + ir\theta' = \frac{c}{\sqrt{2}}(i-1)$$

実部と虚部を比べて

$$r' = -\frac{c}{\sqrt{2}}, \quad r\theta' = \frac{c}{\sqrt{2}}.$$

よって $r(t) = 1 - \frac{c}{\sqrt{2}}t$. 第 2 式に代入して

$$\theta' = \frac{\frac{c}{\sqrt{2}}}{1 - \frac{c}{\sqrt{2}}t} \quad \therefore \theta(t) = -\log\left(1 - \frac{c}{\sqrt{2}}t\right)$$

よって蟻 A の動く曲線は

$$x(t) = \left(1 - \frac{c}{\sqrt{2}}t\right) \exp\left(-i \log\left(1 - \frac{c}{\sqrt{2}}t\right)\right).$$

(ii) 4 匹が衝突するのは $x(t) = ix(t) = -x(t) = -ix(t)$ の時、すなわち $x(t) = 0$ のときだから、 $r = 0$.

よって $t = \frac{\sqrt{2}}{c}$. □

平成14年度(2001年8月実施)

問1

$n \geq 1$ は整数とし, A は $A^2 = 0$ を満たす n 次複素正方行列とする. このとき, 条件

$$PAP^{-1} = \begin{pmatrix} \overbrace{\begin{pmatrix} 0 & E_a & 0 \\ 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}}^a \end{pmatrix} \begin{matrix} \}a \\ \}a \\ \}b \end{matrix}$$

を満たす可逆な n 次正方行列 P と, $2a+b=n$ なる整数 $a, b \geq 0$ が存在することを示せ. ただし, E_a は a 次単位行列を表す.

解答. A の固有値を λ , それに対応する固有ベクトルを v とすると $\lambda^2 v = A^2 v = 0$ より $\lambda = 0$. よって A の Jordan 標準形は $Q \in GL_n(\mathbb{C})$ を用いて $Q^{-1}AQ = \text{diag}(J(0, n_1), \dots, J(0, n_k))$ と書ける.

$$\text{diag}(J(0, n_1)^2, \dots, J(0, n_k)^2) = \text{diag}(J(0, n_1), \dots, J(0, n_k))^2 = Q^{-1}A^2Q = 0$$

であるが, $J(0, k)^2 = 0$ となるのは $k = 1, 2$ の時のみだから, A の Jordan 細胞のサイズは 2 以下. よって

$$Q^{-1}AQ = \text{diag}(\underbrace{J(0, 1), \dots, J(0, 1)}_a, \underbrace{0, \dots, 0}_b) \quad (2a+b=n)$$

として良い. $e_i \in \mathbb{R}^a$ を列基本ベクトルとして

$$J = \text{diag}(\underbrace{J(0, 1), \dots, J(0, 1)}_a), \quad X = \begin{pmatrix} e_1 & e_2 & \cdots & e_a \\ & e_1 & e_2 & \cdots & e_a \end{pmatrix} \in M_{2a}(\mathbb{C})$$

とおく. この時

$$XJ = \begin{pmatrix} 0 & e_1 & 0 & e_2 & \cdots & 0 & e_a \\ 0 & 0 & 0 & 0 & \cdots & 0 & 0 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0_a & I_a \\ 0_a & 0_a \end{pmatrix} X,$$

$$|\det X| = \left| \det \begin{pmatrix} e_1 & \cdots & e_a \\ & e_1 & \cdots & e_a \end{pmatrix} \right| = 1 \neq 0$$

である. よって $R = \begin{pmatrix} X \\ I_b \end{pmatrix} \in GL_n(\mathbb{C})$ とおくと

$$\begin{aligned} RQ^{-1}AQ &= \begin{pmatrix} X \\ I_b \end{pmatrix} \begin{pmatrix} J & \\ & 0_b \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} XJ & \\ & 0_b \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} \begin{pmatrix} 0_a & I_a \\ 0_a & 0_a \end{pmatrix} X & \\ & 0_b \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0_a & I_a \\ 0_a & 0_a & \\ & & 0_b \end{pmatrix} R \end{aligned}$$

となるから, $P = RQ^{-1}$ とすれば良い. □

問 2

$m \geq 1, n \geq 1$ は整数, A は $m \times n$ 実行列とする. A を線形写像 $\mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}^m$ と考え, その像を $V(\subseteq \mathbb{R}^m)$ とする. このとき, 行列の積 $A^t A$ を線形写像 $\mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}^n$ と考えれば, V の $A^t A$ による像は V 全体に等しいことを示せ. ただし, ${}^t A$ は A の転置行列を表す.

解答. $A^t A V = A^t A A \mathbb{R}^n = \text{Im } A^t A A, V = A \mathbb{R}^n = \text{Im } A$ だから, $\text{Im } A^t A A = \text{Im } A$ を示せば良い. 今 $\text{Im } A^t A A, \text{Im } A$ はともに \mathbb{R}^m の線型部分空間であり, $\text{Im } A^t A A \subset \text{Im } A$ だから, $\dim \text{Im } A^t A A = \dim \text{Im } A$ を示せば良い.

$$\dim \text{Im } A = n - \dim \text{Ker } A, \quad \dim \text{Im } A^t A A = n - \dim \text{Ker } A^t A A$$

だから, 結局 $\text{Ker } A = \text{Ker } A^t A A$ が示せれば十分. $\text{Ker } A \subset \text{Ker } A^t A A$ は明らか. $x \in \text{Ker } A^t A A$ とすると

$$\begin{aligned} \|{}^t A A x\|^2 &= {}^t x A A^t A A x = {}^t x A 0 = 0 \quad \therefore {}^t A A x = 0 \\ \|A x\|^2 &= {}^t x A A x = {}^t x 0 = 0 \quad \therefore A x = 0 \end{aligned}$$

よって $x \in \text{Ker } A$. これで示された. □

問 3

複素数 z , 整数 $n \geq 1$ に対して 2×2 行列

$$A_n(z) = \frac{1}{n} \begin{pmatrix} z & 1 - z + \frac{1}{z} \\ 0 & 1 + \frac{1}{z} \end{pmatrix}^n$$

を考える. このとき単位円 $\Gamma = \{z \in \mathbb{C}; |z| = 1\}$ に沿う (反時計回りの) 線積分

$$\int_{\Gamma} A_n(z) dz \tag{1}$$

は n によらないことを証明せよ. ただし, (1) は成分ごとに積分を行って得られる行列とする.

解答. $A_n(z) = \frac{1}{n} B_n(z)^n$ とおく. $B_n(z)$ の固有値は $z, 1 + \frac{1}{z}$, それぞれに対応する固有ベクトルは $\begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix}$ だから, $P = \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$ とおくと

$$P^{-1} B_n(z) P = \begin{pmatrix} z & \\ & 1 + \frac{1}{z} \end{pmatrix}.$$

$$\therefore B_n(z)^n = P \begin{pmatrix} z^n & \\ & (1 + \frac{1}{z})^n \end{pmatrix} P^{-1} = \begin{pmatrix} z^n & -z^n + (1 + \frac{1}{z})^n \\ & (1 + \frac{1}{z})^n \end{pmatrix}$$

この z^{-1} の係数は $\begin{pmatrix} 0 & n \\ 0 & n \end{pmatrix}$ だから

$$\int_{\Gamma} A_n(z) dz = \frac{1}{n} \int_{\Gamma} B_n(z)^n dz = \frac{2\pi i}{n} \begin{pmatrix} 0 & n \\ 0 & n \end{pmatrix} = 2\pi i \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$$

で n によらない. □

問 4

\mathbb{N} を非負整数全体からなる集合, $\mathbb{N}^* = \mathbb{N} \cup \{\infty\}$ とし, \mathbb{N} から \mathbb{N}^* への関数全体からなる集合を \mathcal{F} とする. \mathcal{F} からそれ自身への写像 φ を次で定義する: 任意の $f \in \mathcal{F}, n \in \mathbb{N}$ に対して

$$\varphi(f)(n) = \begin{cases} 0 & (n = 1) \\ f([n/2]) + 1 & (n \neq 1). \end{cases}$$

このとき, φ の不動点 (すなわち, $\varphi(f) = f$ を満たす $f \in \mathcal{F}$) をすべて求めよ. ただし, 任意の $n \in \mathbb{N}$ に対して $\infty + n = n + \infty = \infty + \infty = \infty$ とし, Gauss 記号 $[n/2]$ は $n/2$ を超えない最大の整数とする.

解答. $f \in \mathcal{F}$ が φ の不動点なら

$$f(n) = \begin{cases} 0 & (n = 1) \\ f([n/2]) + 1 & (n \neq 1). \end{cases}$$

$f(0) = f([0/2]) + 1 = f(0) + 1$ だから $f(0) \notin \mathbb{N}$. よって $f(0) = \infty$ でなければならないが, これは $\infty + 1 = \infty$ と整合する. 従って $f(0) = \infty$.

$n \in \mathbb{N}_{>1}$ とする. n の 2 進数展開を $n = \sum_{j=0}^{d-1} a_j 2^j$ ($a_j \in \{0, 1\}, a_{d-1} = 1$) とすると

$$\begin{aligned} f(n) &= f\left(\left[\sum_{j=0}^{d-1} a_j 2^{j-1}\right]\right) + 1 = f\left(\sum_{j=1}^{d-1} a_j 2^{j-1}\right) + 1 \\ &= f\left(\left[\sum_{j=1}^{d-1} a_j 2^{j-2}\right]\right) + 2 = f\left(\sum_{j=2}^{d-1} a_j 2^{j-2}\right) + 2 \\ &= \cdots = f(a_{d-1}) + d - 1 \\ &= f(1) + d - 1 = d - 1. \end{aligned}$$

よって $f(n) = (n \text{ を 2 進数で書いたときの桁数}) - 1$ である.

$$\begin{aligned} n > 1 \text{ が 2 進数で } k \text{ 桁} &\iff 2^{k-1} \leq n < 2^k \\ &\iff \log_2 n < k \leq 1 + \log_2 n \\ &\iff k = 1 + [\log_2 n] \end{aligned}$$

だから, $f(n) = (1 + [\log_2 n]) - 1 = [\log_2 n]$.

よって φ の不動点は

$$f(n) = \begin{cases} [\log_2 n] & (n \neq 0) \\ \infty & (n = 0) \end{cases}$$

のみ. □

問 5

正の実数列 $\{a_n\}_{n=1}^{\infty}$ に対して, 無限積 $\prod_{n=1}^{\infty} (1 + a_n)$ が収束しているとする.

(i) $\sum_{n=1}^{\infty} a_n$ が収束することを示せ.

(ii) 任意の $x > 0$ に対して, 無限積

$$\prod_{n=1}^{\infty} (1 + a_n x)$$

が収束することを示せ.

(iii)

$$\lim_{x \rightarrow \infty} \frac{1}{x} \log \left\{ \prod_{n=1}^{\infty} (1 + a_n x) \right\} = 0$$

が成り立つことを示せ.

解答. (i) $f_N(x) = \prod_{n=1}^N (x + a_n)$ とおく. $a_n > 0$ より $f_N(x) \in \mathbb{R}_{>0}[x]$ だから

$$\sum_{n=1}^N a_n = (f_N \text{ の } x^{N-1} \text{ の係数}) < f_N(1) = \prod_{n=1}^N (1 + a_n) \rightarrow \prod_{n=1}^{\infty} (1 + a_n) \quad (N \rightarrow \infty).$$

よって $\sum_{n=1}^N a_n$ は上に有界. $a_n > 0$ から $\sum_{n=1}^N a_n$ は単調増加だからこれは有限値に収束する.

(ii) $x > 0$ の時 $1 + x < e^x$ だから

$$\prod_{n=1}^N (1 + a_n x) < \prod_{n=1}^N e^{a_n x} = \exp \left(x \sum_{n=1}^N a_n \right) \rightarrow \exp \left(x \sum_{n=1}^{\infty} a_n \right) \quad (N \rightarrow \infty).$$

よって $\prod_{n=1}^N (1 + a_n x)$ は上に有界. $1 + a_n > 1$ から $\prod_{n=1}^N (1 + a_n x)$ は (N について) 単調増加なので, これは有限値に収束する.

(iii) (i) より, 任意に $\varepsilon > 0$ を取ると $N > 0$ があって任意の $n > N$ について $0 < \sum_{n>N} a_n < \varepsilon$ となる. また, $x > 0$ の時 $0 < \log(1 + x) < x$ だから

$$\begin{aligned} 0 &< \frac{1}{x} \log \prod_{n=1}^{\infty} (1 + a_n x) = \sum_{n \leq N} \frac{\log(1 + a_n x)}{x} + \sum_{n > N} \frac{\log(1 + a_n x)}{x} \\ &< \sum_{n \leq N} \frac{\log(1 + a_n x)}{x} + \sum_{n > N} a_n < \sum_{n \leq N} \frac{\log(1 + a_n x)}{x} + \varepsilon \rightarrow \varepsilon \quad (x \rightarrow \infty) \end{aligned}$$

である. $\varepsilon > 0$ は任意なので

$$\lim_{x \rightarrow \infty} \frac{1}{x} \log \prod_{n=1}^{\infty} (1 + a_n x) = 0.$$

□

平成 13 年度 (2000 年 8 月実施)

問 1

A は n 次複素正方行列であり, その固有値 a_1, \dots, a_n は相異なるものとする. $\lambda \in \mathbb{C}$ に対し, $AB = \lambda BA$ を満たす n 次複素正方行列 B 全体のなす複素ベクトル空間を $E(\lambda)$ とする:

$$E(\lambda) = \{B; AB = \lambda BA\}$$

- (i) $E(\lambda) \neq \{0\}$ を満たす $\lambda \in \mathbb{C}$ をすべて求めよ. また, そのとき $E(\lambda)$ の次元を決定せよ.
- (ii) $E(1)$ の基底を一組与えよ.

解答. (i) $E(\lambda)$ を $E_A(\lambda)$ と書く. 仮定より $P \in GL_n(\mathbb{C})$ があって $P^{-1}AP = D := \text{diag}(a_1, \dots, a_n)$ と書ける. この時

$$AB = \lambda BA \iff PDP^{-1}B = \lambda BPDP^{-1} \iff DP^{-1}BP = \lambda P^{-1}BPD$$

なので

$$E_A(\lambda) = \{B; DP^{-1}BP = \lambda P^{-1}BPD\} = \{PXP^{-1}; DX = \lambda XD\} = PE_D(\lambda)P^{-1}.$$

よって $E_A(\lambda) = \{0\}$ と $E_D(\lambda) = \{0\}$ は同値. ゆえに $E_A(\lambda) \neq \{0\}$ と $E_D(\lambda) \neq \{0\}$ は同値. $X = (x_{ij}) \in E_D(\lambda)$ を取る. DX の (i, j) 成分は $a_i x_{ij}$, XD の (i, j) 成分は $a_j x_{ij}$ だから, $DX = \lambda XD$ は $a_i x_{ij} = \lambda a_j x_{ij}$ ($1 \leq i, j \leq n$) と同値. よって任意の i, j に対し $x_{ij} = 0$ または $a_i = \lambda a_j$ であるが, 任意の i, j で $x_{ij} = 0$ なら $X = 0$ となるので, $a_i = \lambda a_j$ となる (i, j) が存在することが必要. 逆に $a_i = \lambda a_j$ となる (i, j) が存在すれば, x_{kl} は $a_k = \lambda a_l$ の時任意, そうでない時 0 だから $E_D(\lambda) \neq \{0\}$. また, P は正則だから $\dim E_A(\lambda) = \dim E_D(\lambda)$. よって

$$\lambda = \frac{a_i}{a_j} \ (1 \leq i, j \leq n, a_j \neq 0), \quad \dim E_A(\lambda) = \#\{(i, j); 1 \leq i, j \leq n, a_i = \lambda a_j\}.$$

- (ii) a_1, \dots, a_n は相異なるから,

$$\dim E_A(1) = \#\{(i, j); 1 \leq i, j \leq n, a_i = a_j\} = \#\{(i, i); 1 \leq i \leq n\} = n.$$

また, (i) の X について

$$x_{ij} = \begin{cases} \text{任意} & (a_i = a_j) \\ 0 & (a_i \neq a_j) \end{cases} = \begin{cases} \text{任意} & (i = j) \\ 0 & (i \neq j) \end{cases}.$$

よって $E_D(1)$ の基底は E_1, \dots, E_n . ただし E_i は行列単位 E_{ii} . 基底を正則行列で写しても基底であるから, $E_A(1)$ の基底も E_1, \dots, E_n . □

問 2

$n \geq 2$, x_1, \dots, x_n は独立変数として, n 次正方行列の行列式

$$p(x_1, \dots, x_n) = \det \begin{pmatrix} 1 & x_1 & \cdots & x_1^{n-2} & x_1^n \\ \vdots & \vdots & & \vdots & \vdots \\ 1 & x_n & \cdots & x_n^{n-2} & x_n^n \end{pmatrix}$$

を考える. (注意: 第 n 列の指数は $n-1$ ではなく n である.)

- (i) $1 \leq i < j \leq n$ のとき $p(x_1, \dots, x_n)$ は $x_j - x_i$ で割り切れることを示せ.
- (ii) $p(x_1, \dots, x_n)$ は $x_1 + \cdots + x_n$ でも割り切れることを示せ.
- (iii) $p(x_1, \dots, x_n)$ を 1 次式の積で表わせ.

解答. (i) $x_k (k \neq j)$ を固定すると p は x_j の多項式となる. $x_j = x_i$ の時第 i 行と第 j 行が等しくなるから $p = 0$. よって p は $x_j = x_i$ を根に持つから p は $x_j - x_i$ で割り切れる.

(ii) x_2, \dots, x_n を固定して p を x_1 の多項式と見る. 第 1 行と第 k 列を除いた行列の行列式を d_k とおいて, 第 1 行について展開すると

$$p = d_1 - d_2 x_1 + \cdots + (-1)^n d_n x_1^{n-2} + (-1)^{n+1} d_n x_1^n.$$

d_k は x_1 によらないから, p の x_1^{n-1} の係数は 0. よって p を x_1 の多項式と見た時の根の総和は 0. (i) より $(n-1)$ 個の根は x_2, \dots, x_n だから, 残り 1 つの根は $-x_2 - \cdots - x_n$. よって p は $x_1 - (-x_2 - \cdots - x_n) = x_1 + \cdots + x_n$ で割り切れる.

(iii) (i),(ii) から

$$p(x_1, \dots, x_n) = q(x_2, \dots, x_n) \sum_{k=1}^n x_k \prod_{j=2}^n (x_1 - x_j)$$

と書ける. (ii) の展開の x^n の係数を比べて

$$q = (-1)^{n+1} d_n = (-1)^{n+1} \begin{vmatrix} 1 & x_2 & \cdots & x_2^{n-2} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ 1 & x_n & \cdots & x_n^{n-2} \end{vmatrix} = (-1)^{n+1} \prod_{2 \leq i < j \leq n} (x_j - x_i).$$

よって

$$\begin{aligned} p(x_1, \dots, x_n) &= (-1)^{n+1} \prod_{2 \leq i < j \leq n} (x_j - x_i) \sum_{k=1}^n x_k \prod_{j=2}^n (x_1 - x_j) \\ &= \sum_{k=1}^n x_k \prod_{1 \leq i < j \leq n} (x_j - x_i). \end{aligned}$$

□

問 3

複素数 α に対して

$$B_\alpha = \{z \in \mathbb{C}; \text{数列 } |z^n - \alpha^n| (n = 1, 2, \dots) \text{ が有界} \}$$

とおく. $B_\alpha \neq \{\alpha\}$ となる α をすべて求めよ.

解答. $\cdot |\alpha| \leq 1$ の時, $|z| \leq 1$ なる任意の $z \in \mathbb{C}$ に対し $|z^n - \alpha^n| \leq |z|^n + |\alpha|^n \leq 1 + 1 = 2$ だから $\{z; |z| \leq 1\} \subset B_\alpha$.

$\cdot |\alpha| > 1$ の時, $z \in B_\alpha$ を取る. $|z| > |\alpha|$ なら $|z^n - \alpha^n| = |z|^n |1 - (\alpha/z)^n| \rightarrow \infty (n \rightarrow \infty)$ で不適. $|z| < |\alpha|$ の時も同様に不適. よって $|z| = |\alpha|$ だから $z = \alpha e^{i\theta} (\theta \in \mathbb{R})$ と書ける. この時 $|z^n - \alpha^n| = |\alpha|^n |e^{in\theta} - 1|$ が有界だから, 定数 $M > 0$ が存在して任意の $n = 1, 2, \dots$ に対し $|\alpha|^n |e^{in\theta} - 1| \leq M$. よって $|e^{in\theta} - 1| \leq M |\alpha|^{-n} \rightarrow 0 (n \rightarrow \infty)$ だから $\lim_{n \rightarrow \infty} |e^{in\theta} - 1| = 0$ となることが必要. この時 $\lim_{n \rightarrow \infty} e^{in\theta} = 1$ だから $\theta \in 2\pi\mathbb{Z}$. よって $z = \alpha$. 逆に $\alpha \in B_\alpha$ は明らかだから $B_\alpha = \{\alpha\}$.

以上から条件を満たす α は, $|\alpha| \leq 1$ を満たすものの全て. □

問 4

単位開円板 $D = \{z \in \mathbb{C}; |z| < 1\}$ 上の関数 u を

$$u(z) = \operatorname{Im} \left[\left(\frac{1+z}{1-z} \right)^2 \right]$$

で定める. ただし, Im は虚部を表わす.

- (i) u は D 上の調和関数であることを示せ.
- (ii) $\theta \in \mathbb{R}$ のとき, $\lim_{r \rightarrow 1} u(re^{i\theta})$ を求めよ.
- (iii) u は閉円板 $\bar{D} = \{z \in \mathbb{C}; |z| \leq 1\}$ 上の連続関数に拡張できるか?

解答. (i) $f(z) = f_{\operatorname{Re}}(x+iy) + if_{\operatorname{Im}}(x+iy)$ ($z = x+iy$) が D 上正則とすると,

$$\frac{\partial^2 f_{\operatorname{Im}}}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 f_{\operatorname{Im}}}{\partial y^2} = \frac{\partial}{\partial x} \left(-\frac{\partial f_{\operatorname{Re}}}{\partial y} \right) + \frac{\partial}{\partial y} \frac{\partial f_{\operatorname{Re}}}{\partial x} = 0$$

だから f_{Im} は D 上調和. 今 $\left(\frac{1+z}{1-z}\right)^2$ は D 上正則だから $u(z)$ は D 上調和.

(ii)

$$\frac{1+re^{i\theta}}{1-re^{i\theta}} = \frac{(1+re^{i\theta})(1-re^{-i\theta})}{(1-re^{i\theta})(1-re^{-i\theta})} = \frac{1-r^2+2ir\sin\theta}{1-2r\cos\theta+r^2}$$

だから

$$u(re^{i\theta}) = \frac{4r(1-r^2)\sin\theta}{(1-2r\cos\theta+r^2)^2}.$$

よって $\cos\theta = 1$ の時は $\sin\theta = 0$ より $u(re^{i\theta}) = 0$. $\cos\theta \neq 1$ の時は

$$\lim_{r \rightarrow 1} u(re^{i\theta}) = \frac{4 \cdot 1 \cdot 0 \cdot \sin\theta}{(2-2\cos\theta)^2} = 0.$$

いずれにしても $\lim_{r \rightarrow 1} u(re^{i\theta}) = 0$.

(iii) \bar{D} まで連続に拡張できたとする. u は D 上調和だから, 最大値, 最小値は \bar{D} の境界で取る. (ii) よりそれらはともに 0 だから $u \equiv 0$. これは矛盾. よって \bar{D} まで連続に拡張できない. \square

問 5A

自然数の対を入力にとる次のようなアルゴリズム F を考える.

$$F(m, n) = \begin{cases} n + 1 & m = 0 \text{ のとき} \\ F(m - 1, 1) & m \neq 0 \text{ かつ } n = 0 \text{ のとき} \\ F(m - 1, F(m, n - 1)) & m \neq 0 \text{ かつ } n \neq 0 \text{ のとき} \end{cases}$$

(i) 任意の $n \in \mathbb{N}$ について, $F(2, n) = 2n + 3$ が成り立つことを示せ.

(ii) すべての $(m, n) \in \mathbb{N} \times \mathbb{N}$ について, $F(m, n)$ が一意に定義されていることを示せ.

解答. (i) $F(1, 0) = F(0, 1) = 2$ である. これと $n \neq 0$ の時

$$F(1, n) = F(0, F(1, n - 1)) = F(1, n - 1) + 1$$

となることから $F(1, n) = n + 2$. よって $F(2, 0) = F(1, 1) = 3$. $n \neq 0$ の時

$$F(2, n) = F(1, F(2, n - 1)) = F(2, n - 1) + 2$$

だから $F(2, n) = 2n + 3$.

(ii) 任意の $n \in \mathbb{N}$ について $F(m, n)$ が一意に定義されていることを, m についての帰納法で示す. $m = 0$ の時は定義より $F(0, n) = n + 1$ だから良い. $m - 1$ で正しいとする. $F(m, n) (n \in \mathbb{N})$ が一意に定義されていることを n についての帰納法で示す. $n = 0$ の時, $F(m, 0) = F(m - 1, 1)$ は m についての帰納法の仮定より一意に定義されている. $n - 1$ まで正しいとする. $F(m, n) = F(m - 1, F(m, n - 1))$ であるが, n についての帰納法の仮定より $F(m, n - 1)$ は一意に定義されている. 従って m についての帰納法の仮定より $F(m - 1, F(m, n - 1))$ は一意に定義されている. よって n の時正しい. ゆえに $F(m, n) (n \in \mathbb{N})$ は一意に定義され, m の時も正しい. これで示された. \square

問 5B

自然数 n に対して

$$f_n(x) = \frac{1}{(x+n+1)\sqrt{x+1}} \quad (0 \leq x < \infty)$$

とおく. このとき

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \sqrt{n+1} \sum_{m=0}^{\infty} f_n(m) = \pi$$

を示せ.

解答.

$$\sqrt{n+1} \sum_{m=0}^{\infty} f_n(m) = \sqrt{\frac{n+1}{n}} \frac{1}{n} \sum_{m=0}^{\infty} \frac{1}{\left(\frac{m+1}{n} + 1\right) \sqrt{\frac{m+1}{n}}}$$

である. ここで $\frac{1}{(x+1)\sqrt{x}}$ は $x \geq 0$ において単調減少だから

$$\int_{\frac{m+1}{n}}^{\frac{m+2}{n}} \frac{dx}{(x+1)\sqrt{x}} \leq \frac{1}{n} \frac{1}{\left(\frac{m+1}{n} + 1\right) \sqrt{\frac{m+1}{n}}} \leq \int_{\frac{m}{n}}^{\frac{m+1}{n}} \frac{dx}{(x+1)\sqrt{x}}.$$

これを $m = 0, 1, 2, \dots$ について足して

$$\int_{\frac{1}{n}}^{\infty} \frac{dx}{(x+1)\sqrt{x}} \leq \frac{1}{n} \sum_{m=0}^{\infty} \frac{1}{\left(\frac{m+1}{n} + 1\right) \sqrt{\frac{m+1}{n}}} \leq \int_0^{\infty} \frac{dx}{(x+1)\sqrt{x}}.$$

よって

$$\begin{aligned} \lim_{n \rightarrow \infty} \sqrt{n+1} \sum_{m=0}^{\infty} f_n(m) &= \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{n} \sum_{m=0}^{\infty} \frac{1}{\left(\frac{m+1}{n} + 1\right) \sqrt{\frac{m+1}{n}}} \\ &= \int_0^{\infty} \frac{dx}{(x+1)\sqrt{x}} = \int_0^{\infty} \frac{2dy}{y^2+1} \quad (x = y^2 \text{ と置換}) \\ &= \pi. \end{aligned}$$

□

平成 12 年度 (1999 年 8 月実施)

問 1

行列 A, B, C に対して, 不等式

$$r(ABC) + r(B) \geq r(AB) + r(BC)$$

が成り立つことを証明せよ. 但し, A, B, C のサイズは積 ABC が定義できるようなものとし, $r(\cdot)$ は行列の階数を表す.

解答. $\begin{pmatrix} I & A \\ & I \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} -I & \\ C & I \end{pmatrix}$ は正則だから,

$$\begin{aligned} r(ABC) + r(B) &= r \begin{pmatrix} ABC & \\ & B \end{pmatrix} = r \left(\begin{pmatrix} I & A \\ & I \end{pmatrix} \begin{pmatrix} ABC & \\ & B \end{pmatrix} \begin{pmatrix} -I & \\ C & I \end{pmatrix} \right) \\ &= r \begin{pmatrix} & AB \\ BC & B \end{pmatrix} \geq r(AB) + r(BC). \end{aligned}$$

□

問 2

$\{-1, 0, 1\}$ に値をとる \mathbb{Z} 上の関数全体の集合を \mathcal{F} とする. \mathcal{F} から \mathcal{F} への写像 S を次のように定める: 任意の $f \in \mathcal{F}$ と $n \in \mathbb{Z}$ に対して,

$$S(f)(n) = \begin{cases} 0 & n = 0 \text{ のとき,} \\ f(n-5) & n \neq 0 \text{ のとき.} \end{cases}$$

(i) $S(f) = f$ となる $f \in \mathcal{F}$ の例をふたつ挙げよ.

(ii) \mathcal{F} 上の半順序 \sqsubseteq を次のように定める:

$$f \sqsubseteq g \iff f(n) \neq -1 \text{ を満たす任意の } n \in \mathbb{Z} \text{ に対して } f(n) = g(n).$$

そのとき, $S(f) = f$ を満たす $f \in \mathcal{F}$ の中で \sqsubseteq について最小のものを求めよ.

解答. (i) $S(f) = f$ となることは

$$f(n) = \begin{cases} 0 & (n = 0) \\ f(n-5) & (n \neq 0) \end{cases} \iff \begin{cases} f(5k) = f(0) = 0 & (k = 1, 2, \dots) \\ f(5k+j) = f(l) & (k \in \mathbb{Z}, j = 1, 2, 3, 4) \\ f(-5k) = f(-5) & (k = 1, 2, \dots) \end{cases}$$

と同値. よって例えば

$$f(n) = 0, \quad f(n) = \begin{cases} 1 & (n \in 5\mathbb{Z}) \\ -1 & (n \notin 5\mathbb{Z}) \end{cases}.$$

(ii) $f \in \mathcal{F}$ に対し $A_j(f) = \{n \in \mathbb{Z}; f(n) = j\}$ とおく ($j = 0, \pm 1$). この時

$$\begin{aligned} f \sqsubseteq g &\iff \text{任意の } n \in A_0(f) \cup A_1(f) \text{ に対し } f(n) = g(n) \\ &\iff \text{任意の } n \in A_0(f) \text{ に対し } g(n) = 0, \text{ かつ任意の } n \in A_1(f) \text{ に対し } g(n) = 1 \\ &\iff A_0(f) \subset A_0(g) \text{ かつ } A_1(f) \subset A_1(g) \end{aligned}$$

だから, $f_0 \in \mathcal{F}$ が \sqsubseteq について最小であることは, $A_0(f_0)$ が $A_0(f)$ の中で (包含関係について) 最小, かつ $A_1(f_0)$ が $A_1(f)$ の中で (包含関係について) 最小となることと同値. (i) より任意の $f \in \mathcal{F}$ について $5\mathbb{Z}_{\geq 0} \subset A_0(f)$ だから, $A_0(f_0) = 5\mathbb{Z}_{\geq 0}, A_1(f_0) = \emptyset$ となる $f_0 \in \mathcal{F}$ が \sqsubseteq について最小のもの. よって求めるものは

$$f(n) = \begin{cases} 0 & (n \in 5\mathbb{Z}_{\geq 0}) \\ -1 & (n \notin 5\mathbb{Z}_{\geq 0}) \end{cases}.$$

□

問 3

$f(x)$ を \mathbb{R} 上の連続微分可能な実数値関数とする.

- (i) $f(x)$ の導関数 $f'(x)$ が単調増加ならば, $f(x)$ が凸関数となること, すなわち, 任意の $x, y \in \mathbb{R}$ と $\lambda \in [0, 1]$ に対して

$$f(\lambda x + (1 - \lambda)y) \leq \lambda f(x) + (1 - \lambda)f(y)$$

となることを示せ.

- (ii) ある実数 $c > 0$ が存在して $|f'(x) - f'(y)| \leq c|x - y|$ が任意の $x, y \in \mathbb{R}$ に対して成り立つならば, $f(x)$ は凸関数と 2 次関数の差として表されることを示せ.

解答. (i) 凸関数となる条件において, λ を $1 - \lambda$ で置き換えれば x と y を入れ替えたものが得られるから, $x > y$ の場合を示せば良い. $x > y$ となる x, y を任意に固定し, $F(t) = \frac{f(t) - f(y)}{t - y}$ ($y < t < x$) とおく. この時

$$F'(t) = \frac{1}{t - y} \left(f'(t) - \frac{f(t) - f(y)}{t - y} \right) = \frac{f'(t) - f'(y)}{t - y} \geq 0$$

である. ただし $s \in (y, t)$ であり, 2 番目の等号は平均値の定理による. よって F は単調増加. 任意の $\lambda \in [0, 1]$ に対し $\lambda x + (1 - \lambda)y \in [y, x]$ だから

$$\frac{f(\lambda x + (1 - \lambda)y) - f(y)}{\lambda x + (1 - \lambda)y - y} \leq \frac{f(x) - f(y)}{x - y}.$$

$$\therefore f(\lambda x + (1 - \lambda)y) \leq \lambda f(x) + (1 - \lambda)f(y)$$

$\lambda \in [0, 1], x > y$ は任意だったから f は凸関数.

- (ii) $g(x)$ を 2 次関数であって, その 2 次の係数 a は $2a > c$ を満たすものとする. $h(x) = f(x) + g(x)$ とおくと, 条件より $x > y$ の時

$$\begin{aligned} c(x - y) &\geq |(h'(x) - g'(x)) - (h'(y) - g'(y))| \\ &= |h'(x) - h'(y) - (g'(x) - g'(y))| \\ &= |h'(x) - h'(y) - 2a(x - y)|. \end{aligned}$$

よって $h'(x) - h'(y) \geq (2a - c)(x - y) > 0$ だから h' は単調増加. 従って (i) より h は凸関数なので示された. \square

問 4

a, b, c を実数, α を正の実数とする. 線型常微分方程式の初期値問題

$$\begin{cases} \frac{dx}{dt} = u, & x(0) = a, \\ \frac{d^2u}{dt^2} + 2\alpha \frac{du}{dt} - u = 0, & u(0) = b, \quad \frac{du}{dt}(0) = c \end{cases}$$

の解を $(x_\alpha(t), u_\alpha(t))$ とする.

(i) $u_\alpha(t)$ を求めよ.

(ii) $t > 0$ に対して, $\lim_{\alpha \rightarrow \infty} \frac{1}{\alpha} x_\alpha(\alpha t)$ を求めよ.

解答. (i) $\lambda^2 + 2\alpha\lambda - 1 = 0$ の根は $\lambda = \lambda_\pm := -\alpha \pm \sqrt{\alpha^2 + 1}$. よって定数 A, B を用いて $u_\alpha(t) = Ae^{\lambda_+ t} + Be^{\lambda_- t}$ と書ける. 初期条件から $A + B = b, A\lambda_+ + B\lambda_- = c$ だから

$$A = \frac{c - \lambda_- b}{\lambda_+ - \lambda_-} = \frac{c + b(\alpha + \sqrt{\alpha^2 + 1})}{2\sqrt{\alpha^2 + 1}}, \quad B = \frac{-c + \lambda_+ b}{\lambda_+ - \lambda_-} = -\frac{c + b(\alpha - \sqrt{\alpha^2 + 1})}{2\sqrt{\alpha^2 + 1}}.$$

よって

$$\begin{aligned} u_\alpha(t) &= \frac{c + b(\alpha + \sqrt{\alpha^2 + 1})}{2\sqrt{\alpha^2 + 1}} \exp((- \alpha + \sqrt{\alpha^2 + 1})t) \\ &\quad - \frac{c + b(\alpha - \sqrt{\alpha^2 + 1})}{2\sqrt{\alpha^2 + 1}} \exp((- \alpha - \sqrt{\alpha^2 + 1})t). \end{aligned}$$

(ii)

$$\begin{aligned} \frac{1}{\alpha} x_\alpha(\alpha t) &= \frac{a}{\alpha} + \frac{1}{\alpha} \int_0^{\alpha t} u(s) ds \\ &= \frac{a}{\alpha} + \frac{c + b(\alpha + \sqrt{\alpha^2 + 1})}{2\alpha\sqrt{\alpha^2 + 1}(-\alpha + \sqrt{\alpha^2 + 1})} (\exp((- \alpha + \sqrt{\alpha^2 + 1})\alpha t) - 1) \\ &\quad - \frac{c + b(\alpha - \sqrt{\alpha^2 + 1})}{2\alpha\sqrt{\alpha^2 + 1}(-\alpha - \sqrt{\alpha^2 + 1})} (\exp((- \alpha - \sqrt{\alpha^2 + 1})\alpha t) - 1) \end{aligned}$$

である. ここで $\alpha \rightarrow \infty$ の時

$$\begin{aligned} \frac{c + b(\alpha + \sqrt{\alpha^2 + 1})}{2\alpha\sqrt{\alpha^2 + 1}(-\alpha + \sqrt{\alpha^2 + 1})} &= \frac{\sqrt{\alpha^2 + 1} + \alpha}{2\sqrt{\alpha^2 + 1}} \left(\frac{c}{\alpha} + b \frac{\alpha + \sqrt{\alpha^2 + 1}}{\alpha} \right) \rightarrow 2b, \\ (-\alpha + \sqrt{\alpha^2 + 1})\alpha &= \frac{\alpha}{\sqrt{\alpha^2 + 1} + \alpha} \rightarrow \frac{1}{2}, \\ \frac{c + b(\alpha - \sqrt{\alpha^2 + 1})}{2\alpha\sqrt{\alpha^2 + 1}(-\alpha - \sqrt{\alpha^2 + 1})} &= \frac{-1}{2\sqrt{\alpha^2 + 1}(\alpha + \sqrt{\alpha^2 + 1})} \left(\frac{c}{\alpha} + b \frac{\alpha - \sqrt{\alpha^2 + 1}}{\alpha} \right) \rightarrow 0, \\ (-\sqrt{\alpha^2 + 1} - \alpha)\alpha &\rightarrow -\infty \end{aligned}$$

だから

$$\lim_{\alpha \rightarrow \infty} \frac{1}{\alpha} x_\alpha(\alpha t) = 0 + 2b(e^{t/2} - 1) - 0 = 2b(e^{t/2} - 1).$$

□

問 5

a を $0 \leq a < 1$ を満たす実数, D を $\{z \in \mathbb{C} \mid |z| < 1\}$ とする. 関数族 \mathcal{F}_a を

$$\mathcal{F}_a = \{f: D \rightarrow D \mid f \text{ は正則で } f(0) = a\}$$

と定義する. そのとき, 任意の $w \in D$ に対して, \mathbb{C} の部分集合 $\{f(w) \mid f \in \mathcal{F}_a\}$ を求めよ.

解答. $\varphi: D \rightarrow \mathbb{C}$ を $\varphi(z) = \frac{a-z}{1-az}$ で定める. $1+a^2|z|^2 - (a^2+|z|^2) = (1-a^2)(1-|z|^2) > 0$ より

$$|\varphi(z)|^2 = \frac{a^2 - a(z+\bar{z}) + |z|^2}{1 - a(z+\bar{z}) + a^2|z|^2} < 1$$

だから $\varphi: D \rightarrow D$. また $\varphi(0) = a$ だから $\varphi \in \mathcal{F}_a$.

$$\varphi(\varphi(z)) = \frac{a - \frac{a-z}{1-az}}{1 - a\frac{a-z}{1-az}} = \frac{a(1-az) - (a-z)}{(1-az) - a(a-z)} = \frac{(1-a^2)z}{1-a^2} = z$$

により

$$f(w) = \varphi(\varphi(f(w))) = \frac{a - \varphi(f(w))}{1 - a\varphi(f(w))}.$$

ここで対応 $\mathcal{F}_a \rightarrow \mathcal{F}_0; f \mapsto \varphi(f)$ は全単射である. 実際, $\varphi(f_1) = \varphi(f_2)$ なら両辺に φ を施せば $f_1 = f_2$ となるから単射. また, 任意の $g \in \mathcal{F}_0$ に対し $\varphi(g) \in \mathcal{F}_a$ で $\varphi(\varphi(g)) = g$ だから全射. よって

$$\{f(w); f \in \mathcal{F}_a\} = \left\{ \frac{a - \varphi(f(w))}{1 - a\varphi(f(w))}; f \in \mathcal{F}_a \right\} = \left\{ \frac{a - f(w)}{1 - af(w)}; f \in \mathcal{F}_0 \right\}.$$

従って $\{f(w); f \in \mathcal{F}_0\}$ を求めれば良い. $|z_0| \leq |w|$ となる $z_0 \in D$ を任意に取り, $f(z) = \frac{z_0}{w}z$ とすると, $|f(z)| \leq \frac{|z_0|}{|w|}|z| < 1$ ($z \in D$) だから $f \in \mathcal{F}_0$. $f(w) = z_0$ だから

$$\{z \in D; |z| \leq |w|\} \subset \{f(w); f \in \mathcal{F}_0\}.$$

$f \in \mathcal{F}_0$ は $f(0) = 0$ を満たすから, $\frac{f(z)}{z}$ は D 上正則. よって任意の $r \in (0, 1)$ を取ると最大値原理より

$$\max_{|z| \leq r} \left| \frac{f(z)}{z} \right| = \max_{|z|=r} \left| \frac{f(z)}{z} \right| \leq \frac{1}{r}.$$

$r \rightarrow 1$ とすると (右辺) $\rightarrow 1$ だから $|z| < 1$ 上 $|f(z)| \leq |z|$. 特に $|f(w)| \leq |w|$. よって

$$\{f(w); f \in \mathcal{F}_0\} \subset \{z \in D; |z| \leq |w|\}.$$

従って $\{f(w); f \in \mathcal{F}_0\} = \{z \in D; |z| \leq |w|\}$ だから

$$\{f(w); f \in \mathcal{F}_a\} = \left\{ \frac{a-z}{1-az}; |z| \leq |w| \right\}.$$

□

平成 11 年度 (1998 年 8 月実施)

問 1

V を \mathbb{C} 上の有限次元線型空間とする. U を V の線型部分空間で, $\{0\}$ でも V でもないものとし, $f: U \rightarrow U$ を線型写像とする.

- (i) 線型写像 $g: V \rightarrow V$ で, g の U への制限が f と一致するものが存在することを示せ. このような g を f の V への拡張と呼ぶ.
- (ii) ある $\lambda \in \mathbb{C}$ に対し $f: U \rightarrow U$ が $f(u) = \lambda u$ で与えられるスカラー写像のとき, f の V への拡張で, スカラー写像ではないが固有値はすべて λ であるものが存在することを示せ.

解答. (i) $\dim U = m, \dim V = n$ とする. $1 \leq m \leq n-1$ である. U の基底を x_1, \dots, x_m として, これを延長して x_1, \dots, x_n を V の基底とする. 線形写像 $g: V \rightarrow V$ を

$$g(x_i) = \begin{cases} f(x_i) & (1 \leq i \leq m) \\ 0 & (m+1 \leq i \leq n) \end{cases}$$

から定まるものとする. $x \in U$ は $x = \sum_{i=1}^m \alpha_i x_i$ ($\alpha_i \in \mathbb{C}$) と一意に書けるから,

$$g(x) = \sum_{i=1}^m \alpha_i g(x_i) = \sum_{i=1}^m \alpha_i f(x_i) = f(x).$$

よって $g|_U = f$ だから, この g は条件を満たす.

(ii) 線形写像 $g: V \rightarrow V$ を

$$g(x_i) = \begin{cases} \lambda x_i & (1 \leq i \leq n-1) \\ \sum_{j=1}^{n-1} x_j + \lambda x_n & (i = n) \end{cases}$$

から定まるものとする. この g が条件を満たすことを示す.

$x \in U$ を $x = \sum_{i=1}^m \alpha_i x_i$ ($\alpha_i \in \mathbb{C}$) と書くと,

$$g(x) = \sum_{i=1}^m \alpha_i g(x_i) = \sum_{i=1}^m \alpha_i \lambda x_i = \lambda x$$

だから g は f の V への拡張.

$g: V \rightarrow V$ がスカラー倍写像とすると, $g(x_n) = cx_n$ となる $c \in \mathbb{C}$ が存在する. これより $\sum_{j=1}^{n-1} x_j + (\lambda - c)x_n = 0$ だが, これは x_1, \dots, x_n が 1 次独立であることに矛盾. よって $g: V \rightarrow V$ はスカラー倍写像ではない.

μ を g の固有値, $x = \sum_{i=1}^n \alpha_i x_i$ を対応する固有ベクトルとすると

$$\mu \sum_{i=1}^n \alpha_i x_i = g\left(\sum_{i=1}^n \alpha_i x_i\right) = \sum_{i=1}^{n-1} \alpha_i \lambda x_i + \alpha_n \left(\sum_{i=1}^{n-1} x_i + \lambda x_n\right).$$

よって x_i の係数を比較して

$$\begin{pmatrix} \mu - \lambda & & & -1 \\ & \ddots & & \vdots \\ & & \mu - \lambda & -1 \\ & & & \mu - \lambda \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \alpha_1 \\ \vdots \\ \alpha_n \end{pmatrix} = 0$$

となる. $\mu \neq \lambda$ とすると, 左辺の $n \times n$ 行列の行列式は $(\mu - \lambda)^n \neq 0$ だから $\alpha_1 = \dots = \alpha_n = 0$ となり不適. よって g の固有値は λ のみ.

以上からこの g は条件を満たす. □

問 2

A を n 次複素対角行列で, その対角成分 α_k ($k = 1, 2, \dots, n$) は相異なるものとする. n 次複素正方行列 $B = (b_{ij})$ と絶対値の十分小さな複素数 t に対して, 行列 $A + tB$ の固有値を $\lambda_k(t)$ ($k = 1, 2, \dots, n$) とおく. ただし, $\lambda_k(t)$ は連続で, $\lambda_k(0) = \alpha_k$ ($k = 1, 2, \dots, n$) とする.

(i) 中心が α_k の適当な半径の円 C_k を選ぶと,

$$\lambda_k(t) - \alpha_k = \frac{1}{2\pi\sqrt{-1}} \int_{C_k} (z - \alpha_k) \operatorname{tr}[(zI - A - tB)^{-1}] dz$$

が成り立つことを示せ. ただし, C_k は正の向きにとる. また, tr は行列の跡 (trace) を, I は n 次単位行列を表す.

(ii) $\lambda_k(t)$ の $t = 0$ における Taylor 展開の 2 次までの係数を A と B の成分を用いて表せ.

解答. (i) 仮定から, $P(t) \in GL_n$ があって $P(t)^{-1}(A + tB)P(t) = \operatorname{diag}(\lambda_1(t), \dots, \lambda_n(t))$ と書ける. この時 $zI - A - tB = P(t) \operatorname{diag}(z - \lambda_1(t), \dots, z - \lambda_n(t))P(t)^{-1}$ だから

$$\begin{aligned} \operatorname{tr}[(zI - A - tB)^{-1}] &= \operatorname{tr}[P(t) \operatorname{diag}((z - \lambda_1(t))^{-1}, \dots, (z - \lambda_n(t))^{-1})P(t)^{-1}] \\ &= \operatorname{tr}[\operatorname{diag}((z - \lambda_1(t))^{-1}, \dots, (z - \lambda_n(t))^{-1})] = \sum_{j=1}^n \frac{1}{z - \lambda_j(t)}. \end{aligned}$$

これより

$$\frac{1}{2\pi i} \int_{C_k} (z - \alpha_k) \operatorname{tr}[(zI - A - tB)^{-1}] dz = \frac{1}{2\pi i} \int_{C_k} \sum_{j=1}^n \frac{z - \alpha_k}{z - \lambda_j(t)} dz \quad (*)$$

である. $\lambda_k(t)$ は連続で $\lambda_k(0) = \alpha_k$ は相異なることから, $|t|$ が十分小さい時 $\lambda_k(t)$ は相異なり, $\lambda_k(t)$ は α_k の十分近くにある. よって中心 α_k の円 C_k の半径を十分小さく取れば, C_k の周および内部に $\lambda_j(t)$ ($j \neq k$) を含まず, しかも C_k の内部に $\lambda_k(t)$ があるように出来る. この時 (*) の右辺は $j = k$ の項のみ残り, $\lambda_k(t) - \alpha_k$ に等しい.

(ii) 以下' は t による微分を表す. $X = zI - A - tB$ とおく. $XX^{-1} = I$ を微分して $X'X^{-1} + X(X^{-1})' = 0$ だから $(X^{-1})' = -X^{-1}X'X^{-1}$. よって

$$\begin{aligned} \operatorname{tr}[(X^{-1})'|_{t=0}] &= \operatorname{tr}[-X^{-1}X'X^{-1}|_{t=0}] = \operatorname{tr}[(zI - A)^{-1}B(zI - A)^{-1}] \\ &= \operatorname{tr}[(b_{ij}(z - \alpha_i)^{-1}(z - \alpha_j)^{-1})_{ij}] = \sum_{j=1}^n \frac{b_{jj}}{(z - \alpha_j)^2} \end{aligned}$$

なので

$$\lambda'_k(0) = \frac{1}{2\pi i} \int_{C_k} (z - \alpha_k) \operatorname{tr}[(X^{-1})'|_{t=0}] dz = \frac{1}{2\pi i} \int_{C_k} (z - \alpha_k) \sum_{j=1}^n \frac{b_{jj}}{(z - \alpha_j)^2} dz = b_{kk}.$$

同様に

$$\begin{aligned} \operatorname{tr}[(X^{-1})''|_{t=0}] &= \operatorname{tr}[(-X^{-1}X'X^{-1})'|_{t=0}] = \operatorname{tr}[2X^{-1}X'X^{-1}X'X^{-1}|_{t=0}] \\ &= \operatorname{tr}[2(zI - A)^{-1}B(zI - A)^{-1}B(zI - A)^{-1}] \\ &= \operatorname{tr} \left[\left(2 \sum_{l=1}^n b_{il}b_{lj}(z - \alpha_l)^{-1}(z - \alpha_i)^{-1}(z - \alpha_j)^{-1} \right)_{ij} \right] \\ &= \sum_{j=1}^n 2 \sum_{l=1}^n b_{jl}b_{lj}(z - \alpha_l)^{-1}(z - \alpha_j)^{-2} \end{aligned}$$

から

$$\begin{aligned}
\lambda_k''(0) &= \frac{1}{2\pi i} \int_{C_k} (z - \alpha_k) \operatorname{tr}[(X^{-1})''|_{t=0}] dz \\
&= \frac{1}{2\pi i} \int_{C_k} (z - \alpha_k) \sum_{1 \leq j, l \leq n} 2b_{jl}b_{lj}(z - \alpha_l)^{-1}(z - \alpha_j)^{-2} dz \\
&= 2 \sum_{\substack{1 \leq l \leq n \\ l \neq k}} \frac{b_{kl}b_{lk}}{\alpha_k - \alpha_l}.
\end{aligned}$$

最後の等号は, $z = \alpha_k$ での極の位数に注目すれば $j = k \neq l$ の項のみ残ることによる. よって $\lambda_k(t)$ の Taylor 展開は

$$\lambda_k(t) = \alpha_k + b_{kk}t + 2 \sum_{\substack{1 \leq j \leq n \\ j \neq k}} \frac{b_{kj}b_{jk}}{\alpha_k - \alpha_j} t^2 + \dots.$$

□

問 3

$0 < a < 1$ として, $x \geq 0$ における関数列 $f_n(x)$ を

$$\begin{aligned} f_0(x) &= a, \\ f_n(x) &= e^{-x} f_{n-1}(x) + \int_0^x e^{-(x-y)} (f_{n-1}(y))^2 dy \end{aligned}$$

により定める.

(i) $0 < f_n(x) < 1$ を示せ.

(ii) 各 $x \geq 0$ に対して $\lim_{n \rightarrow \infty} f_n(x)$ が存在することを示せ.

(iii) $f(x) = \lim_{n \rightarrow \infty} f_n(x)$ とおくと, $f(x)$ は単調減少 (非増加) であることを示せ.

解答. (i) n についての帰納法で示す. $n = 0$ の時は自明. $n - 1$ で正しい時 $f_{n-1}(x) > 0$ は明らか. また,

$$f_n(x) < e^{-x} + \int_0^x e^{-(x-y)} dy = e^{-x} + (1 - e^{-x}) = 1$$

より n でも正しい. これで示された.

(ii) $f_n(x) \leq f_{n-1}(x)$ を帰納法で示す. $n = 1$ の時は

$$f_1(x) - f_0(x) = (ae^{-x} + a^2(1 - e^{-x})) - a = (1 - e^{-x})(a^2 - a) \leq 0$$

だから正しい. n で正しい時, (i) より $0 < f_n(x) \leq f_{n-1}(x)$ だから

$$f_{n+1}(x) - f_n(x) = e^{-x}(f_n(x) - f_{n-1}(x)) + \int_0^x e^{-(x-y)} (f_n(y)^2 - f_{n-1}(y)^2) dy \leq 0.$$

よって $n+1$ でも正しい. これより $f_n(x)$ は n について単調減少. また (i) より下に有界だから $\lim_{n \rightarrow \infty} f_n(x)$ が存在する.

(iii) (i) より任意の $x \geq 0$ に対し

$$\int_0^x |e^{-(x-y)} f_{n-1}(y)^2| dy \leq \int_0^x e^{-(x-y)} dy = 1 - e^{-x} < \infty$$

だから, 漸化式で $n \rightarrow \infty$ とすれば Lebesgue の収束定理より

$$f(x) = e^{-x} f(x) + \int_0^x e^{-(x-y)} f(y)^2 dy \quad \therefore (e^x - 1)f(x) = \int_0^x e^y f(y)^2 dy$$

微分して

$$(e^x - 1)f'(x) + e^x f(x) = e^x f(x)^2 \quad \therefore f'(x) = \frac{e^x f(x)(f(x) - 1)}{e^x - 1}$$

(i) より $x > 0$ において $0 \leq f(x) \leq 1$ だから $f'(x) \leq 0$. よって $f(x)$ は単調減少. □

問 4

次の条件を満たす連続関数 $f: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}$ を考える：

任意の実数 x に対して $f(f(x)) = x + 2$ であり、 $f(0)$ は整数.

- (i) f は単調増加であり、 $f(x) > x$ がすべての実数 x について成り立つことを示せ.
- (ii) 任意の整数 m に対して $f(m) = m + 1$ となることを示せ.
- (iii) ある実数 x について $f(x) \neq x + 1$ となる f の例を挙げよ.

解答. (i) $f(x) = f(y)$ とすると $x + 2 = f(f(x)) = f(f(y)) = y + 2$ なので f は単射. f は連続だから、単調増加か単調減少である. 実際 $x < y < z$ で $f(x), f(y) < f(z)$ となるものが存在したとすると、中間値の定理より十分小さい $\varepsilon > 0$ に対し $f(x_0) = f(y_0) = f(z) - \varepsilon$ となる $x_0 \in (x, z), y_0 \in (z, y)$ が存在する. これは f の単射性に反する. 同様に $x < z < y$ であって $f(z) < f(x), f(y)$ となるものも存在しないので、 f は単調. 今 $f(x + 2) = f(f(f(x))) = f(x) + 2$ だから単調減少ではない. よって f は単調増加. また、 $f(x) \leq x$ となる x が存在したとすると $x + 2 = f(f(x)) \leq f(x) \leq x$ で矛盾.

(ii) $f(0) \geq 2$ とすると $f(2) \leq f(f(0)) = 2 \leq f(0) = f(2) - 2$. となり矛盾. 従って $f(0) < 2$. (i) から $f(0) > 0$ だから、仮定と合わせて $f(0) = 1$. これより $f(1) = f(f(0)) = 2$. 任意の x に対し $f(x + 2) = f(x) + 2$ だったから、任意の整数 m に対し $f(m) = m + 1$.

(iii)

$$f(x) = \begin{cases} (x - 2n)^2 + 2n + 1 & (2n \leq x < 2n + 1, n \in \mathbb{Z}) \\ \sqrt{x - (2n + 1)} + 2(n + 1) & (2n + 1 \leq x < 2(n + 1), n \in \mathbb{Z}) \end{cases}$$

とすると

$$\begin{aligned} \lim_{x \nearrow 2n+1} f(x) &= \lim_{x \nearrow 2n+1} (x - 2n)^2 + 2n + 1 = 2(n + 1) = f(2n + 1), \\ \lim_{x \nearrow 2n} f(x) &= \lim_{x \nearrow 2n} \sqrt{x - (2n - 1)} + 2n = 2n + 1 = f(2n) \end{aligned}$$

だから f は \mathbb{R} 上連続. また $f(0) = 1 \in \mathbb{Z}$. $2n \leq x < 2n + 1$ の時 $2n + 1 \leq f(x) < 2(n + 1)$ だから

$$\begin{aligned} f(f(x)) &= f((x - 2n)^2 + 2n + 1) \\ &= \sqrt{(x - 2n)^2 + 2n + 1 - (2n + 1)} + 2(n + 1) \\ &= x + 2. \end{aligned}$$

$2n + 1 \leq x < 2(n + 1)$ の時 $2(n + 1) \leq x < 2(n + 1) + 1$ だから

$$\begin{aligned} f(f(x)) &= f(\sqrt{x - (2n + 1)} + 2(n + 1)) \\ &= (\sqrt{x - (2n + 1)} + 2(n + 1) - 2(n + 1))^2 + 2(n + 1) + 1 \\ &= x + 2. \end{aligned}$$

よって任意の x に対し $f(f(x)) = x + 2$. f は $2n \leq x < 2n + 1$ において下に凸、 $2n + 1 \leq x < 2(n + 1)$ において上に凸であり、 $x \in \mathbb{Z}$ の時 $f(x) = x + 1$ だから、 $x \notin \mathbb{Z}$ の時 $f(x) \neq x + 1$. よってこの f は条件を満たす. \square

問 5A

連続関数 $|\sin x|$ の Fourier 展開

$$|\sin x| = \frac{1}{2}a_0 + \sum_{n=1}^{\infty} a_n \cos nx \quad (-\pi < x < \pi)$$

の係数を決定せよ. 両辺を 2 乗してその Fourier 展開の定数項を比較すると, どんな式が得られるか.

解答.

$$|\sin x| = \frac{1}{2}a_0 + \sum_{n=1}^{\infty} a_n \cos nx = \frac{1}{2}a_0 + \sum_{n=1}^{\infty} a_n \frac{e^{inx} + e^{-inx}}{2} = \frac{1}{2} \sum_{n \in \mathbb{Z}} a_{|n|} e^{inx} \quad (*)$$

の両辺に e^{-ikx} ($k \geq 0$) をかけて $(-\pi < x < \pi)$ 上で積分すると, 右辺は πa_k . 左辺は $k \neq \pm 1$ の時

$$\begin{aligned} \int_{-\pi}^{\pi} e^{-ikx} |\sin x| dx &= \int_0^{\pi} e^{-ikx} \sin x dx - \int_{-\pi}^0 e^{-ikx} \sin x dx \\ &= \int_0^{\pi} e^{-ikx} \frac{e^{ix} - e^{-ix}}{2i} dx - \int_{-\pi}^0 e^{-ikx} \frac{e^{ix} - e^{-ix}}{2i} dx \\ &= \frac{-1}{2} \left(\frac{e^{(-k+1)ix}}{-k+1} - \frac{e^{(-k-1)ix}}{-k-1} \right) \Big|_0^{\pi} - \frac{-1}{2} \left(\frac{e^{(-k+1)ix}}{-k+1} - \frac{e^{(-k-1)ix}}{-k-1} \right) \Big|_{-\pi}^0 \\ &= -\frac{2(1+(-1)^k)}{k^2-1} \\ &= \begin{cases} -\frac{4}{k^2-1} & k: \text{偶数} \\ 0 & k: \text{奇数}, \end{cases} \end{aligned}$$

$k = \pm 1$ の時

$$\int_{-\pi}^{\pi} e^{\mp ix} |\sin x| dx = \int_0^{\pi} e^{\mp ix} \frac{e^{ix} - e^{-ix}}{2} dx - \int_{-\pi}^0 e^{\mp ix} \frac{e^{ix} - e^{-ix}}{2} dx = 0.$$

よって

$$a_n = \begin{cases} -\frac{4}{\pi} \frac{1}{k^2-1} & k: \text{偶数} \\ 0 & k: \text{奇数}. \end{cases}$$

(*) の両辺を 2 乗すると

$$\frac{1}{4} \left(\sum_{n \in \mathbb{Z}} a_{|n|}^2 e^{2inx} + \sum_{m \neq n} a_{|m|} a_{|n|} e^{i(m+n)x} \right) = \sin^2 x = \frac{1 - \cos 2x}{2} = \frac{1}{2} \left(1 - \frac{e^{2ix} + e^{-2ix}}{2} \right)$$

だから, 定数項を比べると

$$\begin{aligned} \frac{1}{2} &= \frac{1}{4} \left(a_0^2 + \sum_{\substack{m \neq n \\ m+n=0}} a_{|m|} a_{|n|} \right) = \frac{1}{4} \left(a_0^2 + 2 \sum_{n \geq 1} a_n^2 \right) \\ &= \frac{1}{4} \left(\left(\frac{4}{\pi} \right)^2 + 2 \sum_{n \geq 1} \left(\frac{-4}{\pi} \frac{1}{(2n)^2-1} \right)^2 \right). \end{aligned}$$

よって

$$\sum_{n \geq 1} \frac{1}{(4n^2-1)^2} = \frac{\pi^2}{16} - \frac{1}{2}.$$

□

問 5B

有限個の文字からなる集合を一つ固定し、これらの文字からなる有限の長さの文字列について考える。長さ n の文字列 $u = a_1a_2 \cdots a_n$ と長さ m の文字列 $v = b_1b_2 \cdots b_m$ に対して、これらを並べて得られる長さ $n+m$ の文字列を

$$uv = a_1a_2 \cdots a_nb_1b_2 \cdots b_m$$

と表す。

このとき、文字列の集合 A, B に対して、

$$X = A \cup BX$$

を満たす文字列の集合 X は存在するか。また、その一意性は成り立つか。ただし、

$$BX = \{ux \mid u \in B, x \in X\}.$$

(ここでは、”長さ 0 の文字列”は考えないことにする。)

解答. $X_0 = \bigcup_{n \geq 0} B^n A$ とすると

$$A \cup BX_0 = A \cup \bigcup_{n \geq 1} B^n A = \bigcup_{n \geq 0} B^n A = X_0.$$

だから条件を満たす。

条件を満たす X は一意であることを示す。まず、任意の $N \in \mathbb{N}$ に対して

$$\begin{aligned} X &= A \cup BX = A \cup B(A \cup BX) = \bigcup_{n=0}^1 B^n A \cup B^2 A \\ &= \cdots = \bigcup_{n=0}^N B^n A \cup B^{N+1} X \end{aligned}$$

が成立する。任意の $x \in X_0$ に対し $x \in B^N A$ となる $N \in \mathbb{N}$ が存在するが、

$$B^N A \subset \bigcup_{n=0}^N B^n A \cup B^{N+1} X = X$$

だから $x \in X$ 。よって $X_0 \subset X$ 。任意に $N \in \mathbb{N}$ を固定する。 $|x| = N$ となる $x \in X$ を任意に取る。 B は長さ 0 の文字列を含まないから、 $B^{N+1} X$ の元の長さは $N+1$ 以上。よって $x \in \bigcup_{n=0}^N B^n A \subset \bigcup_{n \geq 0} B^n A \subset X_0$ 。 N は任意だから $X \subset X_0$ 。これで示せた。□